

宗教雜誌

華蓮白大



第114号

會學價創

35年11月

昭和三十年一月十八日 第三種郵便物認可
昭和三十年八月六日 国鉄特別扱承認誌三〇五九号
昭和三十一年十一月一日 発行(毎月一日 発行)

大白蓮華第114号

目 次

グラビア写真 唯一の正法伝える日蓮正宗
総本山の年中行事から

巻頭言 日本民族の在り方……………池田大作	7
特集・総本山と登山会	
世界の中心、富士大石寺……………森田一哉	8
初登山者のために……………星野義雄	10
富士と身延……………石田次男	14
登山会・大御本尊様へのお目通り……………	22
大石寺をめぐる……………	26
東北総支部の現況……………	38
グラビア写真・東北総支部をたずねて	
やさしい仏教用語の解説……………	47
御会式 御影像 七堂伽藍 所化さん	
助教授論文……………	48
二箇相承を論ず……………渡部通子	48
三大秘法抄を論ず……………矢追秀彦	54
座談会読本・③ 生長の家を破す……………	76
体験談 ……………	60
体当たりで貧乏をはねとばす……………	60
関東第四総支部副総支部長 藤井富雄さん	
信心で子どもをりっぱに……………	66
墨田支部婦人部長 広田キミさん	
物語・時代に生きた青年と宗教(その2)…辻 武寿	70
高山樗牛	
高山樗牛の教学……………	74
御書にお認めのインド・中国・日本の歴史……………	78
⑱ 聖徳太子	
第三の広場……………	80
映画評「続親鸞」私の書評「婦人記者No.1」	
社会時評「就職の秋に思う」	
<hr/>	
小説・日蓮大聖人……………湊 邦三	84
佐渡流罪の巻⑳	
山口将吉郎画	
<hr/>	
広布への叫び・読者の声……………	100

表紙写真・日蓮正宗富士大石寺大講堂と富士山
表紙題字・日蓮正宗第六十四世水谷日昇上人猊下

唯一の正法伝える日蓮正宗

今日も登山者でにぎわう
総本山大石寺塔中の参道



宗祖日蓮大聖人以来、広布の時をまって御宝蔵の中に蔽護され、わずかな強信者だけが内拝を許されてきた大御本尊様は、時に応じて奉安殿にお出ましになった。国立戒壇建立の暁に、はじめて正本堂にご安置申しあげ、全国民が拝することができる。大客殿の建立も近い、続いて正本堂だ。広布の時にさきがけて大御本尊様にお目どおりできた身の福運を感じて、喜びにもえて折伏に励もうてはないか（写真は内拝をゆるされて御開扉をうける学会員）



御
会
式



本山でのお会式は、大聖人の永遠の生命を祝って厳しゆくに行なわれる。古式盃の儀式も、広布を祝うものである

総本山の 年中行事 から

お
虫
払
い
法
要

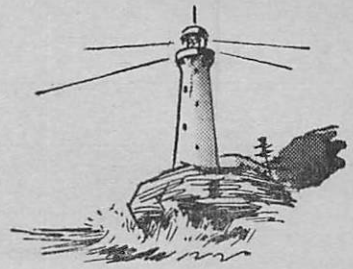


ご宝蔵より宗務総監の先導で客殿へお出ましになる長持ち。大聖人御真筆の御本尊をはじめ数々のご宝物は、日蓮正宗の正しさを物語るものだ。

お虫払いのとき拝観できるご宝物のうち、大聖人が雨を祈られて極楽寺良観を現証で打ち破られたときの三具足。



日本民族の在り方



創価学会会長 池田大作

第二次世界大戦後、西ドイツの民族の団結と、祖国復興への息吹は、めざましきものがあつた。また、唯物思想とはいへ、中共の民族の団結と興隆をめぐす推進も、偉なるものがあるといえよう。

ひるがえって、日本にあつては、多少の経済の進展はあつたとはいへども、その根底たる民族の団結は、全く見られない。むしろ、思想の混乱と階級闘争は、泥沼の中に入りゆく様相を激増してきている。指導者は、おのれ一個の利害のみに生き、評論家等は、民族の行く手を示さず、たがいにけなすのみに終止している。また多くの人人は、確固たる人生観もなく、希望と真の幸福生活への前進をせず、ただ修羅の活動のみにとどまっている。

価値創造の努力を忘れ、安逸をむさぼり、批判することのみを知って、法を求めたことを忘れた民族は、夕日のごとき民族になつてしまふ。大指導原理なき民族の将来は、暗澹たるものがある。

ひとたびは、戦いに破れたとはいへ、日本民族は、世界にあつて優秀な

る民族であると信ずる。われらは、決して、右翼の道を行くものではない。左翼の道に走るものでもない。ひたすら、完全無欠なる『色心不二なるを一極という』との日蓮大聖哲の大生命哲学を根本として、中道をまっしぐらに進むものである。

恩師戸田先生は、『宗教革命は即ち人間革命であり、それが経済革命に、政治革命に、教育革命に通ずる直道であり、無血革命のまま、民族の興隆と平和が得られる』と申された。

宗教の宗とは、根本という意味である。根本とは生命である。天に二日なきごとく、生命解決の根本の教えが、幾百幾千あるはずがない。したがって、人生あつて、初めて科学を生み科学を左右し、文化を創り、政治が運営され、事業がなされ、教育が行なわれ、生活があるのである。宗教は、あくまで、あらゆる現象の根本である。智ある人は、だれ人たりとも、真の宗教を根幹としなければ、日本民族の平和と幸福があり得ないことを認めるべきである。

依義判文抄にいわく、『本門の広布

の根本を表して日本と名づくるなり、謂く、日は即文底独一の本門三大秘法なり、本は即ち此の秘法広宣流布の根本なり故に日本と云うなり、応に知るべし月は西より東に向かう、日は東より西に入る、之を思い合はすべし、然れば即ち日本国は本因妙の教主日蓮大聖人の本国にして、本門三大秘法広宣流布の根本の妙国なり』云云。

唯心思想と唯物思想の衝突のさ中の原子核の時代にあつて、軍備も統一もなき日本民族は、何をもつて世界に伍すべきであろうか。それには、大聖人の大哲理をかぎして全思想界の上にたち、第三文明の建設に邁進することのみが、われらに課せられた宿命であり生きる道であることを訴えたい。

妙法に照らされ、労働者も、資本家も、指導者も、青年も、すべて、平等に仏であり、真の自由と尊厳なる生命にめざめて活動すべきである。その先駆として、百六十万世帯の学会人が、いよいよ強盛なる信心に励み、生活に大功德を示し、職場に歓喜をもやし、また今月も、一人一人を大御本尊様に導こうではないか。

世界の中心、富士大石寺

——急速に発展した登山会——

森田一哉

はじめに

日本国といえは富士山、富士山ほど日本を象徴し、世界の人々に知られ、愛されている山は他にないであろう。またの名を「大日蓮華山」と呼称するのである。

その山の麓に、一器の水を一器に移すがごとく、日蓮大聖人より日興上人、日興上人より日目上人と、六十六代法燈連綿として七百年の歴史をもつ、仏法の真髓日蓮正宗大石寺が、厳然と存在しているのである。富士山を知る人は多いが、大石寺のいわれを知る人は少いのである。ある明治の文豪は、「大石寺を見ずして寺を語るなかれ」と言っている。かつては、武力をもって世界の一等国と任じた日本ではあるが、武力をもって立った者

は、武力によって亡びたのである。こんご日本民族は、何をもって世界の民衆に貢献することができるであろうか。

われらは叫ぶ。唯物哲学を背景にしたソ連と、唯心哲学を背景にした米国の二大陣営の相剋を救済するのは、この富士大石寺におわします日蓮大聖人の生命哲学以外に絶対ない

登山の精神

「創価学会の目的は、不幸な衆生を、大御本尊のもとへ車引きすることである」と戸田城聖先生から教えられたが、学会の登山会こそ、その目的を達成する重要な行事の一つなのである。

大御本尊の車引きとは、人生に迷える不幸

な人々を折伏し、座談会へつれて行くことである。信心を決意した人を、日蓮正宗の寺院へ案内し、御本尊をただかせることなのである。その究極の目的は、御本尊をいただいた人を、ひとりでも多く、一日も早く、富士大石寺にまします、本門戒壇の大御本尊に、お目どおりさせることなのである。

今を去る七百年前、大聖人在世において、幾多の弟子たちが、大聖人を慕ってお目どおりするまでのいろいろな困難は、交通機関の発達した今日、想像することのできえないことなのである。

佐渡からはるばる海をわたり、夫の阿仏房とともに山河を越えて、身延の沢を尋ねた千日尼。身延の沢といえば、「高き屏風を四ついたてるがごとし、峯に上つてみれば草木森たり、谷に下つてたづぬれば大石連連たり、

大狼の音山に充滿し、猿猴のなき谷にひびき……たまたま見えるものは山人が薪木をひろうすがた、時時とぶらう人は昔なれし同朋なり」と、御書にのべられているような土地であり、信心なくしては、とうてい訪ねることができない。

そして、千葉の小湊より、甘のりをご供養された新尼御前。さらに、鎌倉の四条金吾殿にも、「是より後に若やの御旅には御馬をおしませ給うべからず、よき馬にのらせ給へ」と、道中を案じてのお手紙を下されていられる。鎌倉からできえ不安な道のりを、ただ日蓮大聖人様にお会いしたい、ご供養申しあげたい、という純真な信心があつたればこそ、登山ができたのである。

それを思うとき、今日の登山は、まったく隔世の感があるが、登山に対しては、この精神がなければならぬ。

躍進する登山会

登山会の歴史をみるならば、昭和二十七年十月にさかのぼる。土曜日、日曜日を利用して四日、五日の両日、戸田先生を中心にして三百八十名の人々が登山した。大阪より十三名、仙台より二名の会員も参加している。

その後、一年を過ぎて、二十八年の十月には、月に二回登山の制度がひかれ、第一回は二千三百名、第二回には一千七百名計四千名の会員が、その月に登山した。なんと、一

年で十倍の増加であり、学会の発展が、急速度であったことを知ることができる。

しかし、昭和三十五年の今日においては、毎週土曜日の日帰りから火曜日の日帰りまでのべ十二万二千名の登山者を数え、一年間、なんと、百五十万人の人々を大御本尊にお目どおりさせていることになる。

また来年度には、毎週登山では列車の輸送力が限界点に達し、一か月二十日間の連続登山が計画されており、全国各地から、毎日毎日、六、七千の会員が、富士大石寺をめざして登山することになる。この登山会が、やがては一か月の三十日間を、ひっきりなしに、また、一年の三百六十五日を登山することになれば、事実上の広宣流布ではなからうか。そのようなものも、もう目前ではないか。

これからの総本山

第三代会長に池田先生が就任され、その式場において、あとの四年間で大客殿を建立し、戸田先生の七回忌はその客殿で行なうと宣言された。十月二日には、その資材の買いつけに渡米もされたのである。

戸田先生ご在世のときに客殿建立は計画され、カナダの杉の木、阿里山の檜、ガンジスの砂等々、各国の名産を集めて建立せよ、との師の教えを、身をもって実行されているのである。

客殿の建立後においては、正本堂の建立計

画が予想される。正本堂には、奉安殿にまします本門戒壇の大御本尊が安置され、一切衆生ごんげ滅罪の根本道場となるであろう。

各国の名士たちも、民衆を救済する一大宗教を求めて、大石寺を訪問するのも間近であり、それらの人々と仏法を論議し、休息をすする建物が必要ではなからうか。

それよりもまず、登山者の増加にともなつて、宿坊の大改革が急務なのである等々。これからの総本山の威容を考えたとき、富士大石寺を中心とした一大宗教都市が、築きあげられなければならない。

「天竺國をば月氏國と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑國をば日本國と申すあに聖人出で給わざらん、月は西より東に向えり、月氏の仏法の東へ流るべき、相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり」

今を去る三千年前に、インドに釈迦が出現して民衆救済の聖地となし、月氏の仏法滅じんして東土の日本に大聖人の仏法建立し、ここに富士大石寺が仏法の聖地となり、第三次文明発祥の地となつて、東洋の民衆全世界の民衆にしあわせをもたらしていくのである。

(理事)



特集 総本山と登山会

初登山者のために

星野義雄

登山は、末法の御本仏日蓮大聖人様が世界の全民衆のためにお残しくださった弘安二年十月十二日の大御本尊、すなわち、本門戒壇の大御本尊様にお目どおりし、自己自身の罪障消滅と、諸願満足をご祈念するとともに、一日も早く、広

阿仏房を鏡に



大石寺の境内を見学する登山者（二天門のところ）

宣流布が成就することを願うために行なうのである。

それゆえに、また広宣流布しない間に、ご内拝できるということに、この上ない福運を感じ、ひたぶるに仏法を求めて登山すべきである。

日蓮大聖人が、文永年中佐渡におられたとき、日妙聖人という女人は、乙御前という少女を連れて、相州鎌倉から北国佐渡まで、大聖人にお目にかかりたい一心で、海山を越えて渡った。また、佐渡の阿仏房という人は、九十歳の老齢の身で、三回も、弘安年中身延の沢におられた大聖人のところへご供養の品々をたずさえてお目どおりにきた。そのとき大聖人は、みずからお酒をあためられ、阿仏房にたまわったという。阿仏房の感激はいかばかりであつたらう。これが後に「お目通り」の儀式となつたのである。

いまの世でも、歩いて行けば大変である。それに当時は、交通の便も宿泊の便も悪く、山賊、海賊が充満していた。そのなかで登山したのは、純真な信心以外の何ものでもなかつたのである。

現在では、世のなかも平和で、交通も発達し、九州や北海道の奥からでも、二日間でお山に着くことができる。東京や名古屋などは、日帰り登山もできるのである。この便利さになれて、少しでも物見遊山の気分でする者があつてはならないと思う。

温泉行きをかねて、身延に大聖人様を

おたずねしたやからは、全部追い返されることが、三沢抄にも明らかである。

御本山への忠誠

われわれにとつては、大御本尊様にお目どおりする以上の大事な用事はないのである。この登山に際しての根本精神を会員ひとりひとりが深く理解し、登山会に参加していただきたいと思う。

創価学会は、常に御本山に忠誠をつくし、常にこれをお護りしてきた。

初代会長牧口常三郎先生は、太平洋戦争で日本がいまや亡びんとしているとき

に、また、各派合同問題や神札問題で、日蓮正宗がまさに滅せんとする未曾有の危機に、何物も恐れぬ絶対の確信をもつて、正しく御本山を護られたのである。

また、第二代会長戸田城聖先生は、「戸田の生命のあるかぎりお山を守る」と、申され終始一貫、お山を守られた。

そして、第三代会長池田先生は、本年五月三日の就任式において、「申すまでもなく、わが創価学会は、日蓮正宗の信者の団体であります。したがって、私どもは、大御本尊様にお仕え申しあげ、御法上人猥下にご奉公申しあげることが、学会の根本精神であると信じます。初代会長牧口常三郎先生、また

二代会長、恩師である戸田城聖先生の、総本山に忠誠をつくされたその心を心として、いま私は、全学会員を代表して、日蓮上人猥下に、より以上のご忠誠を誓うものでございます」と申され、また、五月十三日、総本山において、「私は、戸田先生の時代に劣らぬ決心でお仕えする覚悟でございます」と誓われた。

登山会の歴史

登山会の歴史をたずねると、戸田先生が五人十人の学会員を連れられて登山なきつたのが最初である。そして戸田先生が中心となられ、広宣流布への団体活動の一つとして発展してきた。その陰には、会長池田先生がおられて、本山行事、また登山者の指導、運営、青年部の訓練など、現在の形をととのえるまで、ご指導くださったのである。輸送班は、こうして本山内で思いきり活動させてもらつてきた。

戸田先生は、登山会のたびにお山に登られ、月四回制になってからは、ほとんど毎週登山されることになった。そして、お山に忠誠をつくされるときにも、全国各地から続々と登山してくる学会員に、大御本尊様の大功徳を教えられ、質問会などを通じて、また、個人的にも、



遺失物の整理をする女子整理班



迷い子の世話をする輸送班

親しく信心の指導に当られた。

昭和三十三年三月、古今未曾有の本門の大講堂が落成したときの総登山に際しては、お体も大変衰弱しておられたにもかかわらず、理境坊において総指揮をとられた。しかも、一日と十六日には、大講演をなさっている。三十一日、とどおりなく総登山が終了するや、お山を下られ、四月二日にお亡くなりになっておられる。

先生は、早朝、本山を散歩され、勤行は客殿でなさった。日帰りに来て、早朝客殿で勤行をする青年部員の導師をしてくださったこともある。

「客殿のお座がわり御本尊様は、玄関の御本尊様であり、ご開扉を受ける前に、この御本尊様にご祈念し、戒壇の大御本尊様にお取りつぎを願うようにしなさい」と教えてくださった。

先生は、毎回客殿で行なわれた質問会に出席され、病気の問題、家庭不和の問題から深遠な生命論にいたるまで、真心こめてお教え下さった。初期のころは、その後、さらに理境坊において、男女青年部員の「戸田先生を囲む会」においてくんだり、政治、経済に関することから広宣流布のやり方、また、人物論などに青年を啓発して下さった。所化さんを

輸送の打ち合わせをする男子部、理境坊



その席へお呼びして、青年部員との交流をはかられたこともあった。

以前、御開扉のあとで、猥下にお目どおりがゆるされ、お杯をいただいたものである。この「お目どおり」のときに、御法主上人のお出ましをお待ちする間にも、先生は、座ぶとんをお用いにならなかった。うっかり座ぶとんをおすすめするものがあれば、

「お目どおりするのには、座ぶとんにするわけにはいかない」と、厳しくさとされたのである。

また先生は、輸送班員に対して、とくに心を用いられた。早朝、紅白に別れ

て消火訓練をやるときなど、親しく激励のお言葉をいただいたものであった。なお、池田先生のご指導により、この戸田先生をお迎えしての質問会の前に、約一時間ぐらい、青年部幹部が毎回研究発表をやり、教学と弁論の向上をはかられたこともあった。

輸送班・整理班

数多くの人々が無事に登山し、歓喜の姿で下山できるように、青年部員により



登山専用列車を待つ学会員

(品川駅)

輸送班が組織されている。

初期のころは、その回の登山者中の青年部員が、全員で人員調査やら、ホーム整理にあたり、また、伝令、バスの手配等に立ち働いた。広宣流布がまだならぬ時に、幸運にも、本門戒壇の大御本尊様にお目どおりかなう感激から、この登山会を、最高度に盛り上げたいと、真心から活動した。お山を守っておられる戸田先生の手足となり、真の親衛隊たらんとの一念からであった。

登山会は、学会員が、集団として世人の注目を浴びる、大事な機会である。その一挙手一投足に、世間の眼が注がれているのだ。こうした団体行動においても、模範を示してゆかねばならぬ。その原動力は、輸送班である。

また、少しでも信心に濁りがあつたり、ゆるみがあつたりすると、それが事故をひきおこすものとなる。

輸送班の訓練は、青年部のなかでも、もっとも厳格に、徹底して行なわれてきた。言語は明確に、態度は厳正にして紳士的に、動作は機敏に、と、三つのことをあひことばとして、すばらしい勢いで発展をした。ひとりひとりの輸送班も、すべて各部隊より選ばれ、男子部長の面接を通った幹部によって編成されてきたのである。

日ごとに重要になってきた輸送班に対し、当時、参謀室長として全国大作戦の指揮をとられていた池田先生は、輸送班



登山会の蔭の力となって活躍する輸送班

に次のような訓示をなされた。

創価学会男子部
輸送班に告ぐ

「創価学会人が、大御本尊様にお目どおりするために、登山会一切の進行を掌する大事な使命を有するものである。したがって、青年部のなかより、もっとも優秀なる者が、この任に抜擢されていることはいうまでもない。ゆえに、班員各位は、まずこの点を、深く自覚されたいのである。

もったいなくも、総本山富士大石寺の聖域を、昼夜にお守り申しあげるのは、若き清純なる輸送班である。また嬉しくも、戸田会長先生のお側近く、親衛隊の真価を発揮できうるのも、米ある輸送班なのである。そして、全国の学会員が、もっとも期待をなし、喜びとする登山会に、手をとり足をとって、正確に、敏速に、かつ情熱と誠実とをもって事に当たる者は、今、内外注目の的たる輝かしき輸送班ではないか。

『冥の照覧』を信じ、若き時代の仏道修行を輸送班の実践に移し、その得たるところを、青年部に、職場に、存分に生かされんことを切望するものである。

最後に、輸送班は、妙法広布への大輸送であり、ねがわくば、その達成に邁進せられんことを」

この訓示をいただいた輸送班員一同は、一言一句をかみしめかみしめ、そのご期待にそうよう、歓喜してその任に励んだのである。与えられた名譽と、重責、そして身の福運を感じた。そして会長になられた池田先生のお言葉として、機会あるごとに読んで、輸送班の精神として

いる。
輸送班は、ただ輸送だけをやっているのではない。早朝、戸田先生のお墓を清掃し、輸送部隊長を中心として募参を行ない、その後、ご開扉の整理、質問会の手配、丑寅勤行の整理、さらにすすんでは、売店の状態にも気をくばっている。登山会の発展にもなつて、自然にできた売店も、邪宗にみられる観光気分を追放して、気分の良い店に変わりつつある。

大講堂の建立いらい、女子青年部に整理班をつくって、初登山者等の誘導説明にあたってきた。今日では、日帰り登山者の大化城で遺失物の管理、本山内の清掃、登山者の案内と、大事な仕事をもち、はりきっている。あの広い本山内は、こうした陰の力で、いつもきれいである。こうして、清浄な富士大石寺を絶対に汚さないように、あらゆる面で注意がはらわれているのである。(登山部長)

※ ※ ※

※ ※ ※

富

士

と

身

延

石 田 次 男

御本仏を知る者は
富士大石寺か
邪宗身延か

「諸宗皆本尊に迷えり」とは、宗祖日蓮大聖人の一切衆生に対する偉大なる警告である。「主師親を知らざる者は禽獸に同じ」（取意）とのご金言も、また、一切衆生を開目せしめんとの慈言であらせ



られる。人を論ずれば主師親の三徳、法を論ずれば本尊、人法の区別はあつても、人即法、法即人、事の一念三千の御本尊こそ一切衆生の救いであり、この御本仏を信じない者は色心に迷い、純一無二に信じたてまつる者には即身成仏の大利益を与えたもう。これは、日蓮大聖人の御書によって明らかなどころである。この明々たる事実を前提として、富士大石寺と身延山久遠寺とをくらべてみ

よ。わが富士は、八葉の大日蓮華山のふもと、洋々たる駿河湾をはるか南に見下す靈地に、どつしりした奉安殿が姿を見せ、そのなかには六百有余年來、厳護申しあげてきた、宗祖弘安二年十月十二日ご所願の「本門戒壇の大御本尊」がましますのである。他の堂塔や塔中各坊においても、清浄そのものに須弥壇をしつらえて、代々血脉相承を身にせられた、それの御法主人御筆の大御本尊のみを安置申しあげ、その他、何ものも礼拝すべきものはない。大石寺の御本尊は、事の一念三千の大まんだら以外に何ものも見あたらない。

一方、山と川とに区切られた狭あい地を、無理に切り開いて建てられた現在の身延山久遠寺を見よ。彼の地には、釈迦あり、まんだらあり、鬼子母神あり、丈六の小乗仏の像やら千体仏、はては、三光天子やら、イナリのはてまで、まず礼拝物の陳列場はここだといわんばかり。そして、何が本尊であるかについては異説ふんぶん、宗内は、いたずらに議論をくりかえして、何時はてるやらわからないうという。世俗ですら、論より証拠を重んずる。仏法においては、なおさらである。宗祖大聖人は、文証理証の重要性を強調あそばされた上で、なお「文証理証よりは現証にすぎず」とおおせられている。ゆえに、大石寺と久遠寺の、現在、現実にあらわれている本尊に対する、根本的に違った姿を現証としてくらべ、宗

特集 本山と登山会

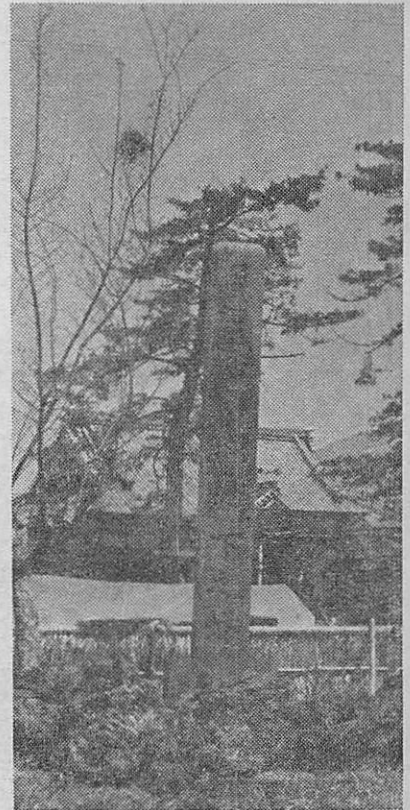
祖大聖人のおおせに照らしてみれば、正邪は素人でも明らかに判断できるであろう。「本尊に迷う」者は、身延か富士か、「主師親」を知る者は、大石寺か久遠寺か。しからば、真の霊山浄土は富山か延山か、無間地獄の本寺はいずれであるか。結論はいうまでもない。

御本尊厳護する日蓮正宗 二七宝物を見せ物の身延

われわれは以上によって、単的に身延が魔山であることを知ることができた。

しかも、歴史上の事実として、かつて七百年の昔に、身延が聖地であったことを否定しているものではない。宗祖日蓮大聖人が九か年の間、この身延の地において、末法万年までも大利益をたれたまわんとして、粉骨の大努力をかたむけてましました当時の史実を、わい曲するものでもないのである。「法尊が故人尊く、人尊きが故に所尊し」とのご金言を忠実に信じてまつり、この鉄則によって、宗祖御在世、および血脈付法の大導師日興上人御在山當時は、身延こそえんぶだい随一の霊地であったことを、衆人にも増してありがたく押し立てまつらんとするものである。

身延の衆徒は、この事実を強調（ただしかれらは日興上人御在山當時のことは決して正確にふれようとしない）して、あたかも、今日の延山が、この七百年前のその



日蓮正宗発祥の地「下之坊」から富士を望む

ままの延長であるかのごとく宣伝につとめ、それによって、富士大石寺の清浄無比なる法燈を否定しようと、やっきであるが、七百年の昔の事実を、何もかれらに教えてもらわなくても、それ以上に、

正確に富士の宗門人は、常識として知っている。だが、身延の魔族共が、現在の久遠寺が、昔の久遠寺そのままの延長であるかのように、世間をたぶらかしている姿に対して、仏法上、強く強く正義のいきどおりを感じ、宗祖御入滅後に、どのような事情があって、霊地が魔山と化し、御本仏のおん魂がいずこに移られたかを、これまた、正確な資料にもとずく史実の上から明らかにして、かれらの邪悪を強折してきたのである。戸田先生が身延にペンペン草をはやしてやると仰せ

られたご真意は、ここにあるのである。われわれは、断じてこの恩師のご決意を実現しなければ申しわけないし、それが国の恩を報ずる道なのだ。

なお、現証をしめくくる意味においてのべてみるならば、わが大石寺においては、一宗の重宝は、すべて御本尊と宗祖の御書御真筆である。これを厳護申しあげることが、一宗の大事とされている。ところが、かの身延では、宝物館なるものをたてて重宝類を陳列し、見料をとって一般に見せているが、一見してわかるニセマンガラから、丸山庇摩のユーレイの絵、はては、亡国真言宗から手に入れた不動などの像にいたるまでが、重宝とされている。宗祖御真筆の大まんだらは、宝物館やどのガランにも、一幅も見あた

らぬ。真筆と称しているものすべて偽物とは、身延の中でさえ認められているありさまだ。大石寺においては、大聖人のご灰骨は、これまた奉安殿にたく守護申しあげているが、身延では、つい先年まで、見物料百円でだれにでも見せていた。この宗祖遺骨と称するもの、一眼見ただけで二人分ぐらいいるとわかる。かつて、久遠寺を調べられた堀尻下のお言葉では、「火葬の骨ではない、土葬のものを洗いなおしたものだ」とおせられていた。また、日蓮正宗では、御本尊下付はもつとも厳格に行なわれるのに、身延では、山内に坊主がまんだらや守りフダ、祈禱フダを売る札所があり、それはかりか、門前の売店で、各種本尊類をびっしりならべて売っていた。これは、最近学会からはげしく責められたられるようになってから、あわてて禁止してしまったが、事実はそうであった。その他、薄墨の衣に白のケサ一色の当宗と、各人各様、色とりどりの衣でかざりたてたかの派の坊主の姿、そのほか何をくらべてみても、逆また逆、あまりにも違いすぎることは衆目の一致するところであり、いずれが宗祖の御本意通りであるかは、これまた言うまでもない。

なぜ日興上人は
宗祖がすまわれた身延を
離山されたのか

では、日蓮大聖人が、最後の年までおすまいであった身延が、どうして今日のようになりはてたのか、これこそ、大事中の大事である。河の流れが濁りきるの場合には、源から濁るのが通例である。それと同じに、身延の濁りは、これまた歴史の流れの源近くまでさかのぼる。すなわち、宗祖ご入滅後の事件にさかのぼるのである。これを、日興上人の身延離山史という。また、真の霊地、多宝富士大日蓮華山大石寺は、一つには、この興尊身延離山史の必然の結果として建立されたのであり、また、一面においては、宗祖日蓮大聖人の三大秘法建立、特に、そのうちの戒壇についてのご遺命にもとづいて建立されたものである。長文となる身延離山の事情の前に、まずこの後者の面からの大石寺出現の必然性を押しておこう。

日蓮大聖人様は
富士の麓に戒壇建立を
遺命された

日蓮大聖人が、三大秘法の名前をはっきりご教示下さったのは、法華取要抄がはじめてである。大聖人ご一生のご化導の中でも、後半の時期に、時期熟してはじめて明かされたのである。だが、法華取要抄においては、名目のみ明かされてただその内容はお示しがなかった。

それからしばらく時が流れ、弘安二年



街頭で売られるインチキ本尊（身延で）

日興上人より上総に在る美作公日保への状、祖滅三年、中古の写本要法寺に在り。

地頭不法ならん時は我も住まじき由御遺言とは承り候へども不法の色も見えず候、其上聖人は日本国に我を持つ人無かりつるに此殿ばかりあり、然れば墓をせんにも国主の用いぬ程は尚難くこそ有らんずれば、いかにも此人の所領に臥すべし御状候し事日興の賜りてこそあそばされてこそ候しか、是は後代まで定めさせ給て候を彼には住ませ給候はぬ義を立て候はんは如何が有るべく候らん、所詮地頭不法に候はば眠んで候なん事か御墓をば捨進せ候はんとこそ覚え候へ、師を捨つべからずと申す法門を立てながら忽ち本師を捨て奉り候はん事大方世間の俗難術無く覚え候、此の如き子細も如何と承り度候

原殿 祖滅七年 日興上人より原野六郎への返状 中古の写本要法寺に在り。

日興が波木井の上下の御為には初発心の御師にて候事は二代三代の末は知らず未だ上にも下にも誰か御忘れ候べきとこそ存じ候へ、身延沢を罷り出で候事面目なき本意なき申し尽し難く候へども打ち還し案じ候へばいづくにても聖人の御義を相継ぎ進せて世に立て

特集・本山と登山会

の本門戒壇の大御本尊ご建立後二年、弘安四年四月にいたって、大田金吾殿にたまわった三大秘法抄において、はじめに、三大秘法の内容をご指示あそばされたのである。時に、聖寿六十歳であらせられた。

すなわち、

「戒壇とは王法仏法に冥じ、仏法王法に合して、王臣一同に三秘密の法を持ちて、有徳王・覚徳比丘のそのむかしを末法濁悪の未来に移さん時、勅宣並に御教書を申し下して、靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきものか、時を待つべきのみ、事の戒法と申すは是なり、三國並に一えんぶ提の人、ざんげ滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釈等も来下してふみ給うべき戒壇なり」とお寄せである。だが、このように戒壇の内容は明らかにされたが、その場所については、ただ、「靈山浄土に似たらん最勝の地」と、その地の最勝であるべきことをお示しであるが、まだ、具体的にそれがどこであるかのご指示はたまわっていない。そして、その翌年に、日興上人への総付嘱書において、それを「指定あそばされたのである」。

このように、法華取要抄から三大秘法抄、そして、身延相承書にいたる一連の深々のご配慮については、日淳上人は「聖慮の深きこととうてい末代の凡夫のうかがい知るあたわざるところ」とご指示あそばされている事実、心を留めて拝

すべきである。

その身延相承書は、「日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状を守るべきなり。」

弘安五年壬午九月 日。日蓮在御判。血脈の次第日蓮日興」

このように、はっきり「富士山」とご指定ある以上には、本門戒壇の大御本尊を奉じて広宣流布すべき総本山は、必ず今の富士の麓の地に移さるべきことは、絶対の課題であったのである。ここに、そ、富士山麓の中でもすぐれた土地であることは、附近を一周し、地図で再考すればまことに明らかである。しからば今、大石寺に戒壇の大御本尊ましまして、宗祖大聖人以来、血脈相承も正しく清浄に法水をたたえ、広宣流布の大法旗が全国になびいているのは、ひとえに、大聖人のご意志そのものと申しあげる以外にはないではないか。法灯が富士に移された以上、身延がその空虚を満たすに、魔のケン族をもつてしている現状も、なんら不思議がないではないか。そして、いつ、いかなる事情があつて、どなたの手によって法灯が身延から富士へ移されたかが判然とするならば、世の迷者の疑惑の氷も、たちまちにとけ去るの

である。それが身延離山史である。

日興上人様 身延を離山される 前後のあらすじ

くわしい年代や個々の事情はあとにして、身延離山史のあらすじをたどって見よう。そして、この全体観の上から改めて年代を追い、個々の事件や事情、経過といったのを、くわしく史料によって追ってゆくならば、この離山史についての身延側の宣伝が、いかに、おのれの邪惡をおおわんがために作爲で満たされているか。そして、日蓮正宗において示される離山史が、いかに正確に史実そのものであるかが、あざやかに対比されることであろう。まずもって、条項的に日興上人ご苦心のあとを拝してまつろう。

①宗祖大聖人ご入滅の際には、六老中日興上人を付法の大導師と決定されて、身延相承書、池上相承書をたまわり、一宗の総貫主であると同時に、身延山久遠寺の別当であると定められた。当時何人も（五老僧といえども）これに異を立てる者はなかった。

②滅後、大聖人の御墓所を守るために、輪番制（一定の時期ごとに交替する制度）を決め、はじめはこの制度が守られていたが、段々ルーズになり、ついに守

候はん事こそ詮にて候へ、さりともと思ひ奉るに御弟子悉く師敵対せられ候ぬ日興一人本師の正義を存じて本懐を遂げ奉り候べき仁に相当りて覚え候へば本意忘るること無く候。

波木井入道日円より日興上人への返状祖滅八年、日円の正本西山本門寺に在り

日円は故聖人の御弟子にて候也、申せば老僧達も同じ同胞にてこそ渡らせ給ひ候に、無道に師匠の御墓を捨て進めて咎なき日円を御不審候はんは如何で仏意にも相叶はせ給ひ候べき、御経に功を入れ進せ候、師匠の御惑を破り候し事恐くば劣り進せず候、前後の差別ばかりこそ候へ、されば仏道の障に成るべしとも覚へず候也、委細には見参にも申て候き、又越前殿委く申さるべく候なり、恐々謹言。

（正応二年）六月五日

日円在り判
伯耆阿闍梨御房。

門徒存知の事、祖滅四十四年ごろ日興上人記、中古の写本大石寺に在り

釈迦如来を造立供養して本尊と爲し奉るべしは一、次に聖人御在生九箇年の間停止せらるる神社参詣其年に之を始め二所（伊豆山権現、箱根権現）三島に参詣を致せり是二、次に一門の勧

られなくなった。すなわち、五老等は、師恩を報じ通す信心がくずれたのである。そして、大聖人の御当忌にも身延に登山しなくなった。これは、日興上人に従いたてまつる信心がないためであつて、池上などに集まつて勝手に法要をいとなんでいた有様である。

③そのうち、民部日向が身延へ登山し、日興上人のもとにおつかえすることになったが、かれは、鎌倉方面の軟風になつてゐた。それが後で問題の種になつた。しかし、はじめはその気配をあまり見せなかつた模様で、日興上人の特別のおぼしめしで学頭職に補せられた。

④身延の地頭波木井日円入道は、日興上人によつて信心ついた人で、この関係から、大聖人の身延御入山も実現したのであつた。かれは、はじめは日興上人のご入山を「大聖人がふたたび御入山になつたと同じ心地がします」とお喜び申しあげたほどである。(日円の手紙)だが、性格はいわゆるガンコなところがあつて、最後にそれが災いとなつてゐる。この日円入道および一族中の相当数が、民部日向にたぶらかされるようになった。

⑤日向は、世法的なソツのない人物といふのが欠点で、身延で学頭職という立場になれてくると、興尊特別の恩恵を

わすれて、その軟風を出すようになり、きびしい信心を脱線して、いろいろ日興上人からおいましめをうけるようになった。だが、それを純真にお受けせず、あまつさえ日円と一族をうまくにぎること腐心した。

⑥こうなつてくると、日円入道も念仏の塔を建てたり、神社に参つたり、いわゆる四個の誇法をおかすようになつて、日興上人のおいましめに対しては、日向から指導をうけているから間違いない、と反ばつするようになった。だが、一族中には、原殿等のように純真に日興上人につきたてまつつてゐた人もあつたのである。

⑦大勢が、このようになってくると、流れはいかんともすることができなかつた。日興上人は、あらゆる努力を尽くされたが、日向と日円を中心とする誇法はやまず、ついに「地頭誇法なれば日蓮の魂は身延には住まず」とおおせられた大聖のご遺訓にゆえに、身延離山の決意を固められた。この時、原殿にたまつたお手紙について「日興上人の血涙のお手紙に断腸の想いを生じない者は宗門人ではない」と堀上人はおおせられている。

⑧この大決心をあそばされてからも、なお、越前房の請によつてその私坊に止まられ、越前房の日円入道訓戒の結

果をこらんあそばされたが、はじめ、やや反省の色を見せた日円が数回の交渉の後にはかえつて反ばつし、ついに、日興上人と直接会談の時に、逆にお怒み申しあげる言葉をほくにいたつた。がんこブラス慢心を露骨にして、ついに初発心以来の日興上人への師恩をすてぎつた。そのため、一切が切れて、日興上人は本門戒壇大御本尊、ご遺骨等の重宝のみ所持されて、門弟共々身延を去られ、富士河合の養家までお移りあそばされた。

⑨その後、南条時光殿(上野殿)が、幼時から日興上人のご指導によつて、強信者であられたが、上人をおむかえして上野の郷大石が原に一字を建立し申し上げた。すなわち大石寺が誕生したのである。日興上人は、ここに法灯を確立されて、大折伏をあそばされた。今、われわれが、日興上人の折伏のおんあとを拝するに、ただただ驚嘆申し上げるばかりである。遠く島根県、山形県方面まで、あの交通不便、加うるに、世相險悪な時代に、しかも、困諫を重ねられつつの大折伏であつて、ひれふしてそのご事蹟を押し奉る以外にない。また大功労者である上野殿は「大行尊靈」の追号をたまわり、六つばにおいて、代々の親下から永遠に追善供養をたまわる栄に浴しておられるのである。われら末流の鑑とすべきである。

進と号し南部郷の内ふくし(富士又富士)の塔供養の奉加之あり是三、次に一門仏事の助成と号して九品念仏の道場一字之を造立莊嚴せり甲斐の国其の処に是四

已上四箇条の誇法を教訓するに日向之を許すと云々、此の義に依て去る其の年月彼の波木井入道の子孫と永く以て師弟の義絶し畢ぬ、依つて御廟に通せざるなり(已下全略)

五人所破抄、祖滅七十三年、日興上人閔日順の記、同時代の写本北山本門寺に在り。

五人の武家に捧ぐる状に云く未だ公家に奏せず、天台の沙門日昭謹んで言上す、先師日蓮は忝くも法華の行者として専ら仏果の直道を顕し天台の余流を耐み地慮の研精を尽くすと云云、天台の沙門日朗謹んで言上す、天台法華宗の沙門日向日頂謹んで言上す。

日興公家に奏し武家に訴へて云はく、日蓮聖人は忝くも上行菩薩の再誕本門弘經の大権なり、本迹既に水火を隔て時機亦天地の如し何ぞ地涌の菩薩を指して苟も天台の末弟と称せんや。

目師讓状、祖滅五十一年富士開山日興上人より三祖日目上人に総跡を譲られたるもの、正本案文共に総本山に厳存す。

特集・総本山と登山会

★ 参 考 年 表 ★

聖寿・西歴・(年号)	[当時の事情]
53 1274 (文永11)	流罪赦免・身延山に入る。
58 1279 (弘安2)	9月熱原法難おこる・10月本門戒壇の大御本尊建立。
60 1281 (弘安4)	身延に十間四面の堂を建立。
61 1282 (弘安5)	9月日興上人へ身延相承・10月池上相承そして日蓮大聖人御入滅・12月身延に埋骨。
滅後1 1283 (弘安6)	1月墓番帳を制定・秋頃日興上人晉山・日尊入信し日興上人に給仕す。
2 1284 (弘安7)	2月波木井氏の身延晉山のお祝い状着く。10月大聖人三回忌、五老登山せず。日興上人・美作公御房御返事書く。
3 1285 (弘安8)	1月波木井日円日興上人に供養状ささぐ。日向墓参に登山学頭職につけらる。
5 1287 (弘安10)	波木井の謗法重なる。
6 1288 (正応元)	10月大聖人七回忌法要・12月日興上人身延離山・12月清長誓状をささぐ。日興上人原殿御書を書く。
7 1289 (正応2)	1月波木井、離山ひきとめはかる・6月決裂日興上人、富士の河合へ去る。
8 1290 (正応3)	10月日興上人、南条時光の請により上野へ移り、大石寺建立、弟子各院を造る、蓮蔵坊(日目)・理境坊(日秀)百貫坊(日仙)・寂日坊(日華)・蓮成坊(日弁)・久成坊(日尊)・了性坊(日乗)
16 1298 (永仁6)	2月重須に諸堂成り日興上人移らる(御隠居所)
19 1301 (正安3)	春頃、日澄、身延の日向と義絶し富士門下となる。
20 1302 (乾元元)	春、日頂、中山より脱して、富士に帰伏す。
29 1310 (延慶3)	3月日朗、重須に日興上人を訪ねる。
52 1333 (元弘3)	2月本六、新六の制定、日興上人御入滅88歳。11月日目上人天奏の途上垂井で御入滅74歳。日興上人・26箇条遺誠置文をかかれる。

⑩ 離山後、身延は日向を中心に細々久遠寺を経営したが、大聖人から日向にたまわった常任御本尊すら、日興上人の手に渡して平然としていた日向であるから、日興上人無きあと、どうしていたものか知れたものではない。日興上人に忠実にお従い申しあげていた原殿等も、亡くなられたりして、離山後三十年、全く身延と富士とは縁が切れた。こうして、根本であるべき「本尊」もなく、正しい大聖人の種脱(たんとく)の深旨もない身延は当然滅亡同様で、徳川時代まで、はじめはほぼ波木井の檀那寺、次いで法華宗の田舎寺という格好で細々息をつないでき

たが、徳川初期に、おまんの方の寄進等から力をえて、追々大ガランを建てて勢力を得るようになった。第二次大戦中に軍部と結たくして、日蓮宗各派との統合に成功して、日蓮宗全体の中心、真実の総本山であるかのように世に思わせるに成功したが、戦後、学会の手によってその仮面をはがされ、魔の本性を見せるようになったのは周知の通りである。

⑪ 付記の形であるが、ついでにのべなければならぬのは、五老僧のことである。日向ももちろんだが、五老は、官権の弾圧等をおそれ、一方では師教を解せず、その上に日興上人に従わず、そら

て「天台沙門」と名のり、本迹一致の邪義をかまえ、脱益の積尊を本尊とし、御本尊をそまつにする等、日興上人の五人所破抄、富士一跡門徒存知事等に拝するようになり、謗法の限りをつくすようになった。後に、大陸に渡った日持、富士へ登山して日興上人より正義をうけたまわり、晩年や反省したかに見える日朗等もあったが、総じて摂受を行じ、誑誦でも本尊問題でも、教義でも、天台の垂流で、それらの末流は、皆めちやくちやであり、現在のような日蓮宗各派になりはてた。これこそ、実に末法の亡国の根元

日興在り判

である。「日蓮を用いぬるとも悪しく敬はば国亡ぶべし」との一言を改めて拝すべきである。

⑩ ひとり大石寺を法城と定められた日興上人のみ、大聖人の正義をたて通され、三祖日目上人は、七十四歳の高齡をもって天奏途上美濃の垂井で遷化あそばされるまで、四十数度の国諫をつづけられる等、純一無雜に大法は立てられてきたのである。以後九世日有上人のご出現あり、また、二十六世日寛上人は中興の祖として身延等を完膚なきまで破折遊ばされ、後代のために、文段や六巻抄をたまわつたことは、誠にありがたいことではないか。

いま、六十六世日達上人の御代まで、広布途上の各上人様方のご苦心は拝するに余りあるのである。法難も、しばしば大石寺をおそつたこともある。戦時中は、そのために大困難と聞われ、学会初代会長牧口先生は、そのために獄中に大御本尊に身を捧げられ、先生のご意圖をつがれて戸田先生おん一人かんと起たれて、学会の世紀の進軍がはじまつたのである。今日、広布の時來つて、富士大石寺の盛觀をむかえているのであるが、今の姿のみを見て、過去六百年の歩みを知らなければ、先師先輩の方々、初代、二代の会長先生にも誠に申しわけがないことである。こうして、代々骨身を

けずつてこられた事実によつてこそ、眞の信心の奮起も生まれることではなからうか。三代會長池田先生の指揮のもとに「戦わんかな」の熱情も生まれるのではなからうか。

史実については、五十九世の堀日亨上人が随一の巨匠の筆をもつておしたためである。以下、上人の論文を拝して正確を期したいと思う。

富士日興上人詳伝から

1 興上と五老僧等との關係

興上と祖命に酬えて延山に主たり。各地に安住する五老等老若の同門・中心多少の異因あらんも、表化することなかりしがごとし。その地頭波木井実長においては、年余にわたる空山を慨したるあまり、歎極りなく、鎌倉より延山再現の賀状を呈せり。しかりといえども、五老門下等多くは、地頭の剛愎にして、興上に偏倚するにあきたらず。また興上の厳しゆくにして安困論の主張・神社禁詣等に快からず。ついに幕輪番すら空制に帰せしめて、延山をかえりみず、たとい、便宜多しといえども追慕の大法要すら、まったく池上において執行するにいたる。これけれどし門葉分裂の濫觴なり。

2 興上と民部向師との關係

明瞭の文献なしといえども、一は富士にありて、佐前にすら大聖に親近するの日多く、一は上総にありて給侍の時少かりしを知る、後世興上に御義口伝あり、向師に御講聞書あり、ともに大聖の奥旨を記せりと称すれども、他に兩者の關係を証すべきの文献なく、かえつて祖滅後にいたつては、多少の文書なきにあら

ず。しかしして鎌倉にある老僧等と、必ずしも行動をともにしたるにあらざれども、向師もまた輪番を欠きたるがごとく、波木井状中に登延の予告を言えるにかかわらず、ただちに実行したりしや明らかならず、ようやく弘安八年ごろに至れるをもつて、院主も地頭もまた大に歓迎して抑留し、学頭の要職に補したるがごとし。しかれども放逸にして、謹嚴の院主に適合せず、かえつて、地頭を誘惑して鎌倉方の軟風を鼓吹し、社参因禱をあえてして、たちまち祖風を紊し、地頭と結托して院主の告諭を用いず。興上離山の素因を作るにいたる。

3 興上と波木井日円および一家との關係

波木井実長の入信は、まったく興上によること諸文献に明瞭として、疑議すべき点なし、ゆえに弘安六年末の入山については、これを見ること大聖の再現のごとく、歡喜して多大の祝意を表せり。し

かるにその身、鎌倉に居すること多くして、興上の親化に遠ざかるにおよんで、自然に鎌倉一般の軟風に浸潤し、宗祖の立正安国の嚴誠については、やや縦容の思いを馴致せり。

民部向師の、上総より來りて学頭たるにおよんで、その化風が、まったく鎌倉と同致なるをもつて、その多数に傾きて、これまったく大聖の底意に、合致するものと信じ、宗祖の禁ぜられし、邪義を執行し三四の謗法をも、あえてするにいたり、むしろ興上の化風をもつて、頑執迂愚と見たるがゆえに、その直接間接の懇諭に、応ぜざるのみならず、ついには怨言を放ちて、等同の思に住し、初発心師弟の深情を忘却するにいたれり。

しかりといえども、一家の中には清長を始めとして、表には、主長の意に違わざれども、内心深く興上長時の薰化を慕う者ありしをもつて、聊か慰安をえて、不日の改悔を期し、大聖の恩徳を忘れざらしめ、もつて墮獄の苦を救うべく、懺念せられたり。

4 離山にいたるまでの熱慮

学頭日向の越權は、単に日円をして、三四の謗法を敢行せしめたるのみならず、その誠止を肯んぜず、ついには、みづから因禱の嚴儀の願文に違例を作るにいたる。事末に似たりといえども、宗致上かえつて重事なり、日円は在国せ

特集・本山と登山会

ず、大衆は多く誘惑せられたれど、また、此れ厳止せしめんとする方術なし
(一)

ここにおいて大法伝持のため、宗義嚴守のためには、汚濁の敗山を捨てて、さらに清浄の勝地に移るの外なし、しかれども此のこと、大にしては院主の体面を傷け、恩師の依托抛ち、小にしては初発心来の道契を絶ち、一門の教児を捨て去るに忍びんや、進退これ谷まる、この窮境を如何にせん。(二)

猿叫ぶ甲峽の身延のみ、必らずしも靈山浄土ならんや。天下を俯瞰する広大の富獄が、むしろ有縁の地に有るにあらずや。信望俗眷ともに浄き法子が、其の山麓に蒞りたるにあらずや。人清ければ法清し、法清れば処また清かるべし。いかにして此の勝縁を顧みざりしことよ、かえって幸なるかな、嚴護の法城を直ちに此に築きて、広布の道場を嚴浄し、大聖の悲願を満足せしむるこそ、仏恩報謝の直道・本門弘通の導師の取るべき、絶妙の手段にあらずや。(三)

千慮万考、ついにかくのごとき大決心をなしたるも、有縁の地、深縁の一門に別れることは、容易にあらず、彼の孔夫子すら生國魯を去るべきに、蹶然たるあたわず、遅々として吾が行くとは、父母の邦を去るの道なり。ゆえに、嗟乎龜山を如何にせんの嘆あり、清長の懇状は、かえって後髪を引かるるの思い切なり。強いて行季を結束して大坊を去るとい

日興上人身延離山の道順



(堀日亭上人の「富士日興上人詳伝」から)

ども、直ちに遠境に猛退すること能わざるの事あるに至る。これ即ち、名字に立脚する、末法凡夫の当然の行為なるを。思わざりき、内には波木井等の謗法を好機として、宿望の富士に勇退すと言えものあり、外には延山等の悪声には忘恩反師の嗚呼を聞かんとは。(四)

5 離山の道程

波木井にある弟子の越前房は、なお日

円入道を教訓すべしとて、強いて興尊を私坊に抑留するの情誼を多として、幾分その改悛を待つために、暫くここに留る。(一)

越前房の第一回の交渉に、日円稍慚愧の意を生じて、興尊の離山を留むべく、一切を委ねたるも、幾回かの往復にかえりて陳弁を弄し、また興尊と会見したるが、具体案に入るや反然として譲らず、

ついに怨嗟の情を明らかにし、豪慢不遜

の態度は、初発心の真情を忘却し、長時の師恩を捨つるにいたる。(二)

この間或は半か年にわたり、越前房の苦心も効を奏せず、ついに富士の河合なる養家に憩まる。(三)

爾後原殿を始め、一門中或は死亡或は疎遠となりて、三十余年の後は、富士身延まったく異越の異境を呈するにいたるは、法運の否塞に関係なしとせんや。

(理事)



登山会

天御木尊様へのお目通り

朝の集合

朝六時、東京駅には青年部の輸送班がもう集合して、きびしい訓練が行なわれている。六時半ごろには、学会員もぼつぼつと集まって来て、定刻の七時(発車二時間前)には、大半の人が集合を完了した。しかし、まだおくれて来る人もいて、支部責任者の人がいそがしくとびまわっている。

いよいよ改札が始まり、ホームに入る。輸送班の指示にしたがって、列車に乗車。団体専用列車であるから、皆、バッチをつけた学会員ばかり。あちこちに立っている地区の旗の間には、楽しそうな顔が並んでいる。輸送班の青年が、立っている人のないようにと、あいている座席をさがしてくれる。

団体専用車は、ほとんど途中の駅に停車せず、目的地の富士駅へと走り続ける。車窓からは、左手に海が見られ、また、富士の雄姿も、右手の窓に入ってくる。発車してから約三時間、富士駅で身延線にのりかえる。

身延線は車輻が少ないから、各車輻とも満員、席をとるため皆、われ勝ちに乗る。どうも、

ちょっとお行儀が悪いようだ。

富士宮には、二十分ほどで着く。ドアが開くと、今まで押しこめられていただけに、皆ほっとしてホームへとび出す。そして、輸送班の指示にしたがって、改札口へ。

駅前には、創価学会様と書かれた貸切バスが待っている。すわれるだけの定員を乗せて、何台も何台も富士宮駅を後にする。富士宮駅から大石寺への道は、かつては凸凹道路であったが、今は、舗装の専用道路が一直線に走っている。三十分も、広々とした富士のすそのを行けば、いよいよ三門に到着する。

三門に到着

何百年も経ているであろう大きな杉木立に囲まれた、朱塗りの三門には、「日蓮正宗総本山」と、しるされている。ここから見える富士の姿はすばらしく、昨年までは、この三門と杉木立を前景に、あなたの富士を写したものが大白蓮華の表紙になっていた。

三門をくぐり、なだらかな階段を昇ると塔中の道へ入る。石畳の両側を澄んだ小川が流れ、タマスダレの白い花が美し

特集・総本山と登山会

く咲き、キンモクセイの甘い香があたりを漂う。いまや秋たけなわだ。この道は、四季のおりに、いろいろの花を咲かせ、登山者の目を楽しませてくれる。春はシダレザクラに、沈丁花の香り、初夏になると、坊の垣のツツジが、塔中を美しくお化粧する。

塔中の道の両側には、坊が並んでいる。理境坊、蓮成坊、百貫坊、久成坊……等々、全部で十二坊。その名は、七百年前、大聖人門下のお弟子たちが建てられたときそのままであるが、建物自体は、すっかり近代化され、明るく、広々としている。

坊の前の道を、女子部の整理班員が散ってくる枯葉を、一枚一枚きれいはいていた。黙々と働らく姿に、清浄で、純真な信心があふれている。

坊に入ると、早速、支部の責任者の人が、部屋のわり当てをしてくれたり、お米を集めたりその他細々とした注意を与えてくれる。さあ、いよいよ本山での一日が始まるのだ。

さあー奉安殿へ

坊での雑用が一段落するころには、御開扉の時間がせまって

きている。一時間前には奉安殿前に集合しなければならぬ。参拝券を門の所で渡して、中へ入る。下足箱へはきものを入れる手もどかしく、階段がある。

約二百畳の奉安殿には、一千五百人余りの人が、一度に御開扉をうける。唱題をしながら待つことしばし、御法上人猊下が、所化さんや、ご僧侶の方々とともに御出ましになる。いよいよ、一圓浮提總与の大御本尊様のご内拝だ。

方便品、寿量品を読み、題目に入る。皆真剣になって、大御本尊様へ唱題を続ける。その間もったいなくも猊下は、御開扉名簿に書かれたわれわれ学会員一人一人の名前をご覧になり、大御本尊様へご祈念を下さっている。

御開扉が終わると、夕食までの間、自由時間がある。戸田先生の墓参をしたり、お華水へ行ったり、売店へ行ったり、シキミを買ったりする。

まず、戸田先生の墓参へ行つた。奉安殿の前から、杉木立の下の涼しい道を通りぬけると、朝日門に出る。門をくぐり御影堂の右手を廻ると、裏手には熱

原の法難で、北条一門の手に倒れた神四郎以下三烈士の墓があり、信者の鏡として、今なおその前にたたずみ、唱題する人が絶えない。附近には、秋の陽をあびて咲く、真紅のハゲイトウや、ダリヤの花が、当時の壮烈さをしのばせるようだ。

戸田先生の墓参



さあお山に着いたと、宿坊へ急ぐ登山者

左手にお墓を、右手に林を見てしばらく行くと、大河原と呼ばれる川にかかる御塔橋を渡り杉木立の道に登る。富士は彼方に、秋の大気の中に、山肌もくつきりとその雄姿をみせている。急な石段を昇り、五重の塔の左手の小高い所に、第二代会長戸田城聖先生のお墓がある。大宣院法護日城居士とかかれた石塔が立ち、シキミに囲まれた墓所。偉大な先生は、ここから、全山を、全日本、東洋、そして全世界を見おろしておられる。

常に線香の消えることなく、学会員の参拝も絶え間がない。「恩師戸田城聖先生、私たちは、東洋の否、全世界の広宣流布をなすべく、最後まで戦いぬきます」広宣流布への誓いの言葉に、新たな決意を胸にひめ、墓参を終るのである。

お華水へ行く道は、三烈士のお墓の所から、さらにまっすぐ山道を約三百メートルも登った所にある。途中、右手には、建築中の納骨堂が、澄んだ秋の大きに槌音をひびかせている。左手は一面に墓地、コスモスが美しく咲きみだれる。

さきほどの大河原にかかる橋

を渡ると、その昔、第三祖日興上人によって発見されたお華水がある。清らかな水をいただく、身も心もひきしまる思いがする。ここから、大杉のむこうに見る富士もまたすばらしい。

帰り道、両手に松葉ツエをもち、少しづつ歩いてくる婦人に会う。かつては、一步も動けなかったというその婦人は、松葉ツエにすがって、やっこの思いで、わずかずつ歩いていたが、「御本尊様のおかげで、こんなに良くなりました。お山はもう何回も来ています。来るたびに良くなっていますよ」と、晴れやかな顔で話してくれた。

おいしい夕食

次に、売店へ行ってみる。三門前から大講堂に通ずる道に、約百軒ほどのお店がある。かつて、戸田先生から「広宣流布が近くなれば、お山もだんだんと栄えてくる。三門前には商店街が並び、デパート、旅館、ホテル等のりっぱな建物ができて、補装道路を、バスやハイヤーが走るようになるんだ」ということをうかがったことがある。当時、三門前は田んぼばかり、何一つ店はなかったのだ、

日蓮正宗の本山は、富士のふもとにけがれない靈地に存在し、俗化しない、清らかな所と想っていたのに、一軒二軒と売店が立ち並んでくるのを、何かすつきりしない気持ちで見ていたのであった。しかし、先生のお話をきいて、ひなびたこれらの売店も、将来のデパートやりっぱな商店となる始めであると感じて、おどろいたものであった。

年々売店も増え、バス道路がきれいになっていくことをみるたびに、先生のお言葉を思い出すのである。午後四時ごろになると、各坊で夜の勤行が始まる。塔中は、読経の声や題目を唱える声で、急ににぎやかになる。

勤行が終わると夕食。坊で作っていたいただいた食事を全員で食べるのであるが、お山へ登山して生命力が豊かになったせい、とても食事がおいしい。

楽しい質問会

夕食後は、大講堂で、大幹部の御書講義と質問会がある。そのころになると、大講堂に明々と灯がついて、夕闇の中に巨大なシルエットが浮かび出る。草むらにすだく虫の声は、

夏への別れであり、やがてツユと消えるわが命のはかなきさをあわれんでいるようだ。それに反して、大講堂内は、永遠の幸を

願う学会員の真剣な姿で、活気にあふれている。七百二畳もある大講堂は、天井も首響効果がよく、すばらしい。約五千人の

人を収容可能である。大講堂内には、大広間の他、談話室、講義室、小会議室、大会議室等があり、また、六階には、貴賓室があつて、屋上のすばらしい庭園が望まれる。

大講堂の横の庭園は、特に狛下がお作りになったもので、中央にはあずまやがあつて、高低のある広い庭は、芝生がしきつめられ、いろいろな木が植えられている。一番手前の右手には戸田先生の歌碑があつて、狛下のお書き下さったものである。妙法の広布の旅は遠けれど

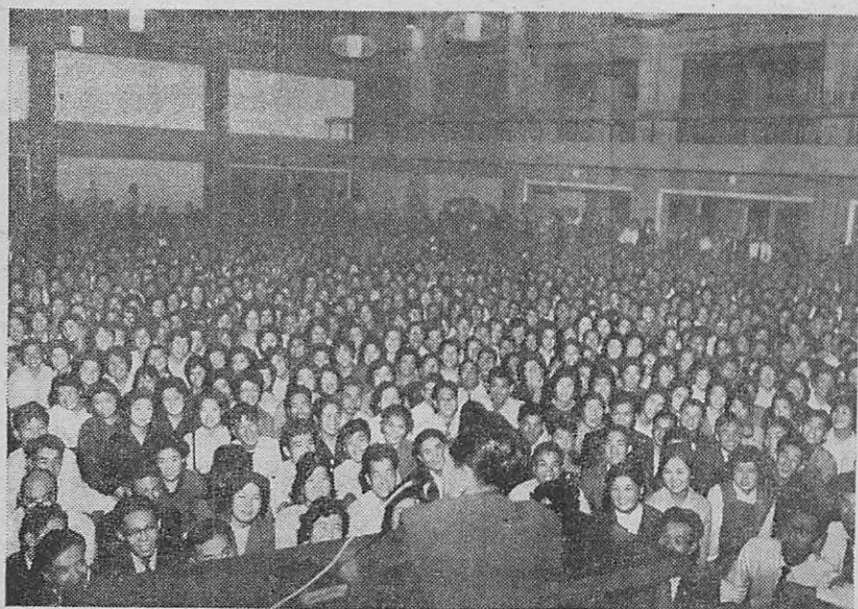
共に励まし共々にゆかなんとの歌碑の横には、キンモクセイが、先生の徳をたたえるかのように、香り高く咲いていた。大講堂の御書講義は、六時から約一時間行なわれる。子どもが後の方でさわいで、にぎやかだったのが残念であった。しかし、間もなく、女子部の整理班の手で、二階のロビーに連れて行かれ元気で走りまわる。

御書講義の後は、やはり大幹部による質問会。質問者は、中央のマイクの前で質問する。珍問も出てくるが、大幹部の適切な指導に拍手がわいてくる。結果が治るかどうか、という質問



広宣流布を祈願される御法主人 狛下の丑寅勤行(客殿)

特集・総本山と登山会



(上) 大幹部を囲んでの楽しい質問会 (大講堂で)
 (下) 二天門から御影堂へ向かう道を通して先生の墓参に

には、大幹部の言葉によって、直った体験者が全員手をあげて、御本尊様の力を証明した。また、近いうちにブラジルへ働きに行く、という人には、やは

り大幹部の励ましの言葉の後、会場の全員が、拍手で前途の無事と、そして、その出発を祝ってあげた。こうして、大幹部と共に過し

た二時間は、間もなく過ぎ、各坊に帰る。このころになると、空には丸いお月様が、きれいな星が輝き始める。塔中の道は、坊の門ごとについている燈籠の

灯で、美しく光っていた。坊に帰ると八時半、各坊ごとに指導会が行なわれ、初登山の感想発表、質問会、指導等があり、学会歌を元気にうたって終

わりとなる。十時には消燈である。不寝番の人が玄関に見張りし、青年部の警備員が塔中を見まわりに入る。そして、お山の夜は、静かにふけていく。

広布を願って

夜中の十二時、あちこちの坊から人々が起きて、丑寅勤行に参加するため、客殿へ向かう。冷たい夜気が、眠気をとばしてくれる。お客殿はせまいので、一泊登山者全員が参加できず、各坊ごとに選ばれる。

広宣流布をご祈願のために、毎晩かかさず七百余年も続いている丑寅勤行に、学会員も、猥下のお供をさせていただくわけである。約一時間余りで勤行は終わる。そして翌朝まで広布を夢みてぐっすりと休む。

朝——大石ヶ原に、夜明けがやってきた。地平線に顔を出した朝日の光りに、ツユが光って、まばゆいくらいだ。黎明をつげる鐘があたりにこだまする。その鐘の音にさそわれるかのようになり、各坊から朝の勤行の声がひびいてくる。ゆるく、力強く、たくましく、広布への道をひとすじに流れて行く。(小林俊子)

めぐって

なにがあるのかわから
方といっしょに、大石
みることにしよう。

総本山案内

- 一、下之坊と妙蓮寺
下之坊、妙蓮寺
- 一、総本山の中央部
総門、三門、塔中十二か坊、
二天門、御影堂
- 一、総本山の東北部
役員寮、雪山坊、石之坊、常
唱堂、東之坊、説法石、学林、
図書館、雪山文庫、宝物館、
蓮葉庵、蓮蔵坊、墓地、五重
塔、戸田先生供養塔、経蔵、

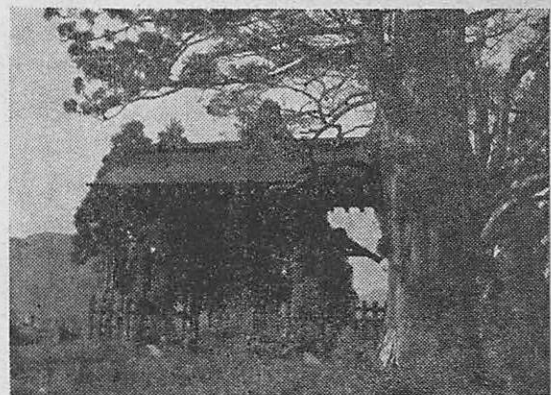
下之坊



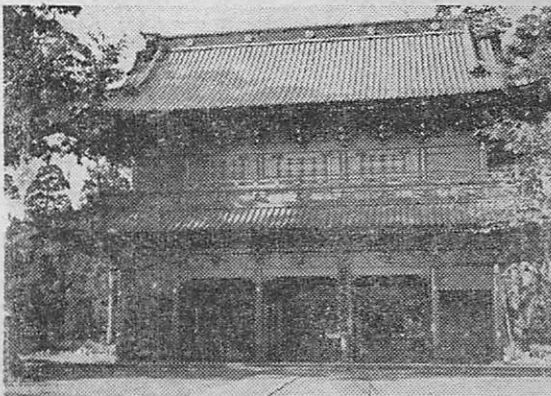
妙蓮寺



総門



三門



お華水 一、総本山の西北部

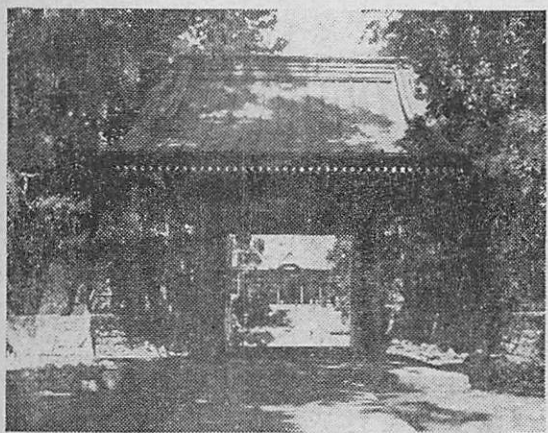
- 朝日門、不開門、客殿、六壺、
大坊、御宝蔵、奉安殿、大化
城、大講堂

下之坊

富士宮から、西富士宮経由で
白糸の滝へ行くバスに乗ると、
大石寺の近くまで行き、長くて
急な坂を登りつめたところに坂
上という停留所がある。

霊峰富士の全姿とその南方の
雄大なすそ野を一望におさめる
景勝の地である。
ここに総本山大石寺の一部で
ある下之坊が存在する。

そのむかし、上野の地頭であ
り、強信な信者であった南条七
郎次郎時光殿の持仏堂であり、
日蓮大聖人が時光殿の父、兵衛
七郎を教化された時に立ち寄ら
れ、また、日興上人が富士方面
の折伏指導に当たられた際の宿
坊となったといわれる。



(上)塔中十二坊

(下)二天門

大石寺を

お山は広くて、どこにないという、初登山の寺のなかを、まわって

弘安五年十月、大聖人のご入滅後、日興上人はじめ遺弟がご灰骨を奉持して、池上から身延に行く途中も、ここに一宿された。

正応元年十二月、日興上人は学頭日向と地頭波木井の師敵対によって謗法の山と化した身延を離山され、一時富士の河合におられたが、まもなく南条時光の招きで、この下之坊（その時は持仏堂）に移られ、ついで大石ヶ原に大石寺を建立なさり、広宣流布の基礎をかためられたのである。

このような由来から、現在も末寺頭として格式が高く、この坊でお会式が行なわれるときには、御法主猊下みずからお出ましになるのである。
本山と一時も離れることなくいまに至っている。

妙蓮寺

下之坊から少し北方、大石寺へ行く途中に下条の妙蓮寺がある。

南条時光殿の屋敷あとといわれ開山は寂日坊日華上人である。

境内の南に日華上人の正墓、また近くに時光殿の墓がある。ところが、このように由緒のある寺院でありながら、太平洋戦争中、邪宗身延派に併合される事態におち入り、大きな被害をうけた。

昭和二十六年に再び正宗に復帰、二十八年四月の五重塔修復記念に総登山した男子青年部員がここに宿泊、戸田先生をお迎えして数々の重要なお話をうかがい、そのあと先生を車駕におのせし、全員隊伍を組んで本山までお送り申しあげたことがある。それ以後、青年部の宿舎と

なっている。

本妙坊、心鏡坊、蓮光坊、本庄坊などの坊と、近くの法善寺、富士宮市の忠正寺などの末寺を持っている。

総門（黒門）

きて、いよいよ総本山大石寺に至って、最初の門は総門である。黒く塗ってあるので黒門ともいう。富士宮から直通バスで来た場合、巨大な山門の前を通過して左折し、大駐車場に入っていくが、その駐車場の少し南方にあるのである。

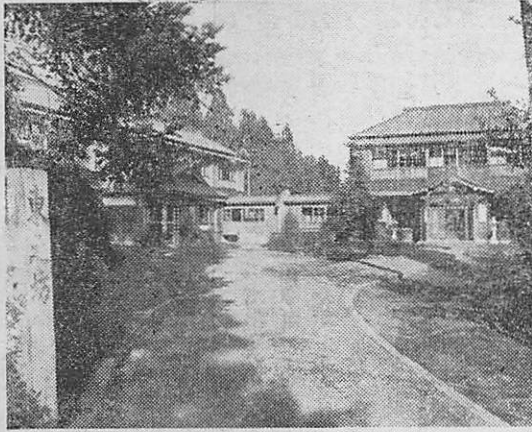
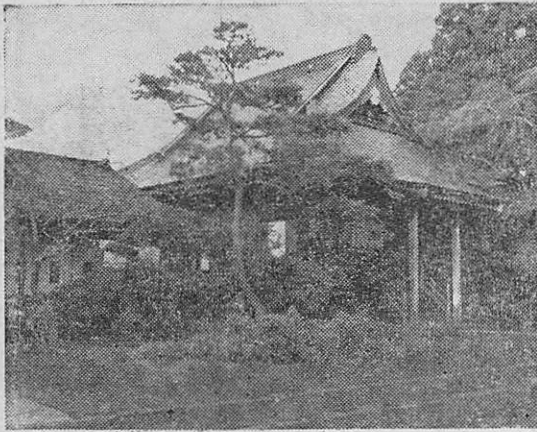
本山十二代の日鎮上人が初めて建立し、十八代の日精上人が再建され、その後また改築されている。

江戸時代は、この門の南に参道が続いていた。

三門（山門）

現在の登山会で、バスから降りて最初にくぐる巨大な楼門がこれである。

高さは十二間三尺（二二・七二尺）で、全国にも稀な大きさの門である。江戸中期の正徳三年、二十五代の日看上人の時、



(上) 常 唱 堂

(下) 東 之 坊

六代將軍徳川家宣公が富士山の
大木七十本、その夫人の天英院、
また二十四代の日永上人と日宥
上人とが巨費を寄進なさったの
をもととして、当時字頭職にあ
った二十六代日寛上人が全国に
はたらきかけられ、五年もかか
ってようやく完成したものであ
る。

その後、何回も修理を加えて
きたが、昭和十年には大々的に
營繕を行なった。
時の大棟梁青木守高氏は、周
圍五尺、長さ一丈五尺の丸柱が
取れるけやきの大木を、あまり
経費をかけないで手に入れるた

めに、宇都宮から仙台まで、山
村から山村を歩きまわって、よ
うやく探し求めたという。

三門の修理一つを取り上げて
みても、このような強信者の苦
心と努力が秘められていること
を知ることができぬ。

三門の前面にも内側にも、か
なりの広場があり、団体登山者
の集合場所となっている。

昭和二十九年、支部一部隊
制がうち立てられた直後の五月
九日、男女五千の青年部員が総
登山を行ったとき、この三門の
内側に結集、折からの雨をつい
て、会長戸田先生の御前を分列

行進し、広布への決意をかため
たのであった。

塔中十二か坊

三門からまっすぐ北へ、枝だ
れ枝の並木の間を石畳の参道が
ゆるやかな坂となって続く。

その両側に塔中十二か坊が立
ち並んでいる。

塔中とは、寺の境内にある支
院を呼ぶのであるから、更に奥
にある蓮蔵坊や東之坊も塔中な
のであるが、いまはこの十二か
坊について述べる。
西側は上の方から理境坊、百

貫坊、寂日坊、観行坊、蓮成坊
南之坊、東側は淨運坊、久成坊
蓮東坊、本住坊、本境坊、了性
坊となっている。

長い間に、いろいろと変遷を
経たが、いずれも、日蓮大聖人
様や日興上人様の直弟子方の開
基である。

道へだてて向かいあつてい
る宿坊を「向かい宿坊」と呼び、
お互に檀那寺の關係にある。つ
まり、本住坊と観行坊は向かい
あつているから、観行坊でない
か法事のあるときは、本住坊の
ご僧侶が行つてやられるのであ
る。

二 天 門

さて、参道をさらにまっすぐ
進み、急な石段をのぼったところ
に二天門がある。これは中門
ともいい、東の大持国天、南の
大増長天が代表して本山を守る
意味である。十八代日精上人の
時の建立である。

御影堂(御堂)

この二天門の奥に御影堂があ
る。略して御堂とも呼ばれてい
る。室町時代の嘉慶二年、六世日

時上人のとき、京都から当時名
のあつた仏師越前法橋快恵を呼
んでつくらせた大聖人様の等身
大の御影様が安置されてある。

江戸時代初期の寛永九年、十
八代日精上人の時、阿波徳島の
大名蜂須賀至鎮の夫人敬台院の
寄進である。

敬台院は、小笠原秀政の娘で
有名な蜂須賀小六のむすこの至
鎮に、徳川家康の養女として嫁
入りした。蜂須賀小六が京都要
法寺の信者であつたことから、
敬台院は日蓮正宗の信者となり
日精上人の外護として、御影堂
や江戸浅草の法詔寺の建立寄進
を始め、大いに正宗の興隆につ
くした。現在、徳島に敬台寺が
ある。

この御影堂は、宗門のさまざ
まな重要な儀式の場となり、毎
月のお講や、ご説法や、お会式
などはここで行なわれるのであ
る。

日寛上人の六巻抄の三重秘伝
抄第一に「正徳第三癸巳予四十
九歳の秋、時々御堂に於て開目
抄を講ず」とあるように日寛上
人の御書講義もここで行なわれ
たのである。



石 法 説

御影堂付近

なお御影堂の前面、東の方に鐘楼があり、朝、昼、夕に時刻を報せるために打たれる。

西の方には鼓楼があり、毎月七日、十三日、十五日に朝七時から御堂で御法主上人宛下のお講が行なわれる時に、出仕太鼓が打たれるのである。七日は第二祖日興上人、十三日は宗祖日蓮大聖人、十五日は第三祖日目上人のご命日である。

御影堂の後方には敬台院の墓、熱原三烈士の墓などがある。

一、総本山の

東 北 部

塔中を登りつめたところを右へ行くと、学林を中心として、いくつも建物がある。

道にそって右側に役員寮、雪山坊、石之坊、常唱堂、東之坊である。

雪山坊は、日蓮正宗宗字の権威、五十九世堀日亨上人が晩年にお山で過ごされた時の坊である。昭和三十二年の秋にご入滅

になってからは、登山会の救護所や、地方御僧侶の宿舎にあて

今から六百八十余年前、富士周辺一帯に、日興上人を総大将に、南条時光殿などの手によって折伏された、大聖人の信者がふえていった。

これに驚いた邪宗の坊主どもは幕府の実力者、平左衛門尉頼綱にすがって、圧迫を加えてきた。

そして、ついに、弘安二年九月二十一日、なんの罪もない熱原（今の富士市）の信者のお百姓二十人が、寺の稲をぬすんだという名目で捕わ

熱原の法難

かった。

大聖人様はこのことを縁と

されて、弘安二年十月十二日

本門戒壇の大御本尊をご建立あそばされたのである。

翌三年の四月八日、首謀者

とみられた神四郎、弥五郎、弥六郎の三人は首を切られ、残りの十七人は追放されて、熱原の法難は終わった。

それから十四年目の四

月八日、平左衛門尉は、熱原の人たちを苦しめた

自分の屋敷で、一族もろ

とも謀反のことが滅ぼされたのである。これこそ法華の現罰であるとい興上人はおおせ

になつてゐる。

られている。

石之坊、常唱堂はいずれも二十六世日寛上人がお建てになったものである。

東之坊は昭和三十年五月、学会の寄進によつて建立、登山者の宿坊となつて

いる。

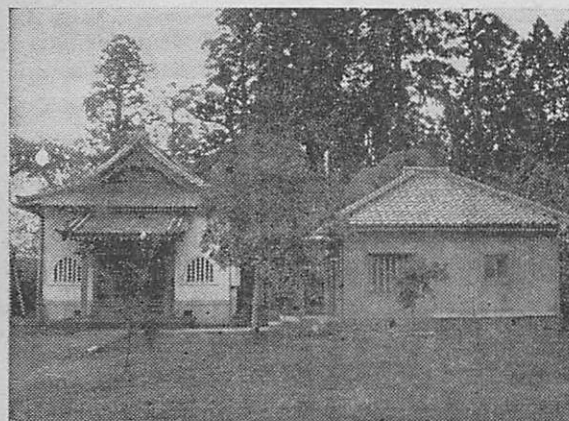
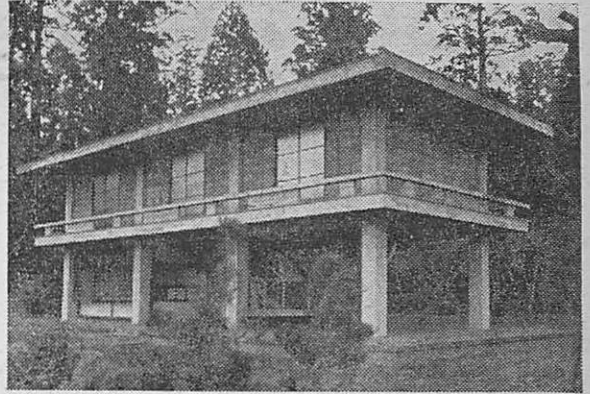


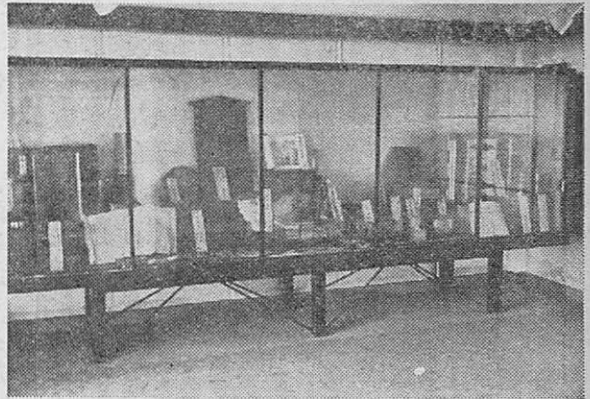
図 書 館 雪山文庫



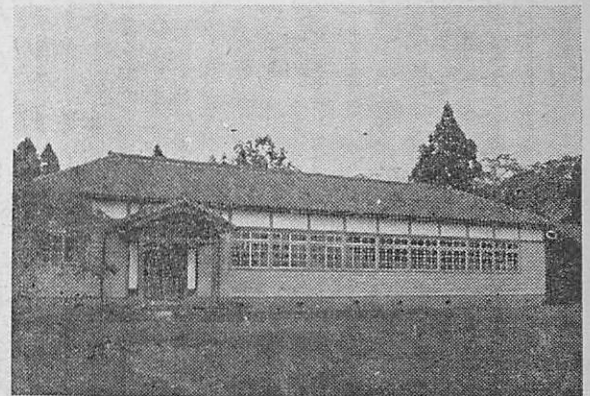
御 影 堂



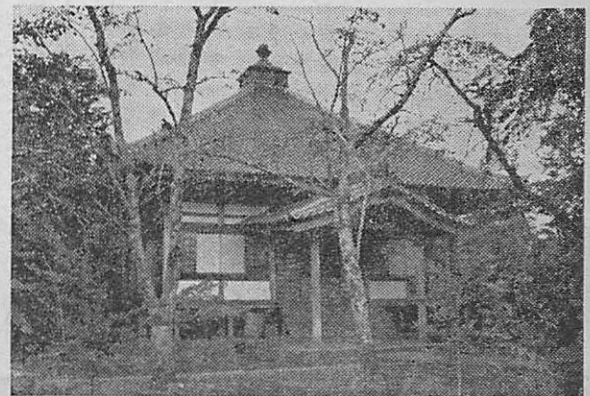
宝物館



宝物館内部



雪山文庫



蓮葉庵

説法石

常唱堂の奥にある大きな石のことである。ご開山日興上人はまだ下之坊におられたとき、ときどきここへおいでになり、この石上に座して説法をなさったという。大石寺建立当時の、ご開山日興上人のご苦心のほどがしのばれるのである。

道にそって左側には学林、図書館、雪山文庫、蓮蔵坊、宝物館、雪山文庫、蓮蔵坊、宝物

新経蔵とも呼ばれ、御影堂裏のお経蔵から移した明本一切経の月日蓮正宗布教会が建てたもの

館、蓮葉庵がある。

富士学林

所化さんの勉強所である。中学、高校等を卒業して現在学校へ行っていない人々が、ここで勉強している。

そのほか和漢の書多数を収めている。

雪山文庫

図書館のとなりにある。五十九世日亨上人のご蔵書をそっくり収めてある。

図書館

宝物館

蓮蔵坊

蓮葉庵

御宝蔵に厳護されて来た宝物のうち、ご真筆の御本尊様や、御書以外のものをこちらへ移して一般に公開している。十八代日精上人の著わされた「家中抄」の正本、明本の一切経、大講堂の工事中に出土した古銭、天英院が寄贈した伝舎利など、六百数十年にわたる数々の貴重な資料がある。

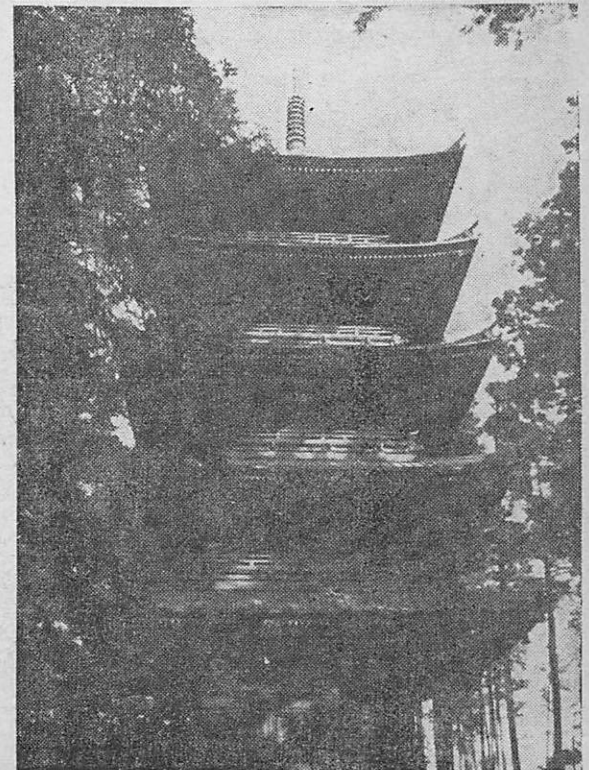
宝物館より奥にある。御法主上人が隠居なさってからお住まいになるところである。近くは六十四世水谷日昇上人が、ご退座ののち、ここにお住まいになり、三十二年の秋にご入滅になつておられる。



蓮葉庵



戸田先生の供養塔



五重の塔

学林の西にある蓮蔵坊は、日目上人のご建立である。日興上人が身延を離山し、大石寺を建立始められたときに、大坊を守護するため日目・日華・日仙・日秀等の弟子方が、それぞれ坊を構えられたが、日興上人の第一の弟子として日目上人が住いになられたのがこの蓮蔵坊である。

九世日有上人、それから二十六世日寛上人が再興され、学頭寮として代々の学頭がここにお

住まいになった。

現在の建物は明治のころ、第五十二世日霈上人時代に建立され、その後修理されたものである。

墓地

御影堂の東北にお山の墓地がある。ここに歴代御法主上人のお墓、位牌堂、牧口家のお墓、また戸田家のお墓がある。

歴代御法主上人のお墓は、二

本の通りにわかれていますが、両方とも宗祖日蓮大聖人、第二祖日興上人、第三祖日目上人のお墓を正面にいただいている。これは血脈付法ということを示すためなのである。

五重塔

御影堂のはるか東、お塔川をわたり、数多くの階段を登った台地に、杉の木立にかこまれて立っている。高さ三十三・四層

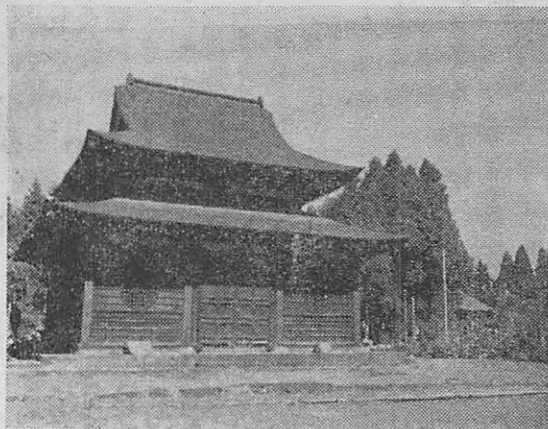
で、屋根の大きさは上まで変らない。

二十六代日寛上人と、徳川六代將軍の夫人天英院に五重塔建立の志があり、その後、三十一代日因上人のとき、龜山城主板倉勝澄の御供養をもとにして建立された。

板倉勝澄の藩祖である板倉重昌は江戸初期に九州島原で起きたキリスト教徒の反乱(島原の乱)鎮圧に際し、総大将として勇ましく戦って戦死した。勝澄

は日因上人のご指導で、深く信心をとり、藩祖の菩提のために御供養を申しあげたのである。ところで、この五重塔は西を向いている。七堂伽藍は原則として真南に面して建てられるのに、この場合西面しているのはどういうわけか。

それは広宣流布を意味しているといわれる。御書の顕仏未來記にも明らかのように、釈迦仏法が西から東に向かったのに対し、末法の大聖人様の仏法は東



お 経 蔵

から西へ流布して行く。それをあらわしているといわれる。

二月十六日、大聖人様のお誕生日に、それを祝って扉をあけ放つことになっている。

× × ×
五重塔の奥には、前記の天英院の碑がある。

戸田先生の供養塔

五重の塔の北側、木立を背にしながら総本山を一望に見おろし、静かに見守り続けるように第二代会長戸田城聖先生の供養塔が立っている。

これは総本山において特別の功労者の業績をたたえるものであり、時の狹下堀米日淳上人の深いご配慮によるものとうけたまわる。
一般には戸田先生のお墓と呼ばれ、学会員は登山のたびごとにここに墓参し、戸田先生のご遺訓を心肝に染め、堅く広宣流布を誓うのである。

経 蔵

御影堂の東北の方にある。むかしは明本の一切経(すべての経文)を入れていたが、現在は図書館に移されている。この経蔵の北側には二十六代日寛上人のお墓がある。

南 条 時 光 殿

今の大石寺一帯の地、上野郷の地頭だった南条七郎次郎平時光殿は、幼くして父親と死別したが、その信心をついで大聖人様にもおめでありし、日興上人に従って、富士一帯の折伏にのりだされ

ちを守りとおされた。

そのとき、大聖人様から、「上野賢人殿」とおほめのお手紙をいただいている。

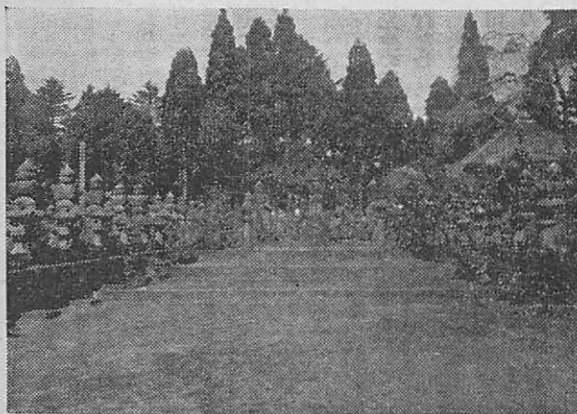
正応元年、日興上人が謗法

日興上人の弟子分帳には、「七郎次郎平時光は日興第一の弟子なり」とおほめのおことばがある。

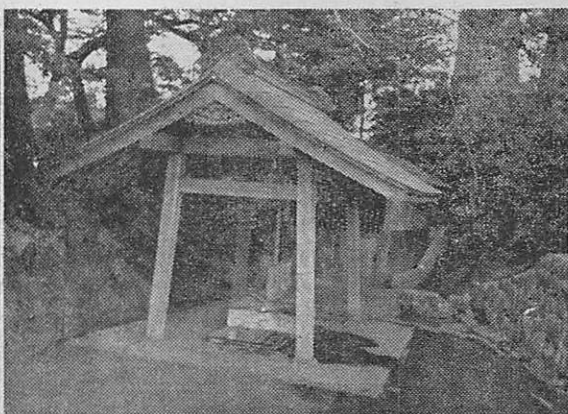
第三祖日目上人、第四世日道上人、第五世日行上人も、みな南条家の出身にあたります。一族あげて大石寺をお守りしたのです。

お 華 水

お経蔵のわきを北へ数百歩行つて、川を渡ったところにある。長い間腐らないという、日本にも稀な水であつて、日興上



御 歴 代 墓 地



お 華 水

人以来、毎朝新六僧が汲み、本六僧が仏前にそなえるのである。

もつとも、いまは新六、本六とはいわず御助番、御本番といっている。この御助番の人が早朝、おけにお華水を汲み、御影堂まで持って来ておくと、御本番の人が御影堂と客殿と六壺の御本尊様に水をお供えし、おけを六壺に置いておく。翌朝はまた同じように行なわれるのである。

この水が非常に清浄な良質の水であるところから、何かこの水に病気をなおしたりするような力があると考え、ありがたが

ったりする人があるが、これは邪宗的な考えである。

一、総本山の西北部

朝日門（鬼門）

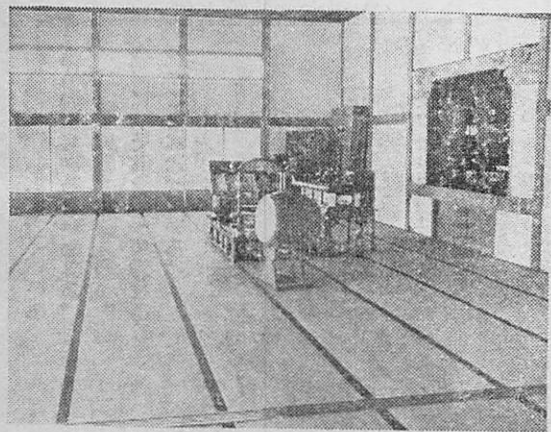
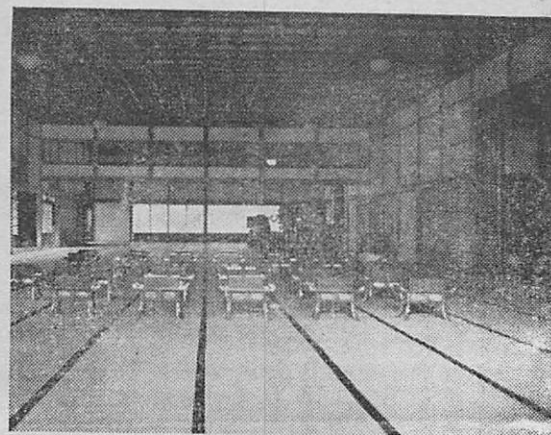
塔中を登りつめたところを左へ曲がると、この門がある。お山で、この門だけが東面しているので朝日門といわれ、表側の上部に鬼の面がついているので鬼門とも呼ばれる。

不開門

朝日門をくぐって西へ進むと不開門（あかずの門）がある。勅使門ともいい、広宣流布の暁に天皇のお使いが通るときに、初めて開くため、ふだんは閉めたままになっている。ただ正月の十六日には開門する習慣になっている。

客殿

不開門より少し先を右へまがったところに客殿がある。二百



(上) 客殿の内部

(下) 六壺

四十畳敷の広さである。

正面に、第二祖日興上人が第三祖日目上人に、大石寺創立の時授けられた「お座替り御本尊」（正応三年十月十三日）が安置され、向かって左側には宗祖大聖人の御影、右側には開山日興上人の御影が安置申しあげてある。

大講堂ができる前には、登山会における戸田先生の質問会がもっぱらここで行なわれ、全国各地から集まって来た学会員はここで間近に戸田先生のお姿を拝し、親しくそのお声を聞いたのである。

また、客殿の重要な行事として丑寅の勤行がある。

日興跡条々の事に「大石の寺は御堂といひ墓所といひ日目之を管領し修理を加え勤行を致し広宣流布を待つべきなり」と。

客殿の御本尊である「お座替り御本尊」の裏書きには、「当山重宝血脈手続きの大曼荼羅にして御座替りと号す、いま正にこれを写し彫刻せしめて方丈に安置し奉り、鎮に三大秘法広宣の利益を祈る」云云。

これらの文書からもわかる通り、代々の御法主現下は、こ

の客殿の御本尊に広宣流布の祈願を続けてこられたのである。

さて、会長池田先生は、今年五月三日の就任式に当り、戸田先生の七回忌までに、世紀の大客殿を総本山にご寄進申しあげたいと申された。

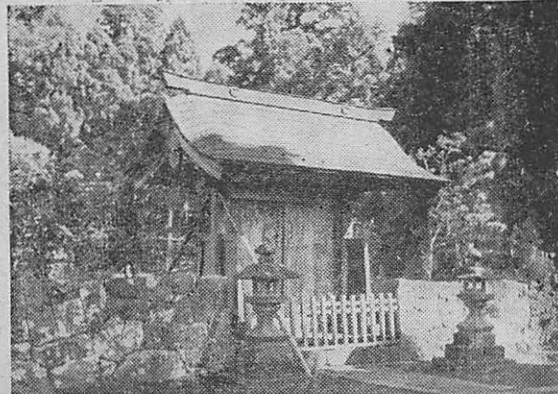
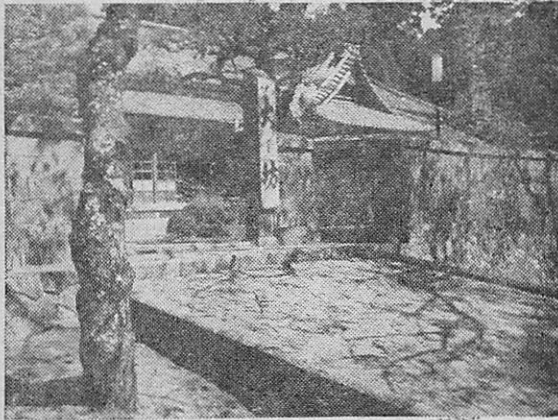
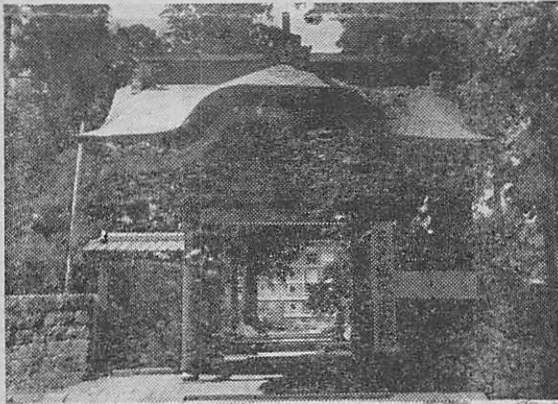
戸田先生は、おなくなりになる寸前まで「世界各国の名産を集めて、総本山に大客殿を建立しなさい」と申されていた。カナダの杉、ガンジス川の砂、チリの大石などを集め、近代建築技術の粋を集めて大客殿を建立しなさい、と。

いまや、その事業は着々と進んでいる。十月に会長池田先生が南北アメリカへ行かれたのも現地学会員の指導と共に、大客殿の資材購入が目的であったのである。

六壺

客殿の西に六壺がある。この開山日興上人が大石寺をお建てになられたとき、最初にできたものがこの六壺であり、六室にわかれていたのでこの名があると伝えられる。

日興上人様の「富士大石寺持仏堂安置本尊也」と明記された



御本尊様が中央にご安置申し上げてある。

大坊

六壺の西に、内事部、所化小僧さんの部屋、北の奥に清涼閣（御本尊書写室）大奥（御法主上人の居室）がある。

内事部は、宗務院が宗内一般の事務を取り扱うのに対して、大石寺内の事務を取り扱うところである。

御宝蔵

大客殿の裏、東北の杉木立の中にある土蔵造りである。

九代日有上人が初めて建立され、その後何回も改築された。

御本山における重宝中の重宝を厳護し奉っているのであって

そのおもなものをあげると、紫宸殿御本尊

本門寺重宝御本尊
病即消滅不老不死御本尊

民部阿闍梨日向授与御本尊

日天月天御本尊

など日蓮大聖人の御真筆の御本尊様を始め、日興上人から日

目上人へ授与されたお座替り御本尊、日目上人、日道上人の御

真筆御本尊様多数と、諫曉八幡抄

南条殿御返事
白米一俵御書

などの御真筆の御書多数、また大聖人様が極楽寺良観を雨乞いの法あらそいで徹底的に打ち破

られたときご使用になったところの「雨乞いの三具足」（華器香炉・燭台）さらに宗門の一大不思議である大聖人の御生骨がある。

奉安殿

正しくは「戒壇本尊奉安殿」という。

昭和三十年十一月、創価学会のご供養によって建立された、耐震、耐火の近代的建築である。

これができるまでは、九世日有上人の時代以来、五百年の間ご宝蔵の奥に大御本尊様をご安

心は、まことに並大抵のもではなかったと拝する。

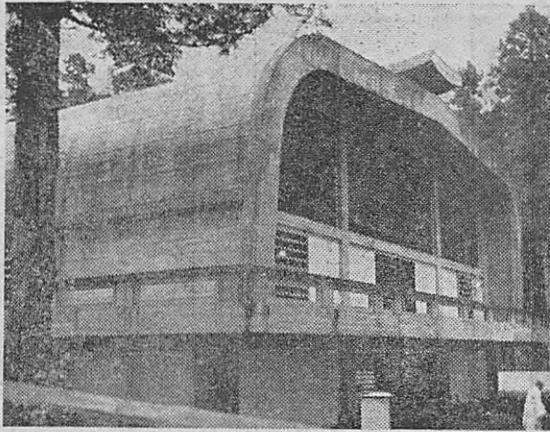
朝日門

大坊

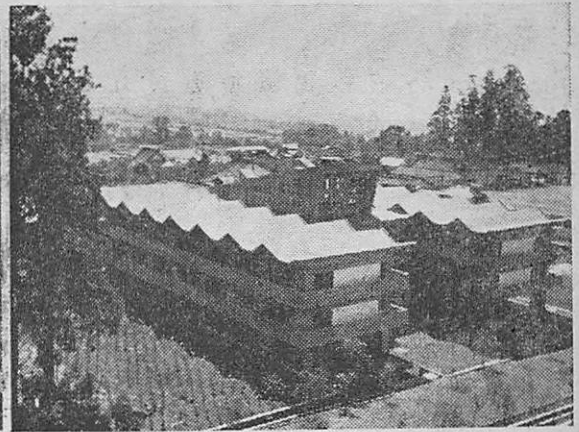
坊

御宝蔵

不開門



奉安殿



大化城

置して、そこでご開扉が行なわれていた。

しかし、学会の発展で、一日に何千という多数の人たちが登山するようになり、ご宝蔵ではあまりにもせまくなったので、現在の、一度に千五百人が参拝できる奉安殿が必要になったのである。

もち論、内陣の中央には、大聖人出世のご本懐、弘安二年十月十二日にご建立あそばされた本門戒壇の大御本尊がご安置されている。だから、ここが私たちの、信心の中心であり、懺悔滅罪の根本道場である。

また、御本尊の西の方(左)宝塔の中に、大聖人のご灰骨がある。日興上人が身延から富士に移されたので、今の身延にあるのは、まっかなニセ物で、小樽問答のとき、馬の骨と呼ばれて有名になった。

また東の方(右)ご宮殿の中には、大御本尊様と同じ板の余りで日法上人が彫刻した、たけ三寸の御影様で、大聖人様が「わが姿によくにたり」とおおせになった、最初仏がご安置してある。

しかし、現在の奉安殿も、広宣流布がなされて、国立戒壇が

建立されるまでの義の戒壇にあたる。

そのために、奉安殿にはおしきみがあげてないのである。

広布の時にさきがけて、大御本尊様にお目通りができるのは大きな福運であり、一日も早く広布の時を迎えるべく、折伏に励まねばならない。

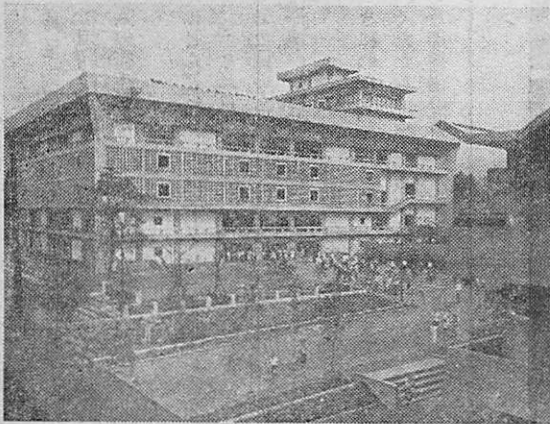
大化城

大講堂と向い合って建てられた日帰り登山者のための休息所である。これができる前には、蓮蔵坊・学林・客殿・大講堂などに、一時的に収容していたが、三十五年四月一日に学会の寄進により完成、以後この問題は完全に解決された。

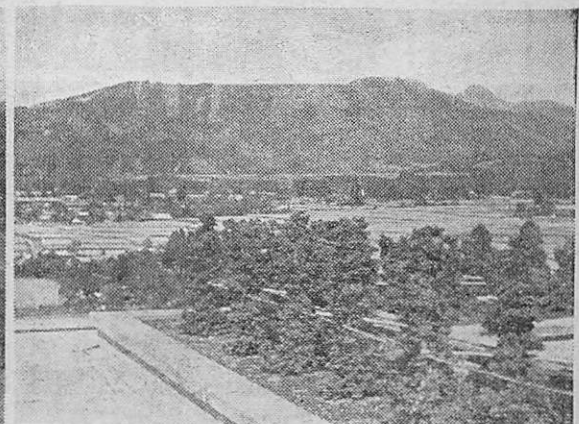
大化城という名は御法主上人日達親下のご命名で、法華経化城喻品の意味からとって、戒壇の大御本尊にお目通りするまでの「化城」として名づけられたものとうけたまわる。

大講堂

学会の寄進により建設された。昭和三十一年十二月に起工式を行ない、三十三年二月に完



大講堂全景



大講堂屋上



大講堂内宗務院

成した。

建坪七六三坪、鉄筋コンクリート七階建の、一見巨大な航空母艦を思わせるようなつくりである。非常に大きく、また、白いので富士の頂上からも肉眼で見ることができる。

一泊登山者のための御書講義や質問会、また日帰り登山者のための質問会が行なわれている三階の大講堂(間口三十二尺、奥行三十五尺で高さは九尺。中二階があり、回廊がめぐらされている。七百畳敷きで五千人が収容できる)を始めとして

談話室(二階)、宗務院・総監

上人はまた、学頭時代に、

三門建立、客殿建立に力をつくされ、猥下であらせられたときには常唱堂や石之坊をつくられ、大いに本山を興隆さ

ことにする。もし自分がその

通りに死んだら、日寛の説法は全部正しかったと信じて疑いを起こしてはなりません」といわれていたが、はたして、

その通りにご入滅になったことは有名である。

また、非常にすもうを

喜ばれて、村の青年たちを呼んでご僧侶と一緒にすもうをとらせたといわれる。現在も夏期講習会においては所

化さんと学会青年とが、大いにすもうに興ずるのである。

室・管長室(三階)、講義室(四階)、大小会議室(五階)、客間

茶室などの貴賓室(六階)等、すべて、最高の建築技術でつくられている。

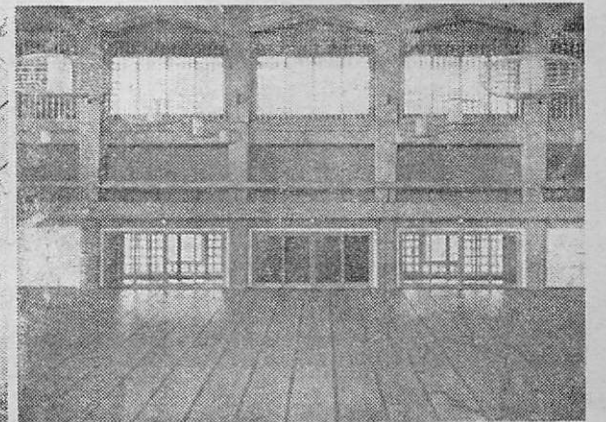
この大講堂の意義についてはその落成に際し、池田先生(当時青年部参謀室長)は次のようにおのべになった。

「始め、学会の折伏戦が行なわれるや、大衆は学会の組織に目を見はり、その力の偉大さに注目したものであった。学者等は、創価学会の初代会長、牧口先生の価値論をもって、学会の全体なりとみて来た。しかる

に、大講堂建立の暁は、大聖人様の仏教哲理を

ば、必ずや、注目するにいたってゆくことは、必然なことである。大講堂こそは、世界唯一の

全世界の思想を指導してゆく、源泉となることを、信ずるものである」と。



大講堂内部

日寛上人

日蓮正宗第二十六世の御法主上人で、比類ない学者であらせられた。六巻抄、観心本尊抄文段、臨終用心抄等、多くの重要論文を著わされて、日蓮大聖人の御書の読み方を指導され、富士の正義を顕揚され、当時ほとんど出つくしていた邪教

邪教を徹底的に破折なきった学会の教学部においては、戸田先生の時代から、常に六巻抄や文段を拝読し、御書を正しく解釈してきている。

れたのである。

大そうソバがお好きであつて「自分はソバが大好きである。だから臨終の時もソバを食べて一声大いに笑って死ぬ

食べたのである。



戸田先生のお歌

躍進の足音高き東北



総支部の現況

昭和三十一年三月、学生部の十二個の男子部精鋭、また、女子部隊、女子第十三、二十三、二十四、四十九、五十、五十一、五十二、六十一、六十二、百八、百十一、百十二の十二個部隊の部員がい

みちのく

創価学会の出現と同時に、いち早く地方へ対する折伏の手がのびたのが、九州と東北

昭和二十二年に渋谷邦彦氏（現理事・中部総支部長）が、仙台の地に広布の根をおろした。

翌二十三年より、東京本部から指導の手がのびされ、支部結成への土台が着々と作られていったのである。やがて、戸田先生が第二代会長にご就任とともに、渋谷邦彦氏を支部長にいただいた地方支部の第一号が、仙台の地に誕生したのである。

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。

現在、三十四年六月に結成された東北総支部長のもと、青森、秋田、仙台、宮城、北上、新潟の各支部、そして、誕生間もない南秋田、岩手、山形の計十支部の学会員が、みちのくの守りを固めている。青年部も第十三、二十三、二十四、五十五、五十六、五十九、六十七、六十八、百八、百十一、百十二

の十二個の男子部精鋭、また、女子部隊、女子第十三、二十三、二十四、四十九、五十、五十一、五十二、六十一、六十二、百八、百十一、百十二の十二個部隊の部員がい

このころ、東北支部の前途に課せられた問題は多くある。全体的に経済的にめぐまれない、青年部が弱体である等々

と、北海道総支部とならんで、のび悩みの感がしないでもない。しかし東北人独特のねばり強さと闘志で、それらの難を克服して、強く、たくましい前進を続けていくことであろう。

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。



古代における東北地方の蝦夷の勢力は強く、大和の朝廷も、征伐にさんざん手をやいた。中古の関東武士の東北進出は、平泉を中心として藤原三代の文化を築き上げた。そして江戸になると、芭蕉は「おくのほそみち」に俳諧の旅をしるし、菅江真澄は、「遊覧記」に東北の人情風俗をえがき出している。それらの昔から、東北の人は雪の重圧にたえてきた。青緑にかがやく海が鉛色にくすみ、空はおもくたれみぞれを見るようになり、やがて雪が降るようになる。十一月から三月までは、白一色の世界が展開する。この雪が、東北の発展をお

くらせているのだ。また、この地方独特の迷信とも、民間信仰ともつかぬオシラサマ、イタコオロシ、地獄会などの邪宗も、東北一帯に大きな害毒を流していることは、いなめない事実である。

御本尊様と東北地方との関係は、七百年前にさかのぼる。日蓮大聖人様の佐渡ご流罪の時、日興上人の折伏は佐渡、新潟、山形方面におよび、後に阿仏房の曾孫である日満は北国弘通の棟梁を命ぜられた。

さらに第三祖日目上人は、宮城県で正法を弘通し、現在も数か寺がそのまま発展している。また日目上人の弟子日尊も東北各地で邪宗寺院を改宗させ、東北は全く富士門流が栄えたのだ

昭和二十七年、五万の折伏目標を完遂し、学会大前進の火の手が上った。そして翌年の四月仙台に男子部隊が結成された。さらに、二十九年三月、一支部一部隊制にともない、男女とも第十三部隊になった。

東北総支部を たすねて



実りの秋



各地で活躍

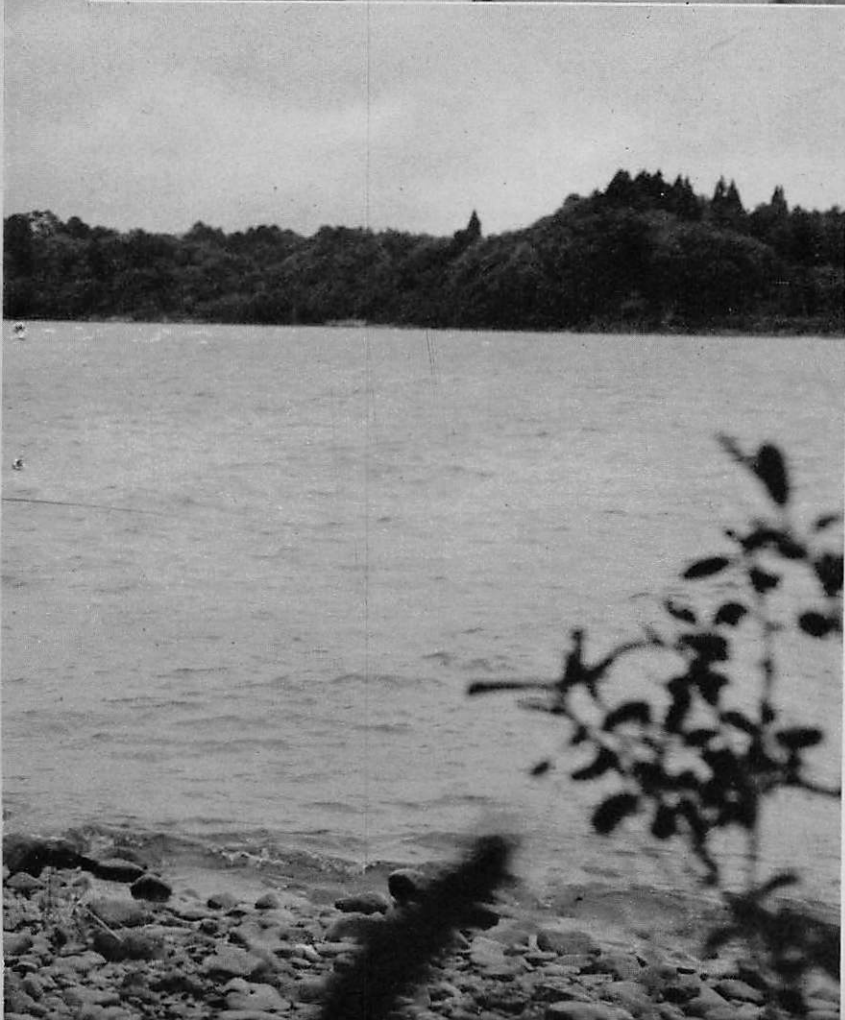
昨年のリンゴ品評会で入選、「今年も他家より玉が大きい良いものが出来た」と喜びを語る青森の学会員

青森県三沢市には、外人部隊ならぬ外人分隊が活躍している。分隊長はキーン君だ（中央）分隊員は外人ばかり17人、座談会は非常に明るく、キーン君の奥さんが通訳



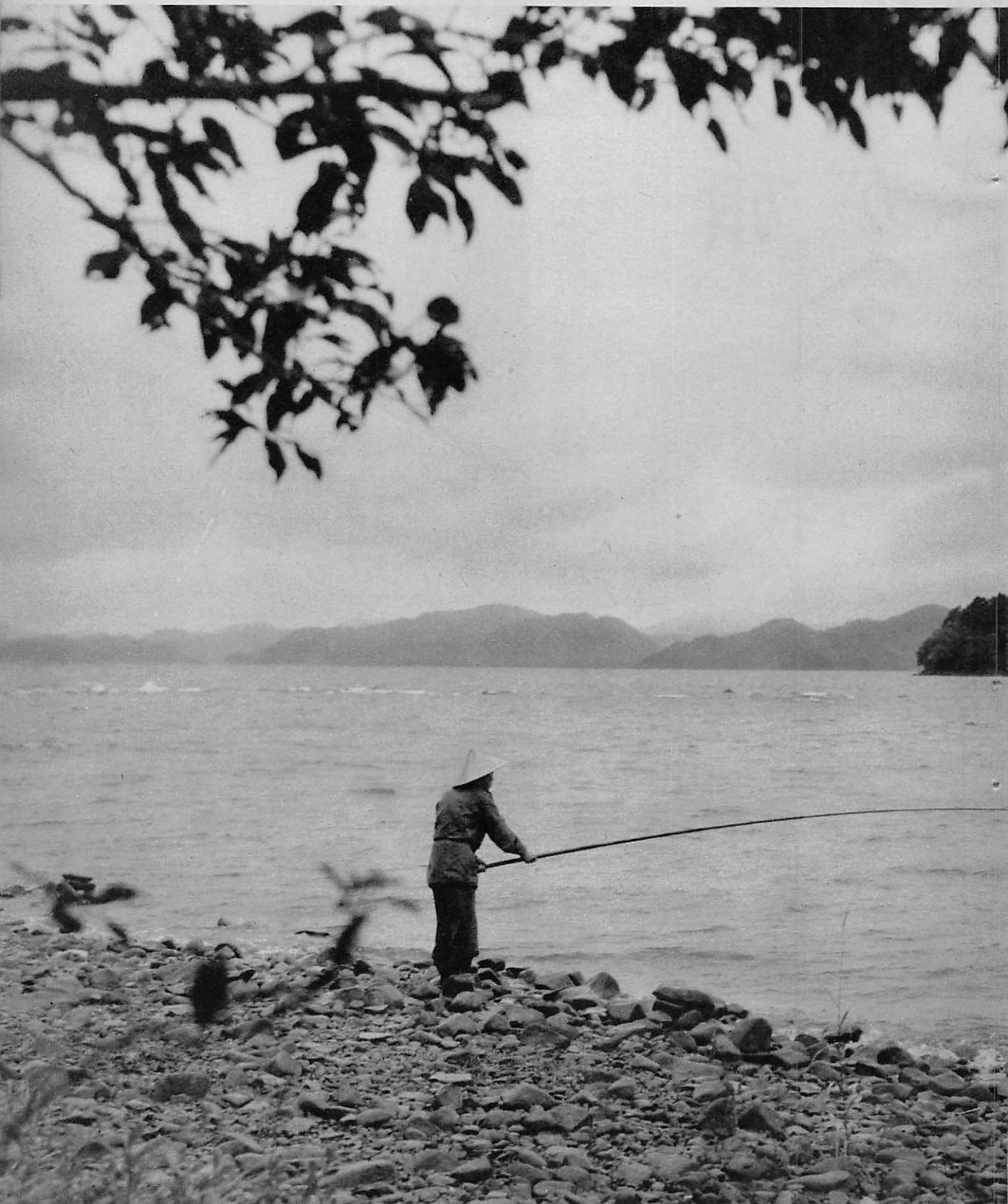
座談会に行くのに三時間も歩き、雪の日には四時間もかかる。提灯をつけて山道を行く秋田の学会員

する学会員



東北は中央を北から南にはしる奥羽山脈によって、太平洋側と日本海側とに分けられる。その裾には津軽平野、新庄、山形、米沢、会津の諸盆地があり、海岸には秋田庄内などの平野がある。紅葉のときをむかえて、みちのくの秋は美しい。あとは雪を待つばかりである。写真左上は一日の仕事も終わっていろいろを囲んで座談会

みちのくの秋深し



東北十年の歩み

広布の旗 ひるがへる



昭和27年8月・仙台の仏眼寺で開かれた仙台支部幹部会



昭和29年9月・第六回仙台支部総会（仙台市レジャーセンター）



東北総支部の牙城・福島会館・福島県郡山市・昭和34年10月開館



昭和33年11月・青森支部結成大会（山田高校体育館）

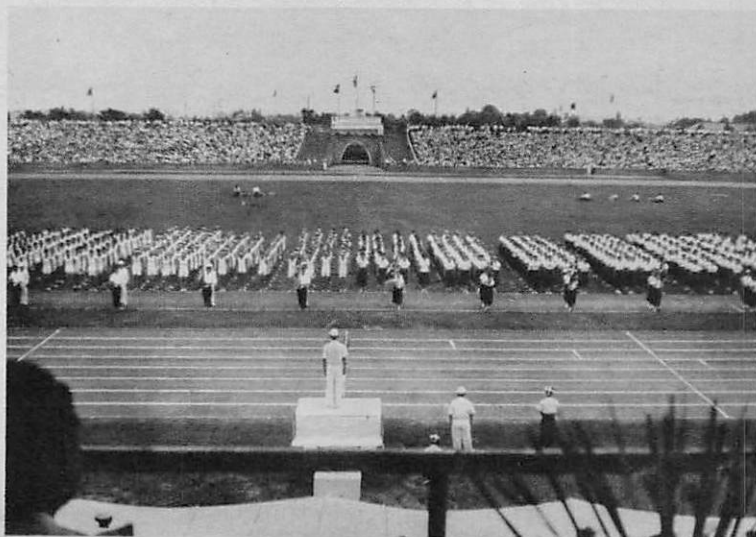


昭和33年11月・福島支部結成大会（郡山市市民会館）



会長池田先生と辻東北総支部長・昭和35年6月の東北総支部幹部会から

昭和34年8月・東北第一回の体育大会・県宮宮城陸上競技場
池田先生は「不撓不屈の精神でがんばれ」と激励された。





東北総支部幹部会で場外の学会員に
あいさつする池田先生



場外にあふれる学会員（昭和35年6月東北総支部幹
部会・郡山市市民会館で行なわれた）

式

会

お

ウチワ太鼓に花万燈、向こうハチマキの若い衆を先頭にねり歩きお祭りさわぎをする、これが、世間一般で考えている『お会式』である。池上や立正佼成会などで行なっているのがそれだ。しかし、日蓮正宗で行なわれる『お会式』の儀式は、お祭りさわぎとはほど遠い、厳しゅうくにして盛大なものである。末法の御本仏日蓮大聖

人様が、つねにわれわれと共にいますことを自覚し、宗門の隆盛を願うのがその本義である。十月二十二日の夜(年によって一日ずれる)檀信徒の参列する中を、宛下は、二天門から朝日門まで、読経をしながらしずしずと『おねり』をあらそばされる。この『おねり』によって、日蓮正宗総本山大石寺におけるお会式は始まる。御影堂に入られた宛下は、御本仏日蓮大聖人様のお立場か

ら寿量品の説法をなされる。その後、三三九度のお杯の儀式があり、参列者一同そのお流れをちようだいする。翌日は、早朝から夜にかけ、御法主上人の立正安国論をはじめとする大聖人の御状の奉読、満山供養、御書講義、講演会等があつて、二日間わたつて行なわれた、お会式の儀を、終えるのである。

「奈良七重七堂伽藍八重桜」という俳句がある。むかしからお寺の建物を七堂伽藍とよんでいます。伽藍というのは、梵語で、僧侶の集まる建物寺院内の建築物をいいます。七堂の「七」は「悉」の意味で必ずしも七つの建物というのではなく、堂宇がそろっていることだともいわれています。さて、総本山

大石寺の七堂伽藍といえは、奉安殿を別にして、御影堂、大坊、経蔵、五重塔、三門、大講堂、それに客殿を加えて七堂と称することができます。また、伽藍は原則として南に面し、御堂の右側に川が流れ、川をへだてて小山がなければならぬといわれていますが、大石寺の建物はほとんど南に面し、御堂の右側に川が流れ、その向こうに日本第一の名山富士があります。

日本第一の、いや世界唯一のお寺といえます。俗に、からっぽなことをさして、ガランドウといいますが、これも伽藍から出たことばです。邪宗の伽藍は、しだいにガランドウの姿になってきているのは、ゆかいはありませんか。



やさしい仏教用語の解説



「御本尊様以外は全部謗法だ、もちろん、日蓮大聖人様の像や掛け軸などもいけない、と聞いてますが、日蓮正宗のお寺に日蓮大聖人様の像があるのはどうしてですか」入信したての人で、こんな疑問をもつ人がいるでしょう。それには、こういう理由があるのです。当宗の仏像は御首がぬけるようになって、うになつていて、その中に御

本尊様が安置されています。ところが、謗法払いの対象となる邪宗の仏像と違う点です。身延なんかには、緋の衣をつけた大聖人の像がありますが、インチキもはなはだしいものです。大聖人様が、赤や紫の衣を着ている像などは、決して拝む対象物ではないのです。

また、もう一つの理由は、仏法上の深義で、人法一箇という法門があるのです。すなわち、法である御本尊様と人である大聖人様が即一体であるということですから、ゆえに御本尊様の前に大聖人様の像を置いて、大聖人様を目のあたりにしながら、御本尊様を拝するのです。この仏のことを、御影様といわれます。

御法主上人を始めとして、お小僧さん、所化さん、ご僧侶が、そろって薄墨色の衣けきを着け、整然として御開扉が行なわれる姿は日蓮正宗ならではの見られぬ清浄なる光景です。小さいかわいらしいお小僧さんが、大ぜい宛下の後をついて行く風景は、見てもほほえましいものです。新しく得度をしてか

ら、三か月ぐらゐの修行をした後に『沙弥』という位階になります。白衣小僧とも呼ばれます。そして、中学にはいるころになると、衣を着ることをゆるぎます。こうなると、衣沙弥と呼ばれるのです。さらに、高校に入學するころに、始めてけきをかけることをゆるぎ、三等学衆という位に任ぜられます。このときに、始めて『所化さん』と呼ばれるのです。それから、二等学衆

ある御本尊様と人である大聖人様が即一体であるということですから、ゆえに御本尊様の前に大聖人様の像を置いて、大聖人様を目のあたりにしながら、御本尊様を拝するのです。この仏のことを、御影様といわれます。

所化さん

体当たりで貧乏をはねとばす

関東第四総支部副総支部長

藤井 富雄 さん



「信心はやっているが、生活は苦しい。いつになったら、よくなるのだろうか」そう考えている人たちも、多いのではないだろうか。

また、大幹部の人たちの力強い姿に「とても私はあんなふうにはなれない」と思っている人もいることだろう。

だが、御本尊様のご慈悲にえこひいきはない。どんな苦しいときでも、少しも疑わずに、信心に励めば、だれでも必ずしあわせになれるのだ。

信心一すじに、逆境を切り開いてきた先輩の姿が、それをりっぱに証明してくれる。

ポケットに十円玉一つ

ボロの復員服のポケットにはいつも十円玉がいくつかはいつているだけ。

地区のあった阿佐谷から練馬まで、今川焼をかじりながら、

夜中の十一時十二時までかかって、歩いて帰ることもたびたびあった。

三日も、ウドンばかりたべながらも、グチ一つにぼさなかつた。

ただ、戸田先生の

「ほしいものはなんでも手にはいるのだ。手のヒラにのってるようなものだ。闘争すればいいんだよ」

というお言葉を、絶対に疑わずに、ガムシヤラにとびまわっていた。

昼間は、一日七十円でかりたポロ自転車に、十数貫の経木を乗せて、東京中を売りこみにかけまわり、夜は、座談会や折伏にと、息つくひまもなく、とびだしていった。

それが、二十九年ごろの、藤井さんの姿だった。

それから六年たった。

今では、藤井さんは、大きく経木の仕事を発展させながら、練馬の区会議員をつとめ、また聖教新聞の販売店主だ。りっぱに生活を革命したので。

事故を機に家業へ

藤井さんが信心を始めたのは二十八年の六月だった。

「いいからこの車に乗れ」と仲間の手野幸さん（現渋谷支部地区部長）に言われて、しゃべっているうちに、着いたところ

が日蓮正宗の中野教会の前だった。

わけもわからずに御授戒をうけて、信心することになってしまった。

家へ帰ると、たちまち家中の反対をうけて、それじゃかえしてこようということになった。そこで、またこんこんと再折伏されて、ようやく信心する腹がきまった。

それから、タンスの上に、御本尊様をまつつて、朝晩の勤行をやるようになった。

入信して、二十五日目に、それまで三年間タクシーを運転していた、一度も起こしたことの無い事故を起こしてしまった。

川開きの夜、兩國近くまで行って、雨のためにブレーキがきかずに、ほかのタクシーに追突してしまったのだ。

ケガ人はでなかったが、自動車は相当こわれてしまった。

十六万円のべんしょうということになった。それが、真剣に題目をあげたところ、三千円ですんでしまった。

だが、それを契機に、運転手をやめて家業の竹の皮と経木の製造と販売にもどった。それが、苦しい生活の始まり

であり、同時に、猛烈な学活の始まりでもあった。

パンクを直しながら

商売を始めたころは、資金がないので、問屋から半日分しか品物を仕入れることができなかった。

都内ではほとんど売れない品物を、同業者のあまり行かない、国分寺や府中、立川の方へ、ポロ自転車で積んでいって売りこむ日が続く。

最初から新しい得意をとるのだから、大変だ。御本尊様に、一軒でも得意がとれるようにと、懸命をお願いした。

藤井さんの、お客に体当たりするその情熱に、ほかの店から買っていったところが、こちらにくらがえするということもあった。

ポロ自転車に十五貫ぐらいも品物に乗せて走りまわって、パンクすれば自分で直すくらい、けん約していた。

だが、手間は安く、収入は月一万円ぐらいがせいせいだった。運転手時代には、月三万円から五万円の月給をもらっていたのだから、一べんに貧乏のどん底へとびおりたようだった。

そんななかでも、夕方にはとんで帰って、十円のコッペパンをかじりながら、夜の学活活動にとびだしていった。

そのころ、練馬には学合員は数えるほどしかいなかった。

着たきりのポロ服で折伏にある藤井さんの、みすばらしい姿をみては、耳を貸す者もなかった。

そんなとき、藤井さんはくやし涙を流して、今にみる、きつと座談会をいっばいにしてみせるから……と心に誓った。

そして、約一年間、地区のあった阿佐谷へ、地区講義や座談会にかよとおした。

弟の石井司郎さんと、二人あわせて五円しかなくて、今川焼をかじりながら、畑の中のまっくらな道を夜中まであるいて帰ったものだった。

米びつはからっぽで、親子六人が三日もウドンばかり食べたこともあった。

それでも、今に必ずよくなるんだと確信をもって、グチ一つこぼさなかった。

そして、二十九年の始めには、班長になった。

徹夜で部員を指導

間もなく地区の班長と、青年部の班長を兼任した。



一家そろって・お山でのひととき

体験談

当時の秋谷第五部隊長（現青年部長）につききって、夜おそくまで、真剣に闘争した。

部隊会に、班で三人しか集まらないことがあった。そのとき、分隊長といっしょに、一晚中オートバイに乗って、部員の家をまわり、家へ帰ったのは、明け方だった。

そして、次の会合には、班の全員が顔をそろえたのだった。また、班員をつれて、邪宗退治でも大あはれをした。

練馬から新宿の方まで、日蓮宗の寺ばかりねらって、かたっぱしからのりこんでいった。そして、坊主を徹底的にやつつけては、氣勢をあげたものだ。

組長のとき、一組で十世帯の折伏をやったこともあった。闘争の目標をたてると、必ず目標以上の成果をあげている。班で三十世帯の目標をたてれば、三十五世帯ぐらいはやりきった。

だが、班のなかに、いろいろと問題もおこってくる。金がないので、どうしてくれるとか、夫婦げんかや、御本尊様の不敬事件が、次から次へ藤井さんの家へもちこまれた。ずい分つらい思いをしたが、

小田垣地区部長（現支部婦人部顧問）に「問題を恐れるな」と励まされ、（もし自分がここで退転したら何百世帯の家族が不幸になるのだ）と、がんばりつづけた。

地区講義がある日には、班員を自転車や三輪車にのせて、阿佐谷までつれてかよった。班員や部員を、親身になってめんどろをみるので、信心の上の指導はきびしかったが、みんな喜んでついでついでついで。

そのためか「信心の弱い者は練馬へ行け！」といわれるほどもありあがついていった。

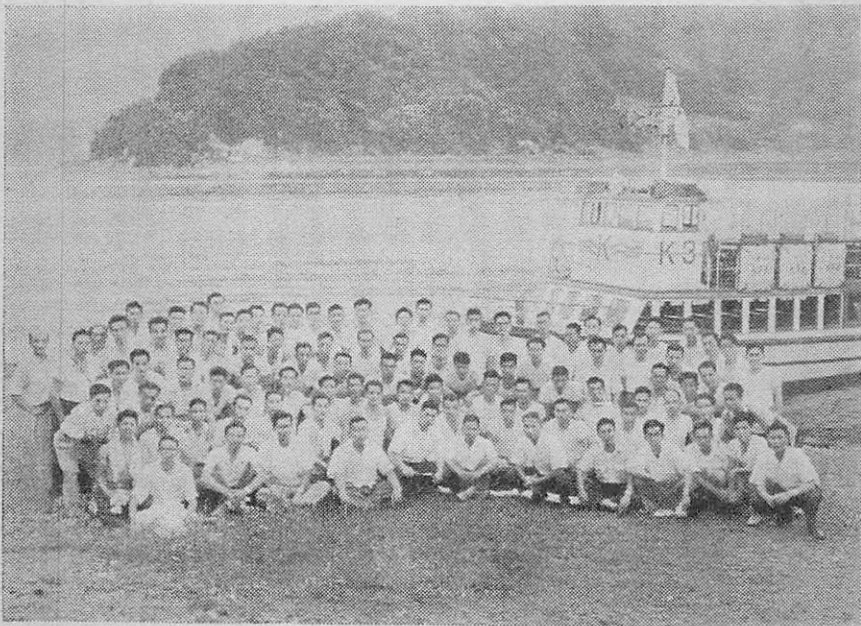
また、生活の苦しいなかを、柏原支部長（現本部婦人部長）について、「自分を革命するんだ」と前橋、伊東、青森などの地方へも出かけていった。

二十九年の暮には地区部長になり、間もなく部隊の幹部室になった。

車を買って事業発展

「兄貴は毎晩出てっちゃって、しょうがないな。少し夜なべでもやればいいのに」と、信心している弟の司郎さんまでが思うくらい、生活の苦しいなかを闘争した。

水滸会で河口湖へ、北条理事の後が藤井さん（32年7月）



また、奥さんの秀子さんもりっぱだった。ご主人のやることには、一言の不平もこぼさず、四人の子どもをかかえて、家庭をまもっていた。

そのうち、商売もしたいにうまくゆくようになった。始めは、中古の三輪車を三万円円で買ったが、それをまた三万円円で売って、その金でソックス

御書を買ってしまった。地区員の現金で買えない人に、分割払いでわけてあげるためだった。

ところが、車を買った人が、「免許がとれるまでお前にあずけておくれ、調子よくしなくてくれ」といって、そのまましばらく自分のもののように、自由に使うことができた。

しかし、このままじゃしようがないから、新しい車を買おうということになった。

だが、自動車屋が店を見にきて、警戒して、月払いにしてくれない。

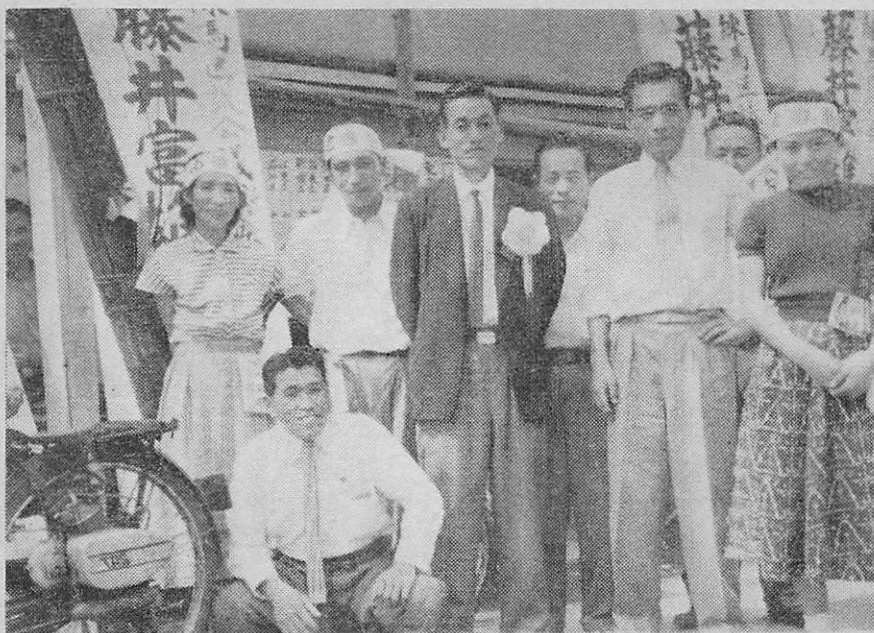
もっとも、そのころは玄関に戸がなく、ムシロがさがっていたのだから、ムリもなかった。

現金で三十四万円出して、新しい車を買った。それから、商売もぐんと伸びて、車を買うためにした借金も、三か月ぐらいで全部返してしまった。

そして、功德の車だからと、郊外までのりだして行って折伏に利用した。病人でもとしよりでも、三輪車で座談会場や、お寺へ運んでいった。

荷台にかけるシートがないので、雨の日に乗った人は、頭か

らムシロをかぶせられたものだ。
地区部長と、青年部の闘争と商売の三つの仕事に板ばさみと



真心だけで戦った選挙のさ中

なつて、ずい分悩みもした。そのたびに秋谷部隊長から、「会長先生を信じなさい、君をみすてるはずがないよ」と強く

一銭もなくて選挙に

励まされては、ふるいたった。

三十年五月、東京で第一回の区会議員の選挙があり、そのとき藤井さんは事務長になった。ほとんど家に帰らずに、選挙戦の陣頭に立った。

もち論、家には一銭の収入もなくなつた。奥さんは、少しでも、近所から経木の注文をとつて歩いた。

父や兄弟の援助があつたが、働かないのにお店からお金をもらうのは申しわけないと、頼らずに、がんばつていた。

そして、みごとに候補者上位で当選させることができた。

その年の九月、今度は藤井さん自身が、推せんされて練馬の区会議員に立候補した。

同級生からはバカにされ、近所からは誹謗されていたのが、それからはいつそうはげしくなつた。

藤井さんが動行を始めると、大の男が窓からのぞきこんで、「バカヤロウ、キチガイがまた始めた」と大声でドナル。

また近所から立候補したおやしきの主人は、遊説中に、藤井さんのことを「あんなのがたつ

28年ごろ・お山で



たつて、どうしようもない」と、大つびらに悪口をいった。

しかし、一方では演説を聞きにきて折伏され「おれも信心して、お前を応援しよう」という人もあらわれた。

もとより一銭もなかったのだから、大変だつた。選挙中はそれこそ食べる物もなく、三日ぐくくらいコッペパンやウドンの汁ですごすようなこともあつた。

それでも、そんな気ぶりもみせずに、題目をあげぬいて、早朝から、夜おそくまで一日中車に乗つて広い練馬中を遊説してまわつた。

最高点で当選

藤井さんを知る人たちは、必

死になつて応援した。

文字どおりの公明選挙だつた。ただ、真心だけが集まつて、戦つていたので。

戦うこと半月、十六日には、区民の審判がくだされた。

次の日、開票の結果は、正午までに二百五十票だつた。予想外の悪さに、みんなの顔が青さめていた。

だが、やがて、ラジオが二時の時報を知らせるころ、二千三百票で一位というニュースがはいり、一べんに選挙事務所はわきかえつた。

うれしなきに泣き出す人もいた。

藤井さんの二年間の苦闘が、みごとにむくいられたのだ。

さつそく登山して、大御本尊様にご報告し、お礼を申しあげたのはもち論のことだつた。

そのころから聖教新聞の販売店もやるようになった。

商売の方も、土台ができて、倉庫に一年分ぐらゐの材料をたくわえることができた。

それを機会に、弟の司郎さんの手に大幅に仕事をまかせ、そのかわり、今度はあらゆる地方へと、出かけていくようになっていった。

また、青年部と支部の両方から、「腹をきめろ」といっては、おこられて、ずい分苦しんだ。その間、悩んだだけに、指導力とユーモラスな話術を、身につけていった。そして、やがて地区部長専任になり、三十一年七月には、一躍支部幹事に抜てきされた。

病気にも打ち勝つ

三十一年夏、大阪の白木総支部長が参議院選に出馬したときには、藤井さんも応援にかけつけた。

このとき、池田先生が総指揮

をとっておられた。

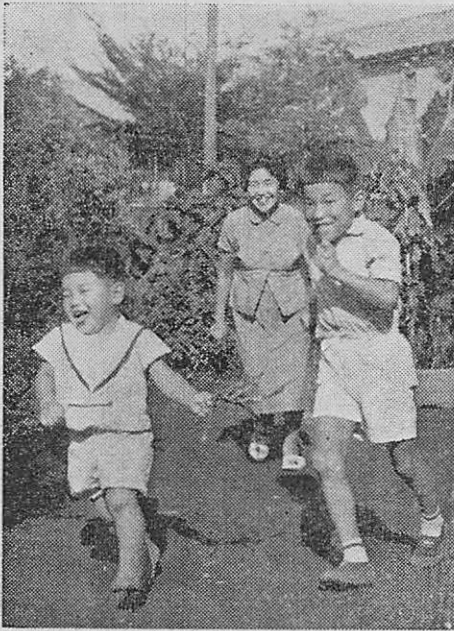
藤井さんは、大阪に着いた最初の日から先生にしかられた。そしてきびしく学会精神を教えられた。

それからの、池田先生と寝食をともにしての戦いは、ずい分つらかった。

もうダメだ、退転しようと思つたこともあった。

だが、最後までがんばりぬいた。そして、白木さんはみごとに当選した。

藤井さんは、このときしみじみと「真心に勝つものはない」と感じたのだった。



子どもたちと遊ぶ明かるい秀子さん

それ以後も、炭労問題のときは夕張へ、また九州へも、山口にも、学会の大きな闘争には必ず参加して、活躍してきた。

三十三年の春ごろから、からだの調子が悪くなった。

食事後、腹が痛くなったり、吐いたりするようになった。

小さいときからだが弱く胃も、肺病の気もあった。

それがつかれから出たものだった。医者にみせると「胃がんの疑いもあるが、胃かいようだ」という診断だった。

それでも、ほとんど休まなかつた。柏原支部長に「徹底的に直しなさい」と言われて、しかたなしに休んだが、せいせい三日ぐらいしか、続けて寝るようなことはなかった。

病氣中にも、地方へ出かけていった。

寝るのは、汽車の中だけという強行軍もやった。

そんなことをしながら、半年ぐらいで、病氣はすっかり直つてしまつた。普通なら軽くても三十本から九十本は打たなければならぬ注射を、二十本ぐらい打つただけだった。

今まで以上に、真剣に、たくさん題目をあげて、直してしま

応援にかけつけた人たちと語る藤井さん



つたのだ。

そのころからくらべると、今は二貫目ぐらいふとつてている。

一家の愛情と団結で

藤井さんは、小さいときから苦勞をしてきた人だ。

そのために、早くから意地っぱりで、自立心が強かつた。

昭和十八年ごろ、青年学校のときも、級長をやつて、みんなをリードしていた。

そのころから、まじめな努力家だった。

* * * 体 験 談 * * *

機械が好きだったので、日本の工学校へも夜学でかよった。終戦後いなかから東京へひきあげてきたときには、進駐軍の車とみると、かたっぱしから手をあげてとめさせ、ムリヤリに頼みこんで、働かしてもらったこともあった。昔からそんな実行力をもっていた。

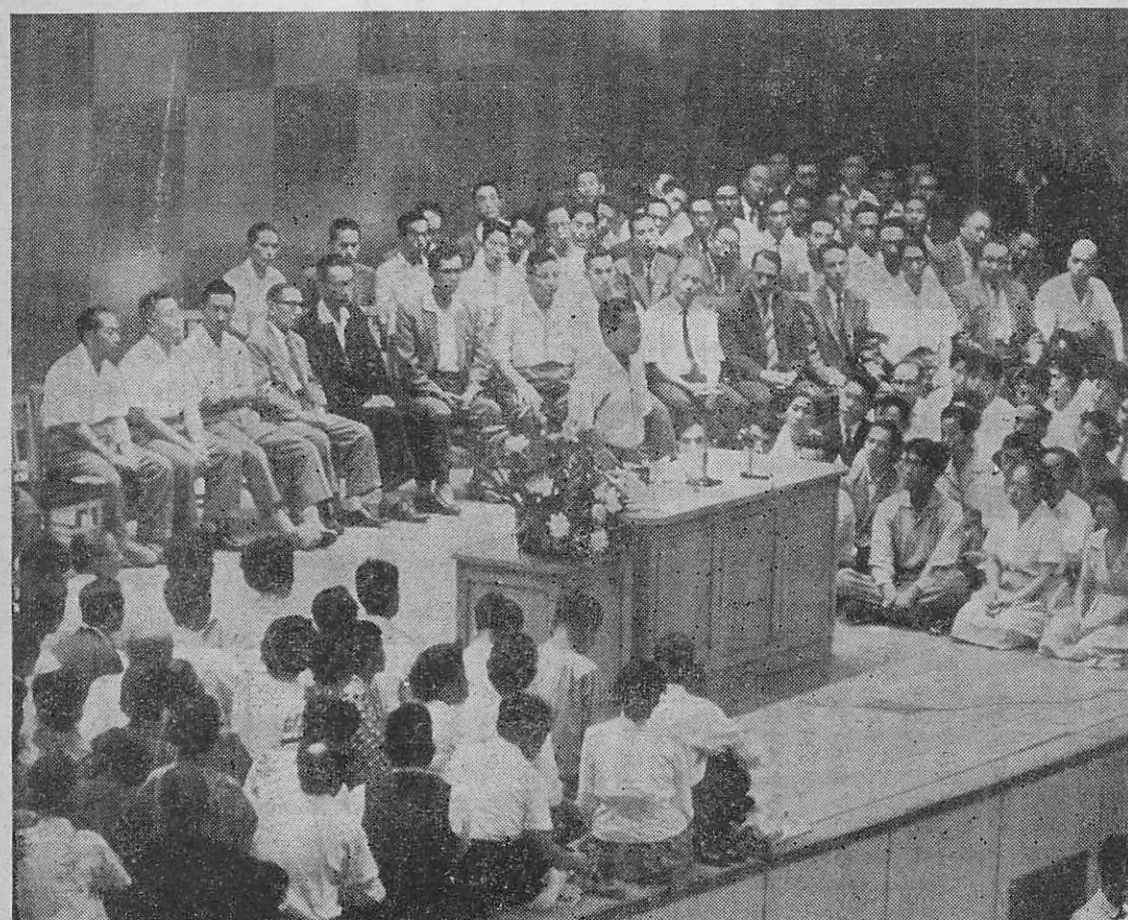
藤井さんは、人一倍親しい、兄弟思いでもある。
「一生一代の親孝行をするんだから」と、何回か群馬県までかよって、泣きながら父親を折伏して、入信させた。

弟妹から「兄貴の言うことはきかなければいけない」と尊敬され、一家の中心になってきた。
また、藤井さんの生活が苦しいときには、おとうさんや、兄弟がずいぶん力の分になって援助してくれた。

そうした、一家が信心を中心に助けあう美しい団結が、今日の藤井さんをあらしめた、一つの原因になっている。

また、どんな苦しいときでも藤井さんを信じきって、だまって家庭をまもってきた、奥さんの愛情も、藤井さんをささえてきた大きな力だろう。

子どもすきの藤井さんは、六



池田先生をお迎えした総支部結成大会 (35年9月)

人のよいババさんだ。
ひまさえあれば、いっしょに、野球をやったり、デパートに買い物にいったり、お風呂へつれていったりするのが大きなものだ。

いつまでも青年部

三十四年六月には、栄えある杉並支部旗をいただき、支部長の重任をうけた。

そして九月には練馬の区会議員選挙にふたたび立候補した。

四年間区民のために、区の会計から、ムダな支出をはぶいたり、出張旅費の節約をはかるなど、まじめに努力してきた。

それが認められて、また最高点で当選した。

そして、本年六月、関東第四総支部結成と同時に、副総支部長の重任をうけたのである。

「とにかく、真心をもって、指導されたとおりに信心していくこと、これ以外にない。わたしは、幹部を見習って信心してきただけだ」と語る藤井さんは、「今でも青年部にズーッという気持だよ」と、少しも青年の意気な失なっていない。

これからも、さらに大きく活躍されることだろう。

(練馬区南町四の六、二二六)

子ども のりっぱに 信心で

七人の母としてやりぬく

墨田支部婦人部長

広田キヨさん



「子どもがいるので、なかなか学会活動ができなくて」
そういう悩みをもった婦人部の人も多いことだろう。

また、商店や事業をやっている家庭の主婦も、少しのひまもない毎日を送っている。

そうしたなかで、信心をやりぬいた、婦人部の幹部の人たちはどうやってきたのだろうか。

広田キヨさんは、二十六年の八月に入信したときには、三人の子もちだった。

それからの九年間に、次々と赤ちゃんが生まれて、手のかかる子がいらないという日は一日もなかった。今では、上は十五歳から、下は一歳までの、三男四女のりっぱなおかあさんだ。

また、入信当時は家族だけでやっていた工場も、今では発展して三十人からの人を使うようになっていている。

まずいそがしい主婦の代表といってもいいだろう。

その中で、どのように信心を続けてきたのだろうか。

ことわりについて入信

広田さんが入信を決意したのは、折伏されたのをごとわりに入ったときなのだからおもしろ

い。

古い知りあいの赤須さん（現向島支部長）に毎日のように折伏された。

赤須さんもまだ信心したばかりだったので、「絶対に正しいんだ、すごいんだ」の一点ばりだった。

一回でいいからといってきそわれた座談会へは、最初ご主人の弘雅さんが出かけていった。

ところが、その席へ身延の信者がやってきて、法論のようになったので、「ケンカがはじまるような信心ではゴメンだ」と逃げて帰ってしまった。

次の日、また赤須さんがきて「もう一度だけきてくれ」というので、その熱心にまげ、「今度は君がいつて、ことわってきてくれよ」といわれ、しかたなく広田さんが出かけていった。

始めは体験談を聞かされても、（なんだ、倭成会でも同じこといってるわ）と思ったが「絶対のものなんだ」という一言にうたれて、信心する決意をきめた。

家へ帰ると、「出ていくとき、なんていっていったんだ」

談 驗 体

「多勢のなかで、まるめられてきたんだ」
「信心したって、よくなるわけがない」
と、みんなに反対された。
だが、とにかくやってみるんだと、信心を始めた。

罰と功德で一家入信

初信の功德といえるのは、まず広田さんのからだに出た。
昔から虚弱で、ムリのきかないからだだった。少し動くときぐ動キがするので、心臓の葉をいつも飲んでた。

そのうえ、慢性盲腸炎で、年中シクシクおなか痛んで、医者にも早く手術しろといわれていた。

それが、とびまわっているうちに、動キもしなくなり、おなかも痛まなくなっていた。

（百日以内に、必ず正しいという証拠がでる）といわれていたので（これはすごい信心だ、なんとか家中の者にやらせたい）と、泣きながら題目をあげたこともあった。

夜座談会から帰ると戸をしめてしまったり、口をきかなかつたりして反対していたが、それを見て、まずご主人が（座談会

には絶対出ない、ほかの人でなくて君がいっしょなら行く）と、条件付きで、一か月おくれで御授戒を受けた。
一方、弟の甚野さんは、

「姉さんが信心したって、関係のない僕に罰が出るのはおかしい」と、お祭の日にみこしをかつぎにでかけた。
はじめのときは、みき所で酒をのんで、グ Deng デンになり、ヨタ者と刃物をふりまわす大げんかをやり、大八車にしばらくつけてつれてこられた。



妹さんの結婚式の時・戸田先生と（右から三人目）

それでもこりずにまた出かけていった。
そのときは、足をねんざして痛さにひや汗をかいて、しばらくは動けなかった。
こうして、功德と罰のはっきりした現証で、広田さんの一家は、二か月目からそろって信心するようになった。

かつ節二本から始めて

終戦直前に結婚した広田さん夫妻は、空襲ですっかり丸焼けになって「目覚し時計とかつ節二本」しか残らなかった。

二十三年ごろから、働いた工場の主人と、共同でオモチャの製造を始めたが、経営不振で、二十五年から独立していた。

ケトバシという、プレス機械一台を、ご主人と甚野さんの二人が交替で動かしていたが、

メーカーの下うけて賃金も安く、毎晩十時、十一時まで残業しても、月にやっと二万円ぐらいにしかならなかった。

九人の大家族では、生活は苦しかった。

子どもが生まれても、お産婆さんに払うお金もなく、（こんなことなら、いっそ空襲でひとり思いにやられた方がよかった）

というような目がつづいていった。

入信したころは、広田さんも子どもをおぶっては、機械を動かしたり、帳面をつけたりしていたのだ。

幹部から、「毎晩そんなに仕事をしても、食うや食わずの生活ではないか。それでは一銭銅貨を数えているのと同じだ。信心をしつかりやって、功德をいただいで千円札を数えるような事業をやりなさい」とこんと忠告された。

ご主人は、この時から信心に目覚め、折伏に座談会にと出かけるようになった。毎月五世帯は折伏していた。そして、帰ってから、また仕事をした。徹夜することもたびたびあった。

そのうち、新しいオモチャの形を考えついた。

さっそく二晩徹夜して見本を作って、問屋へもっていった。ところが「これと同じものがあるからダメだ」とことわられて、ガッカリして帰ってきた。

広田さんは、（せつかく拝むようになったのに、ここで主人がぐずれては……）と思い、真剣に題目をあげた。

すると間もなく、追っかける

ようにして問屋の主人がきて、「内容をみたら、まるつきり違った。これはよい形だから、作ってもらおう」という話だった。大きなメーカーでは、専門のデザイナーを置いて新形の研究をやっている。それを広田さんは題目でヒントをつかんだのだ。

この時、はじめて問屋と正式な取り引きができた。それが事業発展の第一歩だった。

法華経とオモチャ

二十六年の末ごろ、広田さん夫妻は戸田先生と神田の本部ではじめておあいした。

それからは「向島の広田です」といっては、たびたびご指導をうけた。

そのころは、ご主人の方が積極的に先生にぶつかっていた。

新しいオモチャの形を考えるたびに、先生のところへもっていっておみせした。

先生は、いつも喜んでそのオモチャを動かして、楽しんでくださった。

広田さんは、自分の作ったオモチャで先生が楽しんでいらしゃる姿が、涙の出るほどうれしかった。

「先生、法華経には生活のことは何でも書いてあるとおっしゃいましたが、オモチャのことでいいですか」と質問して、先生を困らせたこともあった。

また、妹さんの結婚式のときには、先生みずから、仲人になってくださった。

また、大きな事業に失敗した人が「もう一度やりたいが、できるでしょうか」と質問して、「できる。絶対の御本尊様だ。毎月折伏して、お山へいき、御開扉をうけなさい」と戸田先生から指導されたのを聞いて、よし自分もと、次の月から本山へお参りにいくようになった。

今のような月例登山会のないときで、まだわずかな人たちが登山していなかったときだ。

「母親の信心」で育つ子

折伏もずい分やった。

広田さん夫妻は、半年たらずで五十世帯の折伏をやり、一べ

んに班長・班担に任命された。福島、熊谷、埼玉、千葉と、地方へも月に二三回は出かけていって折伏した。

どこへいくにも、広田さんは赤ちゃんをおぶっていった。そのことが、一番の悩みだった。

た。座談会へいけば、中心にならなければならぬので、出かける前には、真剣に題目をあげて、「子どもが泣きませんように」とお願いしてから、出かけていったものだ。

「私は子どもを育てていかなければならぬ役目があるんだし信心は一生かかってやるんだから、子どもたちが大きくなってから、信心をやってもおそくないでしょう」と、泣きながら

お山へも、いつも子どもつれて（前列左から二人目）



地区担当員になったころは、工場が大きくなり、人を使うようになって、食事の世話をしなければならぬし、せんたくは夜中ではなければできないような日がつづいた。

星生婦人部長に話した。

星生さんも、同じ悩みで戸田先生から指導されていたので、「子どもを育てられないようでは婦人部とはいえないわよ。元気をだしてやりなさいよ。」

戸田先生は、若いから生ま

れるんじゃないか。フランスが滅びたのは産児制限をしすぎて民族の力が弱くなったからだ。子どもが生まれてくるのは、民族が若いという証換なのだ。お前がしっかり信心すれば、子どもは、ほうっておいたってりっぱになるよ」と指導してくださったのよ」と励ました。

それで、また元気をとりもどして、信心していった。

たしかに、子どもはおとなしくて、元気に育っていった。

おばあちゃんが、

「お前はうきぎみだ。子どもを生みつばなしにしても、ひとりて育っちゃう」と言うぐらい、心配がかからなかった。

ご主人も、広田さんのいない間は、子どもの世話から、食事のめんどうまで、よく協力してくれた。

そのうち、女中さんもくるようになり、今では、いつでも安心して出られるようになってしまった。

功德で事業順調に

おもしろいことに、広田さん一家の功德は、土地や建物の形であらわれている。

まず始めが家の問題だった。

体験談

それまで住んでいた家は、前に共同で事業をやっていた人が建てたものだったので、毎日のように買い取ってくれといわれてもう三年もゴタついていた。信心してしばらくたったころ相手の人がきて、

「なんとかはつきりしてくれ、今晚寝ずにでも話をつけよう」と言い出した。

広田さんは、今晩中に解決させてくださいと、真剣に御本尊様にお願ひした。

不安のなかで、ご主人が交渉にいらっている間中、題目をあけていた。

十五分ぐらいすると、ご主人がもどってきて、

「この家くれるってさ」とボツンといった。

今まで、こちらの言い分など全然聞かなかった相手が、広田さんの主張を認めて、「一切を水に流して、手を引こう」ということになったのだ。

入信した日から、ちょうど百日目だった。

家の前のあき地に、何か建てているなと思っただけで、できあがるまで、何だか知らなかった。できあがると、問屋の主人がきて、

「せまいところでは大変だろうから、使ってくれ」といい、一銭も出さずに、工場が手にはいった。

それが、入信一年目だった。それからは人も使うようにな

り本格的な事業に発展した。三年目には、戸田先生から、「今年中に百万円ぐらい貯金しろよ」といわれて、「よし、先生にご報告できるようにならう」と、一生懸命働いた。



すくすくと育つ子どもたちをみつめる広田さん夫妻

ところが、十二月になっても全然できるみとおしもたたなかった。

広田さん夫妻は、一か月間、毎晩丑寅勤行をやり、必死に折伏をした。

とうとう、大みそかの夜になつた。もうあと数時間で新しい年がくるというとき、問屋の主人がきて、広田さんの家の建っている土地を「買ってあげたよ」といってくれた。

土地の値段は百五万円だった。現金でこそ残らなかったが願ひどおり百万円の財産が、広田さんのものになった。

こうして、事業は一步一步発展した。今ではおもに輸出向けのオモチャを専門に作り、三十人あまりの人を使って、年間三千六百万円の売りあげがあるようになっている。

池田先生にも励まされ

二十七、八年ごろ広田さんの家には、当時第一部隊長だった池田先生がよくいらっしやつた。広田さんの家で、青年部の会合が開かれていたからだ。

「最後には必ずよくなるんだから、信心についてこなければ後悔しますよ」と、苦しかったぞ

のころの広田さんを、力強く激励してくださいました。

また、「こうやっていることが、全部歴史に残るんですよ、広田さん」とも、「ここが必ず中心になるんですよ」ともおっしゃった。

そのときは、何のことかわからなかったが、このごろ、ようやく気がついて、池田先生におあいしたとき申しあげたら、「いまごろ気がついたのかい」といって笑われた。

今、広田さんは、「ここまでこられたのも、主人があればこそと、本当に感謝しています」と話している。

広田さんを入信以来めんどろみてきた、星生婦人部長は、「ご夫婦とも、めずらしいくらい純真人ですね。

広田さんは、やろうとする赤ちゃんが生まれるので、ずい分悩んだようですが、最近では現在の立場で楽しみきってやっているようです。

子どもが一人生まれるたびに、事業が大きくなって生活がよくなっていくようです」と話している。

(東京都墨田区寺島町七の一四二)

二箇相承を論ず

渡 部 通 子



へ、七百年の法灯は連綿として、現御法主、第六十六代日蓮上人現下に伝えられている。

いま、われわれ創価学会員が、正しい仏法にあり得て功德に浴し、たち上ることができたのも、この御相承あればこそである。この信心の功德を考えれば、日蓮大聖人から日興上人への御付囑状は、絶対に厳存した。いま、世に二箇相承をめぐって種々の疑難あり、迷論愚説が横行しているが、ここに、御相承の真意を拝し、歴史的背景を考察し、さらに世間の妄説を粉粹して、御相承の真義を示したいと思う。

(2) 二箇の御相承

身延相承書、池上相承書の二箇相承は、日蓮大聖人弘安五年御入滅の年、したためられたものである。これは御一代の説法すべてを、日興上人にゆずられ、未来の広宣流布を託された、厳然たる御文証である。いわく、

身延相承書（總付囑書）（一六〇〇）

日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付囑す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状

一、二箇相承について

(1) はじめに

唯授一人嫡々の相承は、仏法上の大原則であり大命題である。御書にいわく「伝持の人なければ猶木石の衣鉢を帯持せるが如し」（顕仏未来記）（五〇八）、

「此の経は相伝に有らざれば知り難し」（三九八）、「此の法華経は知らずして習い談する者は但爾前の経の利益なり」（四一四）（一大聖教大意）と。また、この相伝には、總別の二義があり、これに背けば仏道を成ずることはできないのである。

曾谷殿御返事（一〇五五）には、「惣別の二義少しも相そむけば成仏思も

よらず、輪廻生死のもといたらん」と。

孔子は弟子数千あれども道を曾子に伝え、過去の日月淨明德は、いっさいの仏法を唯一人一切衆生喜見菩薩に付囑した。釈尊も湧出品において、無量の直弟を召し出したりといえども、上行一人をもって結要の大導師とし、天台は章安に、伝教は義真に限ったのである。三世の諸仏皆然り。

然して、末法出現の御本仏日蓮大聖人は、その御一代の究竟、三大秘法の仏法を誰人にゆずられたか。いうまでもなく、二祖日興上人に唯仏与仏の法水は、写瓶されたのである。そして、日興上人から日目上人へ、日目上人から日道上人

を守るべきなり。

弘安五年壬午九月 日 日蓮在御判

血脈の次第日蓮日興

池上相承書（別付囑書）（一六〇〇）

「積尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家出家どもの輩は非法の衆たるべきなり。」

弘安五年壬午十月十三日 武州池上

日蓮在御判

(3) 二箇相承を拝す

身延相承書（総付囑書）

「日蓮二期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付囑す、日蓮一期の弘法とは、大聖人御一代弘法の所詮、すなわち寿量文底深秘の大法、三大秘法の大御本尊である。この三大秘法総在の御本尊は、すでに大聖人、弘安二年十月十二日に弥四郎国重を

対告衆として、一切衆生のために凶顕遊ばされ、滅後の大導師日興上人に与えられたものである。証拠は、日興上人の日目上人への譲状にいわく「日興身に充て給わる所の弘安二年の大本尊……」と。

そして、この法体相承は、六老の中でも特に行戒堅固、智徳絶倫、常随給仕第一の日興上人になされたのである。

「本門弘通の大導師たるべきなり」とは、広布の戦における大導師のお立場で

ある。日興上人は「大の字は数量を超越した大の字である」（二箇相承書 大白34号）とおおせであるが、この弘通こそ難事の中の最難事である。「未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事」（日興遺誡置文）（一六一八）との日興上人の御命令に、われわれはひたすら励むのみである。

「国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり」、

三大秘法抄の「戒壇とは王法弘法に冥じ弘法王法に合して、乃至靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か」（一〇三三）との御教示と合わせ、化儀の広宣流布の御命令と拝する。

したがって、代々の大導師は、この立正安国、王仏冥合を理想として、必らず国家諫曉の申状をきき上げられたのである。

富士山に本門寺、という名称も、末法広布の時、富士に弘法の根本道場が建つとの、壮大な御予言である。いま、創価学会員が富士の裾野の大石寺に、大御本尊の御威光にてらされて、群がり結果する姿は、果して何を意味するのであるか……。

「時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり」、そして、奇しくも七百年。

その間厳然として御僧侶は大御本尊を奉持して、国家の弾圧、貧苦困苦の中を護り通し、御法主猊下の丑寅の勤行は一日としてかかさず続けられ、そしてい

ま、われわれ信徒はたち上った。いまこそ、その時が来たのではないか。そして、今後二十年、化儀の広布が成った時、始めて三大秘法の事相が成就されるのである。

そして、「我が門弟等此の状を守るべきなり」とは、滅後の弟子に対する勸文である。

「弘安五年壬午九月 日、すなわち弘安二年に出世の御本懐たる大御本尊を建立され、御入滅を一月後にひかえて、身延をたち池上へ向われるころのおしたためである。日付けがないからといって、疑難する他門の輩もあるが、問題外である。これについてはあとでべる。

「血脈の次第日蓮日興」と。嫡々唯授一人の相伝は明々白々である。唯仏与仏の御境地、師弟相對の深理は、ここに極まっているのである。御義口伝、百六箇、本因妙抄等の甚深の法門相承も、等しく日興上人に伝えられていることを、深く思い合わせるべきである。

なおこの御相承は、総別にわけて総付囑の御書であり、また、日興上人は「日蓮一期の弘法……大導師也」とは、弘宣付囑の文である、と撰時抄文段におのべになつてゐる。

池上相承書（別付囑書）

「積尊五十年の説法」とは、これに附文と元意の辺がある。附文の辺に約すれば、三世十方の諸仏の能生能成能養能栄の種である法華経である。しかし、元意

の辺に約して単的にいえば、積尊とは文底の積尊、すなわち久遠元初自受用報身如来であり、その所説の法体は南無妙法蓮華経である。

そして、「白蓮阿闍梨日興に相承す」と、重ねて日興上人へ御相伝遊ばされている。然して、この御相承は、伝持付囑の御文である。撰時抄文段にいわく「積尊五十年の説法……（略）身延山久遠寺の別当たるべしとは、是伝持付囑也」と。涅槃経では、釈迦の正法は悉く摩訶迦葉が相承し、仏と等しく、衆生の大依止となつたのであつた。

「身延山久遠寺の別当たるべきなり」。身延という文字も久遠寺の寺号も、大聖人が始めておたてになつたもの（二箇相承）で、大聖人のおわしました処。その寺格は、日蓮門下の総本山であり、広布の指揮所なのである。その別当とは、とりもなおさず、全宗門統一の総大将にほかならない。

「背く在家出家どもの輩は非法の衆たるべきなり」、

この御文は、さきの身延相承における勸文に対して、誠文と拝する。勸誠の二文、心して仰ぐべきであらう。

そして、この厳誠は、現当二世の弟子に与えられた。すなわち現には、膝下の御門下においてさえ、五老僧等の師敵対の動勢あり、当には、身延、中山、池上、

俊成会等々、大聖人の法義を破つて恥じない、現代の姿を予知されてのものである。聖人知三世事(九七四)にいわく「委細に三世を知るを聖人と云う」と。

この厳誠に応えうる者は誰か。日蓮正宗の僧俗である。恩師戸田先生は、大聖人の教えを虚妄にするな、と呼号され、会長池田先生は、戸田先生の教えを実践しきる、とたち上つておられるのである。

「弘安五年壬午十月十三日」、

すなわち大聖人御入滅のその日である。御臨終のみぎり、池上において大聖人は、さきの身延相承書に、さらに念を押して、滅後のため、別して日興上人に、御付囑状をしたためられたのである。ただ、おそれ多い極みである。

(4) 歴史的背景

また歴史上の事実からみても、大聖人から日興上人へのご相承は、必然であった。六老の中でも智徳傑出し、大聖人御在世中には、御抄の代筆や、御本尊の書写等もつとめられ、伊東に佐渡に、常隨給仕遊ばされたのは、日興上人唯お一人である。甲斐・駿河・伊豆方面に築かれた強大な教団といい、四十九院の法難、熱原の法難に於けるご活躍といい、五老の誰をもって比することができよう。

したがって、大聖人ご入滅に當つて、いっさいを相伝し、身延山の総貫主となられたことに、異議を唱える者は、全くなかつたのである。地頭波木井氏などは、日興上人の晋山を大聖人の再来とまで喜こんだほどで、(史料類聚)滅後も数年間、日興上人は身延にあって、弟子檀那を統率されたのである。公然衆知の事実に、御相承をふり廻す必要もなかつた。

宗内通俗問答大意(第十四章)にいわく

「第一、宗祖文永八年九月十二日竜の口の御難、発迹顕本の後の、佐渡の国へ御配流に際し、日興上人随従し給う、即文永九年正月元日、初めて十界互具の曼荼羅を顕わし、日興上人に与え給う(略)是れ則ち、称歎付属の御本尊なり。之を以て之を案ずるに、日興上人に一期弘法の御相承あることは、御帰寂の近き弘安五年九月に至りて始りたるに非ず、唯仏身仏の御内証は、既に入門受戒の朝より、補処の法器と内定し給う御聖慮なりしこと、推量し奉るに余りあり。

第二、文永九年六月十三日、御授与の御本尊にいわく「付法沙門日興に之れを授与す」の御傍書あり、
第三、文永十一年太歳甲戌十二月日の御本尊にいわく(略)、
第四、建治二年の御本尊にいわく(略)、
右皆日興上人に授与し給う御本尊なり。

り、
第五、弘安二年十月十二日に至りて、一天四海広宣流布の刻、本門の戒壇堂に安置し奉るべき用意の、御本尊として顕わし給う、則ち本門戒壇の御本尊と称す(略)、此の御本尊こそ、宗祖御一期弘法の大事、法華本門の正躰、一闍浮提の一切衆生、成仏得道の導師なり、故に之れを御滅後の導師、白蓮阿闍梨日興上人に相伝し給う。大事秘沈尊無過上の御本尊なり、我が宗祖御一期の仏法、血脈相承の尊重なること、

敢て知るべきなり、信すべし尊むべし。
そして今、富士大石寺には、日興上人から日目上人へ、日道上人へ、と今日にいたるまで、金口嫡々の御相承によって、大御本尊様の厳然とおわします、この現証をみよ。
経巻相承などをたて、生死一大事血脈を読み誤まつて、信心があれば血脈があるなどという邪義をかまえる輩は、根本の相伝を誤まるゆえに、頭破作七分なのである。

二、外難を破す

次に、二箇相承に関する他門流の妄説を破折して、正宗の正義を示そう。前にもべた通り、日興上人の血脈相承は、厳然たる歴史上の事実である。二箇相承や身延離山についての疑難は、すべて二、三百年も後の暗愚な伝説を基に作られた愚論ばかり、身延派、国柱会、仏立宗などの最近の疑難も、すべてこうした迷論を、論拠としているにすぎないのである。

(1) 二箇相承の古写本

古来、二箇相承はなかつた、後世の偽作であるという、ばく然とした疑難がある。しかし、これは北山本門寺、西山本門寺、保田妙本寺等の古文書から、二箇相承が、天正年間武田の乱のドサクサにまぎれて、紛失したことがはっきりしている。(日興上人詳伝 大白十一号)
すなわち二箇相承は、日興上人が身延から富士へ大石寺から重須へ、お持ちになつて三百年余りを経たころ、紛失したものである。ないものが紛失することは、あり得ないことではないか。
また、それまで存在していたという事実も、次にあげよう古写本が、現存

論文講評

助教論文は、筆者の長年にわたる信心の結晶である。ゆえに、これに論評を加えるということは、みだりになすべきことでも、でき得ることでもないのであるが、筆者の努力に敬意を表しつつ、あえて、所感の一端をのべておきたい。

御書全集発刊の辞において、恩師戸田城聖先生は「創価学会は、初代牧口常三郎先生之を創設して以来、この金言を遵奉して（諸法実相抄、行学の二道をはげみ候べし云云の御文）純真

強盛な信心に基づき、行学の二道を励むと共に如説の折伏行に邁進してき

たが、劍豪の修行を思わせるがごときその厳格なる鍛錬は、学云の伝統・名譽ある特徴となっている。従って大聖人の御書を敬い、之に親しむこと天日を

拝するがごとく、又会員一同、新旧の差別なく之が研究に多大の時間を当てているのである」とおせられている。

ゆえに、助教論文に合格するといふことは、長年の間「劍豪の修行を思わせるがごとく厳格なる鍛錬」を経てきてはじめて認められるのである。単なる学識、学力の問題ではないのであ

る。そしてその上に「学力」が十二分に要求されているのである。今後、論文を提出する立場の方々に、このことをしつかり身に帯して頂きたいと思う。

また会長池田先生から論文合格を認められた渡部さんには、心からお祝いの意を表すると共に、今後の精進を合わせて期待申し上げたい。

論文を通して、文章に気概が満ちて、邪義破折の精神が貫かれていたことは、何よりも喜ばしく感じた次第である。論文は配慮こまかく清書されて

邪義破折の精神が横溢

教授 石 田 次 男

いて、さらに最後の訂正の跡も見え

た。多忙の中でよくぞ……と思う。

内容については、二十枚という限度の中で、まとめられたものであるから、見方によっては文証不足や、論旨の短いきらも、部分的にはあるだろうが、最少限度に必要なものは、そなわっているとしていいであろう。論旨

進展の順序も正確である。ただ、一か所だけ、恐らく勇の余りとは思われるが、表現のすぎた個所がある。それは「歴史的背景」の部分であるが、

「滅後も数年間、日興上人は身延にあって弟子檀那を統率されたのである。公然衆知の事実には、御相承をふり廻す必要もなかった」と、つづら

れているが、「ふり廻す」は、事、御相承と御開山日興上人に関するだけに、別の表現を取ってほしかった。

また訂正を要する所が一つある。それは身延相承書の中であるが、「我が門弟等此の状を守るべきなり」とは、滅後の弟子に対する勸文である。

とつづっているが、堀親下はこの文について「門中への厳訓、三秘実現の重事に、違反する勿れと厳戒を垂れらるるのである」と仰せられているから、ここは勸文ではなくて誠文である。従って論文中、池上相承の方の

「先きの身延相承に於ける勸文に対して、誠文と拝する。勸誠の二文、心して仰ぐべきであろう」との部分も関連して訂正を要しよう。

すなわち、総付囑書の末文は、この御書内だけでは誠文であるが、両相承書の末文を相対すれば、前者は勸文、後者は誠文の姿を生ずる意味でなければならぬ。

するとところから、はっきりしている。

〔要法寺日辰写本〕 弘治二年七月（祖滅後二七五年）に重須本門寺で二箇相承を拝し、原本通り臨写したものが、版刻されて西山に現存する。（日興上人詳伝）これは紛失前二十二年のもので、文体も字句も、もつとも中心とされている古写本である。

また、佐渡世尊寺には、日健の写本があり、同寺目録には、日興上人御筆となっている。しかしこれは、字配は同じだが、筆法はやや似ているだけ、（上人詳伝 大白十一号）だといふ。

〔五人所破抄見聞〕 「日蓮上人の御付属、弘安五年九月十二日、同十三日の御入滅の時の御判形分明なり、爰に本因妙の行者、日蓮大聖人は釈迦如来娑婆往来八千度の間は〇、本門寿量品に於ても、秘密し給う処の御内証、結要五字の真文を譲り給うといえども、無常の相を娑婆に訓え、一瓶の法水を日興に御付属あり〇六老僧ありといえども、法主は白蓮阿闍梨に限り奉るなり」（富要集疏釈部）

日眼は、南条時光の末子、妙蓮寺五世、開山日華の二代目に当たるが、これを書いたのは、祖滅後九九年である。

〔類聚翰集私〕 「私にいづく此の御仏法を、聖人白蓮に御付属の御判右に在り、猊尊五十余年の説教・白蓮阿闍梨日興に

之を付属す、身延山久遠寺の別当たるべし、昔く在家出家共の輩は非法の衆たるべきなり、弘安五年九月十三日、日蓮在御判、血脈次第日蓮日興、甲斐国波木井郷山中に於て之を因す。

日蓮一期の弘法白蓮阿闍梨日興に之を付属す本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立すべきなり、時を待つべきのみ事の戒法とは是なり、中んずく我門弟等此の状を守るべきなり、弘安五年十月十三日日蓮在御判(富要集宗義部ノ一・二巻)

左京阿闍梨日教は、要法寺から大石寺日有上人に帰服した僧、これは長享二年(祖滅後二〇七年)以前の臨写である。その他、日教のものは、百五十箇条(祖滅後一九九年)、六人立義破立抄私記等に写しがあるが(以上富要集宗義部ノ一)年紀の入れ違いや付記の誤りがある。(これをめぐる疑難はあとでのべる)

以上、あげた古文書は、すべて紛失以前の古文書である。これでも二箇相承が、なかつたなどというのであろうか。またこれで、二箇相承の全文を、始めて引用したのは、祖滅後一二年八年に生まれた日教だから、おそらく二箇相承は、祖滅後一五〇年ごろ、偽作されたとする疑難も、デタラメなことが、はっきりするであらう。

(2) 比較的古い疑難を破す

比較的古い疑難では、まず越後本成寺日現(祖滅後三三三年没)の、五人所破抄斥があげられる。その中で日現は、五人所破抄を破折しながら、二箇相承を引いて偽文書とし、日代の筆に似ている、といつている。(日宗全書 法華宗部)

しかし、これは▼引用の二箇相承に誤りが多い、▼大石寺本門寺の起源も全くデタラメ、▼五人所破抄や百六箇等、日現は自分の意見と違う点は、すべて日代の所行だとしているあたりからみても、歴史に暗い幼稚な人が、聞きかじりの伝説を基に、つくりあげたものだ、堀上人はかつ破されている。

その他、真流正伝抄(本隆寺五世日修)や、当家諸門流継凶事(池上系日憲)のような、大聖人滅後二、三百年ころ発生した愚伝虚説もあるが、身延を日向にゆずったなどというあきれた主張は、日修以前には誰一人としてとなえたものはなく、日興上人が三回忌のときに宝物を盗んで、身延を出たなどという日憲の妄談などは、いままさら、本気にとり扱うものもない有様だ。(大白五四号学会に詳)
(批判の妄論を破すに詳)

(3) 最近の妄論を破す

さて、以上のような、伝説や謬義をよみかじっては、学会対策にやっきとなり、己義をかまえて、戒壇の本尊や二箇相承を、否定しているのが、最近の邪宗日蓮宗の徒輩である。

創価学会批判(身延派)や、興尊雪冤録(高田聖泉)や、板本尊偽作論(安永弁哲)などについては、すでに宗門に於ても学会でも、完ぶなきまでに破折済みであるが、ここに、彼らの珍論のいくつかをとりあげて、鉄槌を加えることにした。

まず、付嘱は、六老の三位である興師一人にあるわけはなく、六人に与えられたとする、身延派の邪説。(学会批判、興師考(高田聖泉)等)
これは大体、自義なのか、経文に依ったのか。三世の仏にそんな相承があったのか。日興上人に対する唯授一人の相承は、前述の通り厳然たる事実であり、誰人も異論をはさむ余地はない。また、六老の順は、唯剃髮受戒の前後に従っただけで、御遷化記録には、わざわざ「不次第」としたためられているではないか。大法付嘱とは無関係である。

また、唯授一人を否定するために、彼らの持ち出す御遺物配分事と称するものは

は事実無根。西山にある興師御正筆の、御遷化記録と比べてみれば、筆跡も異なり、内容についても、御遷化記録には「註法華経と立像釈迦は墓所へ置け」とあるのに、配分事では「註法華経は日昭に与え、立像は日明に与える」となっているのはどうしたことか。日興上人の原殿御書には「日明が奪い取り」とあり、又中山系日親の伝燈抄にも、この日朗の所行が記録されているのだ。この一事からみても、偽書なること明白ではないか。

六老撰定についての証明を、行学院日朝の元祖化導記に求めるのも、とんでもない話。なぜ、興師直筆の御遷化記録を引かないのか。

池上相承が、御入滅の直前に認められるわけがない(学会)というのも、正信の信なきものたわごとである。理につまらぬに破れるといおうか。付嘱に総別あり、また、たちまちに分裂する御門下の将来をみ、その退転を防がんがため、身延相承書に加えて、おしたためくださった、御本仏の大慈大悲を拝すべきである。

日教の古写本に、御文の入れ違いや、チグハグな点があるから偽書だ(学会)、というののもあたらない。何も偽書ならわざわざマチマチに作るわけがなからう。おまけに日教は、九世日有上人の時に、要法寺から帰伏した僧である。御相承書は大事秘要の書で、みだりに披露すべき

ものでもなし、日教も、一見の後書いたもので、古写本に間違いがあるのはむしろ当然である。見当はずれの妄難だ。

更に、日興上人の古写本がないのは変だ(学会)という批難も同様である。公然

衆知のことに、何で文証々々ときわぐ必要があるのか。もったいなくも、大御本尊様に御文証のなきが如くである。もつとも、天台沙門となるような輩に、御相承の何たるかわかるはずもないが……。

とりあげるのも大人げないが、積尊五十年の説法というのでは、権法を相承することになる(批判)というに至っては、幼児にも劣る恥論である。相対・絶対を混乱したのか。絶対妙の立場からすれば、五十年の説法は、みな妙法の一法に含まれるのである。

反論するが、それでは一体、大聖人の仏法はどこに相伝されたのか。まさか真赤な偽物日朗譲状などを、いつまでも、固執するわけにはゆくまい。すでに、徳川の末、石山学頭久遠院日騰上人によって、完全に破られた記録もあるし、最近では稲田海素や、高佐日焯、安永弁哲でさえ否定しているではないか。

横浜問答で破れた田中智学をかき、興尊雪冤録などで、高田聖泉が、唯授一人を否定しているのも一人相撲。やるなら御書と法華経で批判せよ。

対創価学会問答参考では、高佐がやっきになって本門寺号を論難しているが、「大聖人の立てられた本門寺の名称は唯

一つ、全宗門の最頂にたつ、本門三大秘法の、唯一の本戒壇を有するところの名称である」(二箇相承論講)との堀日亨上人の教えを拜してみよ。

また、折伏の折伏というパンフレットの中で、石川泰道は、身延相承書に、日付けがないから偽書だという。こんな頭で、両巻相承まで疑難されてはたまらない。

御書には、年号や日付けのないものは沢山ある。

開目抄、撰時抄、当体義抄、本尊問答抄、如説修行抄、

八幡抄なども、すべて偽書というのか。御相承書は、突然書かれたものではない。日付云云で偽書扱いとは、官憲文書的思考に頭がこりかたまって、御本仏の大慈悲など、受けることすらできない証拠である。

最近、浄風会までが、こうした点を云云しているのは、笑止千万である。

(4) 結 論

このように、二箇相承に対する疑難は、すべて信心のない、大聖人の御真意にそむく、逆賊の徒のしわざである。

もし御相承なしとすれば、一体いすこに信心の血脈があるろう。血脈なく法脈なくんば、われわれは一体、どこに信心をたよるか。寿量品にいわく「遣使還告」云云と。

日蓮正宗富士大石寺御法主上人現下のお姿こそ、唯授一人、大聖人から日興上人へ伝えられた、嫡々の血脈をつがれた、唯一人の仏様なのである。生死一大事血脈抄(一三三七)にいわく「過去の生死・現在の生死・未来の生死、三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり、謗法不信の者は『即断一切世間仏種』とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈之無きなり」

今、二箇相承は、武田の戦乱に紛失したまま、行くえが知れない。しかし、徳川家康の駿府政治録には、二箇相承を、上覧に呈した人のあることが記されており、その後、静岡県の久能山の讚妙院に保管され、お虫払いの折、拝見したという人が、日興上人にその旨申し上げており、能山住職の話では、明治維新の際、徳川家のものはすべて江戸城に移し、もみじ山文庫に収められ、朝廷にうけつがれているはず、ということだ。(日興上人詳伝に於て少しのべて)おられる、大白十一号)

広宣流布の戦の途上に、二箇相承出現となれば、それは、いかばかりよこばしいことであろう。すべて御仏智にあり、と思うが、しかし、その存在の有無

は別として、大聖人の血脈は文獻の上でも、道理にてらしても、また、現証としても、厳然と日蓮正宗に伝承され、仏法の威力は、さん然と輝やいているのである。(女子部参謀)

折伏されそう 言語生活十月号に、NHKプロデューサー

の三原葉子さんが、こんなことを書いていた。三原さんがベビーカー(小さなテーパー)をかっいで、自然のままの会話を、かくしどりに歩いたときのこと。以下、その記事。

「宗教関係はむずかしいと相場が決まっていますが、意外だったのは創価学会です。定評のある折伏の言語技術をとりたいたと考えたものの、後のあたりがおそろしいというので、かくしどりは初めからあきらめ、おそろおそろの伺いを立てました。ところが、講師いわく『かくしどり結構、わたしは心得ているが、みんなには知らせない方がいい。放送に出ることは、たとえ悪口を言われても、それも宣伝になるからかまわない』その、たくましく精神、物わりのよさには、わたしも危うく折伏されるどころでした」(原文のまま)

三大秘法抄を論ず

矢 追 秀 彦



一、はじめに

法華取要抄(三三)に、

「問うて云く、如来滅後二千余年、竜樹天親・天台・伝教の残したまえる所の秘法は何物ぞや、答へて曰く、本門の本尊と、戒壇と題目の五字となり」云云、

また報恩抄(三三)に、

「一には、日本・乃至一國浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし、二には本門

の戒壇、三には日本・乃至漢土・月氏・一國浮提に人ごとく有智無智をきはらず一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱うべし」云云、とおおせのごとく、本法の御本仏日蓮大聖人の出世の御本懐は、三大秘法の御建立にあり、なかならず、三大秘法総在の本尊たる、本門戒壇の大御本尊の御建立であった。

大聖人は建長五年四月二十八日、立宗宣言のお題目を唱えられ、弘安二年十月十二日には、戒壇の御本尊を御建立になり、末法万年尽未來際まで、一切衆生の成仏への大直道を開かれたのである。そして二祖日興上人に御相承になり、戒壇建立を御遺命になられたのである。三大秘法こそは、実に、末法下種の正体であ

り、宗門の奥義である。

今ここに三秘整足してお示しになった、三大秘法抄について論ずるに当たり本書の成立と御一代における位置、本書の真偽について、神力品の付属と三大秘法、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇と王仏冥合論、の項に分けて論を進めるものである。

二、本書の成立と

御一代における位置

三大秘法抄、くわしくは、三大秘法彙

承事は弘安四年(1821)四月、大聖人御歳六十歳の時、下総中山の強信者であり、大聖人の御信望あつかつた太田兼明入道を対告衆とされ、御著作になつた御書である。そして本文の中に、

「予年来己心に秘すと雖も此の法門を書き付て留め置ずんば、門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加うべし、其の後は何と侮ゆとも叶うまじきと存ずる間、貴辺に對し書き送り候」

とおのべになつてゐることく、本書御著作の目的は、大聖人御在世中にも、既にお膝元を離れた鎌倉方面において、いろいろと法門に関する論議があつた事からも、將來、弟子の間に種々の異議が生ずる事をお憂いになり、これまでの御書には見られない、三大秘法を整足してお書きになり、令法久住のため、

「一見の後、秘して他見有る可からず、口外も詮なし」

とあるごとく、内々の相承書の形において授与されたのである。かくして成立された本書は、五大部、十大部には、伝持の形態が他と異なるため、入れられていないが、大御本尊を弘安二年に御建立後、弘安五年十月、御入滅に先立ち、弘安三年正月には、日興上人へ授与された「百六個抄」に次いで、弘安四年、本書を御著作、翌弘安五年には、九月に身延相承書、十月には本因妙抄 血脈抄、産湯相承、御本尊七箇の相承、池上相承書と、重要な一連の相伝に属する書を、

御著作になっておられる所を見ても、先に上げた本書の御文より拝しても、御一代において重要な位置を占めている事が分るのである。

故に三大秘法抄を拝さなければ、大聖人の法門の終窮究竟を理解する事はできないのであり、三大秘法抄より入って、三大秘法抄に終わるとまでいわれるのである。そして三秘整足の点と、ことに戒壇に関しては、その相貌をはっきりとお述べになっている点は、他の御書には、いまだ見られない点であり、本書と身延相承書における戒壇の御文があつて、はじめて、後世のわれわれは、化儀の広宣流布たる戒壇建立への道が、明らかになるのである。故にこの書は、末弟のわれわれにとつては、戒壇建立への指南書とも拜せる重要な御書の一つである。

三、本書の真偽に

ついて

本書は「一見して他見あるべからず、口外も詮無し」の御文のごとく秘蔵されたが故に、後世において、それも徳川から明治時代へかけて、他門流において偽作論、あるいは真偽未決の議論が起つたのである。偽作論の主なるものを年代

を追つて述べると、

古くは、

日照門流の玉沢門流、

顕本法華宗の合掌日受 (A.C. 1592 / 1776)

同宗の永昌院日鑑 (A.C. 1806 / 1869)

玉沢寛林院の桓叡日智 (A.C. 1819 / 1854)

及び近年に至つて田辺善知・塩田義遜である。

また真偽未決を唱える者に、
本興寺日隆 (A.C. 1384 / 1464)

近年には、小川泰堂があり、現在の日蓮宗学者の中にも未決をいうものもある。

しかし彼らの理由には何ら理論的に見るべきものなく、大体「真蹟が存在しない点、および三大秘法抄の伝持および内容において他の御書と異なる点、ことに戒壇の問題について疑いを起こし、富士山に本門の戒壇が建立される事を否定せんがために、宗祖滅後百七十年ごろに、富士門流により偽作されたと主張するのである。

しかし一方本書の存在を認める学者は、偽作論者以前からも存在し、その数も多いのである。もつとも古いのは、三位日順 (A.C. 1295 / 1254) であり、彼の書、本因妙口決に「三大秘法抄に云わく題目に二意あり」云云、また催邪立正抄に「是れ即ち大聖の本懐御抄に分明なり」と本書の存在を示している。

その他中山の久遠成院日親 (A.C. 1407 / 1488) は本書を書写し、日慶に授与し、京都本

法寺に、それが現存し、本成房日実(不明)は、彼の書、宗旨名目に「御自筆中山に之あり乃至諸御書に御座なき大事をあらばすゆえに、三大秘法の抄と申す也」

また三大秘法襲承口決には、
「三大秘法襲承事の御書と太田殿にたまりぬ、御真蹟中山に之あり」と書き、
行学院日朝 (A.C. 1422 / 1500) は三大秘法の意をもつて立正安国の四字を釈し、

また円明院日澄 (A.C. 1441 / 1510) は、嘉会宗義抄で、宗祖も戒壇の様をば、三大秘法(抄)の中に之を立て伝えども「時をまつべし」と云う、処は何んぞと云うに、御書に、「靈山浄土に似たらん最勝の地を選んで勅宣並びに御教書の旨を任すべし」と述べ、

一音院日暁(不明)は「是れ録外なり」と雖も真筆體かに、富士重須本門寺に在る也」

また禅智院日好 (A.C. 1655 / 1734) は、「正本は富士重須本門寺に之あり」、
また一妙院日導 (A.C. 1724 / 1789) は「是れ録外なり」と雖も真筆體かに、富士重須本門寺に在り、乃ち余之を信ずる故なり」と述べ、

また優陀那院日輝 (A.C. 1800 / 1859) は、「三大秘法は三大秘法抄にあり」といい、それぞれ真蹟の存在した事を主張している。

近年には山川智広も三大秘法抄を認められている。以上の事から「真蹟あり」とするものが、真蹟であるかどうかは、はっ

きりしないとしても、本書が存在した事は、他門流においてもこれだけ多数の主張のあるのを見ても、厳然たる事実である。

真蹟がないから偽作なりとするならば、法華経も真蹟がないではないか。戒壇の問題で難する輩には「身延相承書」にも、「富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり」のかくかくたる御文が、眼に入らないのであるうか。不相伝の輩には、この明々たる御文を信じようともせず、いたずらに自己の邪義に偏執する態度は、およそ学問の良心もなく、師敵の徒輩と断ずる以外にない。

本書を拝する時、三大秘法は、大聖人の仏法の神髓であり、御本尊建立の後には戒壇建立こそ、後世の弟子の使命である。されば本書に、戒壇の様相をお書きになる事は、むしろ当然の事であり、この書あつてこそ、われわれ末弟は、戒壇建立への道を、はっきりと歩むことができるのである。誠に大慈悲のお心と拝すべきである。本書の存在を疑う輩よ、信心をふるいおこして本書を拝読すべきである。

四、神力品の付属

と三大秘法

本書は最初に法華經の付属の上から三大秘法の実体と流通とおのべになり、次に大聖人建立の三大秘法の実体を上げておられる。

釈尊は、神力品において

「諸仏の神力は是の如く、無量無辺不可思議なり。若し我是の神力を以て、無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て、屬累の爲の故に、此の經の功德を説かんに猶尽くすこと能わじ（稱歎付囑）。要を以て之を云わば、如来一切の所有の法、如来一切の自在の神力、如来一切の秘要の藏、如来一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す（結要付囑）。是の故に汝等、如来の滅後に於て、应当に、一心に受持誦誦し乃至皆塔を起て、供養すべし（勸奨付囑）所以は如何乃至、諸仏此に於て般涅槃したまふ（釈付囑）」

と説き、上行菩薩に対し、別付属をしたのである。上行菩薩は、末法に出生して法華經を弘通するのである。上行の再誕が、日蓮大聖人である。以上は文上の義であり、文底の義より拝すれば、この神力品の付属は、久遠元初の儀式であり、人は久遠元初の人である。また所居の土は、寂光本有の国土である。そして付属される実体は、「經中の要四事にあり」とあるが、御文に「実相証得の当初修行し給いし処の寿命品の本尊と戒壇と題目の五字なり」とあるごとく、久遠元初の自受用身の持つ三大秘法の仏法である。故に日蓮大聖人は、百六個抄（八一四）

に、
「久遠名字已來本因本果の主、本地自受用報身、垂迹上行菩薩の再誕、本門の大師日蓮」

とおおせのごとく、御内証は、久遠元初の自受用報身如来である。この久遠の仏法である三大秘法を、神力品で末法に弘通するための明証として、靈山における付属の儀式をとられるのである。そして上行菩薩に付属されるのである。

ゆえに本書に「此の三大秘法は二千年の当初、地涌千界の之首として日蓮體かに、教主大覺世尊より口決相承せしなり、今日蓮が所行は、靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ寿命品の事の三大事なり」とおおせなのである。不相伝の他門流においては、この付属の真意が分らず、釈尊を教主とし、大聖人を上行の再誕とのみしか見えず、混迷を招いている姿は、誠に悲しき事である。

五、本門の本尊

「寿命品に建立する所の本尊は、五百塵点の当初より以來、此土有縁深厚本有無作の教主釈尊是れなり」との御文を拝するに、「寿命品に建立する所の本尊」とあるごとく、三大秘法の御本尊は、寿命品に顕わされるのである。

新尼御前御返事（九〇五）に「今此の御本尊乃至宝塔品より事おこりて、寿命品に説き顯し、神力品屬累に事極りて候」御義口伝（七七〇）に「惣じて妙法蓮華經を上行菩薩に付属し給う事は、宝塔品の時事起り、寿命品の時事顯れ、神力品累に事竟るなり」

同「宝塔品に事起り乃至涌出寿命に事顯れ、神力品屬累に事竟るなり」

開目抄（八一四）に「一念三千の法門は但法華經・本門・寿命品の文の底にしづめたり」等の御文証に明らかなるように、寿命品において十界久遠の上に、国土世間がすでに顯れ一念三千の本尊の儀式が圓滿足して、さらに一事の闕減もない。これが寿命所顯の本尊である。そしてこの本尊は、五百塵点の当初、すなわち、久遠元初以來、娑婆世界に有縁であり、本来本有無作三身如来の教主釈尊であるとおおせになり、さらに如来秘密神通之方と寿命品にも、説かれている本尊である。

先にも述べたごとく、この教主釈尊はインド應護の釈尊でなく、久遠元初の自受用身であり、無作三身如来である。御義口伝（七五二）に「この品の題目は日蓮が身に當る大事なり神力品の付属是れなり。如来とは釈尊惣じては、十方三世の諸仏なり。別しては本地無作の三身なり。今日蓮等の類いの意は惣じては、

如来とは一切衆生なり、別しては日蓮の弟子檀那なり。されば無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」

同じく（七五九）「此の品の所詮は久遠実成なり。久遠とは、はたらかず、つくろはず、本の儘と云う義なり。無作の三身なれば、初めて成ぜず、是れ働かざるなり。」

卅二相八十種好を具足せず、是れ繕わざるなり。本有常住の仏なれば、本の儘なり。是を久遠と云うなり。久遠とは南無妙法蓮華經なり。実成無作と開けたるなり」

また同じく（七六〇）「この本尊の依文とは、如来秘密神通之方の文なり。戒定慧の三学は寿命品の事の三大秘法是れなり、日蓮體に靈山に於て、面授口決せしなり。本尊とは、法華經の行者の一身の当体なり云云」

以上の御文から拝して、末法の本門の本尊は、日蓮大聖人である。これを人の本尊というのである。これに対し法の本尊とは、事の一念三千無作本有の南無妙法蓮華經である。くわしくは観心本尊抄にお説きになっている通りである。かくのごとき人法一箇の本尊である。その名はことなっても、其の体は一つである。人すなわち法であり、自受用身即一念三千である。法すなわち人であり、一念三千即自受用身である。また御相伝に「明星が池を見よ、日蓮

が影即ち今の「大曼荼羅なり」ともおおせのごとく、人法一箇の大御本尊こそ、出世の御本懐たる、本門戒壇の大御本尊である。されば「今日蓮等の類の意は、即身成仏と開覚するを如来秘密神通之方とは云うなり、成仏するより外の神通と秘密とは之れ無きなり」との御文のごとく、われわれは大御本尊を信じたてまつることにより、即身成仏の大功德に浴するのである。

六、本門の題目

本門の題目とは、正像二千年と異なり、末法において自行化他に亘る、久遠名字の妙法を、余行に渡さず直達正觀する事行の南無妙法蓮華經の修行であります。正法年間には、竜樹・天親が内鑿冷然ではあるが、外適時宜の故に、口に題

要点を把握してムダがない。

- 一、総評
- イ、まとまりのよい、平易な、わかりやすい論文である。
- 二、内容について

ロ、三大秘法抄を論ずる場合、
対外的には、真偽の諸説に対

- あり、平素の勉強が自然に現われたものと思われる。
- 三、注意すべき点
- ニ、西歴年代を入れてある点等、努力

論文講評

平易でわかりやすい

教授 竜 年 光

して、はつきり偽作論を打ち破って、御書の内容を三大秘法に要約し、結論を戒壇建立に邁進する学芸員の決意に結んだのは良い。
ハ、前項の形式の論文は、他にも多く見受けられたが、此の論文は、よく

はよいと思うが、全体的に、要領良くまとまる反面、力強い迫力がやや乏しい。
医学生の研究論文的な感が、しないでない。

目をいわず、ゆえに自行ばかりの題目であつたとおおせである。像法年間には、
当体義抄(五一九)に「答う、南岳大師は觀音の化身、天台は藥王の化身なり等云云、若し爾らば靈山に於て本門寿量の説を聞きし時は之を証得すと雖も存生の時は、妙法流布の時に非ず、故に妙法の名字を替えて止觀と号し、一念三千一心三觀を修し給いしなり、但し此等の大師等も南無妙法蓮華經と唱うる事を自行真実の内証と思食されしなり、南岳大師の法華懺法に云く『南無妙法蓮華經』文天台大師の云く『南無平等大慧一乘妙法華經』文云く『稽首妙法蓮華經』云云、また『娑命妙法蓮華經』云云、伝教大師の最後臨終の十生願の記に云く『南無妙法蓮華經』云云』以上の文にも明らかなごとく、像法においては、他のために説かず、理行の題目なのである。本門の題目は、当体義抄に「凡そ妙法の五字は、末法流布の大白法なり、地涌千界の大地の付屬なり、是の故に南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲りて、弘通し給わざりしなり」とおおせのごとく、末法に於て、日蓮大聖人がはじめからお唱えになるのである。この本門の題目には必ず信行を具足しているのである。

余心無く、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、凡身即化身なり」云云の御文のごとき大功德をわれわれは、唱題により享受できるのである。

七、本門の戒壇と

王仏冥合論

本書においてもっとも重要な問題であり、他の御書に見られないのが、本門の戒壇の相貌であります。戒壇とは戒を授ける儀式の場所を指し、仏法に帰依し、その教えを信行する者が、定められた戒を、受持することを誓う場所である。そして仏道修行をする者の身口意の三業を、ととのえるために、戒定慧の三学を用いることは、仏法の通則であり、その一つに戒があり、これには防非止惡の義を有するのである。この戒定慧の三学は、日蓮大聖人の仏法においては、三大秘法とあらわれるのである。

そして当体義抄の(五一八)「日蓮が一門は当体蓮華を証得して、寂光当体の妙理を顕わす事は、本門寿量の教主の金言を信じて、南無妙法蓮華經と唱うる故なり」および血脈抄の「信心強盛にして唯

御義口伝(七六〇)に「戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是なり」とおおせのごとくである。戒には、小乗の戒、大乘の戒、法華經迹門の戒とあり、それぞれに戒壇が建立されているが、ここではそれらをさしおいて、本門の戒について論ずる事とする。本門の戒とは、
教行証御書(二八一)の「此の法華經

の本門の肝心妙法蓮華経は、三世の諸仏の万行万善を集めて、五字と為せり、此の五字の内に、豈万戒の功德を納めざらんや、但し此の具足の妙戒は、一度持つて後、行者破らんとすれども破れず、是を金剛宝器戒と申しけんなんと立つべし、三世の諸仏は、此の戒を持って法身・報身・応身など何れも無始無終の仏に成らせ給う」云云の文、

及び日興上人の三大秘法口決に「一には本門寿量の大戒、虚空不動戒を無作の円戒と名づけ、本門寿量の大戒壇と名づく乃至応受持斯経とは、三大秘法の中の本門の戒壇なり、裏書に云く受持即持戒なり、持戒清潔作法受得の義なり」とあるごとく、御本尊を受持したてまつる事が、第一の持戒である。この戒法とその戒を授ける戒壇とは一般仏教では別であるが、先の日興上人の御教示のごとく大聖人の仏法にあつてはこれが一つである。

そしてこの本門の戒壇には、大御本尊が安置されるのである。戒壇には義と事と二つあり、義の戒壇とは本門の本尊所住の処に当たり、事の戒壇とは一闍浮提の人懺悔滅罪の処であり、梵天・帝釈も来下する戒壇であり、本書でお述べになつておられる国立の戒壇の事である。本門の戒壇は、したがって正像二千年未曾有の大戒壇であり、末法万年にわたり一切衆生を救済する霊所である。

日蓮大聖人は宗旨建立に次いで、戒壇

の大御本尊を御建立になり、化法の広宣流布をされたのである。そして、

土木殿御返事(九六三)に「日蓮死生不定為りと雖も妙法蓮華経の五字の流布は疑い無き者か乃至但し定慧は存生に之を弘め、円戒は死後に之を顯す」とあるごとく、国立戒壇建立即ち化儀の広宣流布を、日興上人に、御遺付になつたのである。この事は「本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時をまつべきのみ」(身延相承書)の御文に明らかにお示し遊ばされているのである。

そしてこの御命は、日蓮正宗代々の法主上人に脈々として流れ、遵奉され現在に至っている。しかし時機未熟なる故か、いまだ本門の戒壇は、その勇姿を地上には現出していない。国立戒壇建立の時については、本書にお示しのごとく、

- 一、王仏冥合の時、
- 二、王臣一同に正法に帰依する時、
- 三、有徳王覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時、
- 四、勅宣並びに御教書を申し下された時である。

そして靈山浄土に似たらん最勝の地たる、戒壇建立の地は、本門寺の額に云く「大日本国富士山本門寺根源」、身延相承書(一六〇〇)に云く「富士山に云云、

日興上人門徒存知事(一六〇七)に云く

「凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは法の通例なり、然れば駿河の国、富士山は日本第一の名山なり、最も此の砌に於て本門寺を建つべきなり」云云、三位日順證要抄に云く「富士山亦日蓮山と名づく最も此の山に於て、本門寺を建つべし」云云等の文証によつても、富士山である事は明らかなる事である。国立戒壇を富士山に建立することは大聖人の御構想である。これにそむく輩は、謗法の徒輩と断ぜねばならない。

戒壇建立の時機は、王仏冥合の時であるとおおせである。本書においてお説き遊ばされた、王仏冥合論こそ、一国の平和と繁栄の一大原理であり、最高の政治原論でもある。王法とは一国の政治を意味し、仏法とは一国の宗教を意味する。宗教の混乱により、国の政治に混乱が起る事は、立正安国論をはじめとする諸御書にも御明示のごとく、一大方程式である。

戸田先生は「個人の幸福と社会の繁栄の一致が王仏冥合の精神である」と説かれた。この社会こそ、人類が有史以来、自ら求めていた理想社会であり、全世界に平和ををもたらすものである。現在王仏冥合が行なわれるためには、御本尊流布が徹底的に行なわれなければならない。そして政治家も民衆も共に、三大秘法の仏法を信仰しなければならぬ。

この事は「王臣一同に本門の三秘密の法を持ちての御文にも、はっきりとお述べ

べになつて」おられるのである。

そして次いで「有徳王覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時」との御文は、国立戒壇建立の世相を、お説きになったものであり、これを拝する時、今こそ戒壇建立の時なりと強く確信するものである。創価学会の出現は、この御文に照らして見ても、誠に重大なる意義が存在する事を感じるものである。覚徳比丘は、いうまでもなく大聖人より血脈のつながる日蓮正宗の御法主上人であり、有徳王は、法主上人を守り、正法を護持する権力者であり、「折伏を現する時は賢王となつて愚王を誡責し」の御文のごとく、今化儀の広布へ大折伏の指揮をとられる第三代会長池田先生こそが、初代会長牧口先生、恩師戸田城聖先生について、有徳王として立ち立ちになっているのである。

「三世を知るを聖人と云う」

また諸法実相抄には(三五八) 刹へ広宣流布の時、日本一同に南無妙法蓮華経と唱えん事は、大地を的とするなるべし」とおおせのごとく、本書にお示しの戒壇建立の時機こそ、今をおいてないのである。立宗七百二十七年に、広宣流布する事こそ、日蓮正宗の願業であり、その遂行こそが創価学会の使命である。そして勅宣並びに御教書が下り、開かずの門が開く時、国立戒壇が建立された晩には、王仏冥合が実現し、如説修行抄にお示しの平和と繁栄の社会が現出するもの

である。そしてこの国立戒壇は日本一國のものでなく、全東洋の、そして全世界の民衆が懺悔滅罪のところとなるのである。そしてこの本門の大戒壇を中心に、全東洋へ全世界へ平和がもたらされて行くのである。

八、結び

「法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は、此の三大秘法を含めたる経にて渡らせ給えはなり」この御文は、釈尊が、法華経を説いたのは、この三大秘法を説かんとしたためであった。実に三大秘法こそ仏法の神髄であり、あらゆる仏が成仏したのも、この三大秘法を修行したためである。

この三大秘法抄こそは、われわれ信徒として心肝に染めなければならぬ御書であるとともに、本書にお示しの戒壇建立達成こそ、仏勅とおおいで、信行にまゝ進まなければならぬ。今具体的に戒壇建立への前進を続ける創価学会の一員として信心できる身の福運に深く感謝すると共に、稿を終るに当たって、広布達成の日まで断固戦い抜く決意を一層固めるものである。(男子部関西参謀)

(註) カッコ内は西暦の年代

△△△△△ 邪宗の妄説を笑う

「はかなきは邪宗の教学」といわれるように、邪宗の妄説はおどろくべきものがある。その一、二をとりあげて、破折を加えてみよう。

本尊のない身延

邪宗日蓮宗身延派では、いまだに本尊がきまっていない。日蓮大聖人様の仏法では、御本尊様はもともと大事である。もともと大切なものが定まっていないう宗教などというものは、世界中さがしても見当たらないだろう。

最近、「本尊と曼荼羅はちがう」などという珍学説を発表している。身延派は波木井実良らしい、理屈ぬきに釈迦の仏像を本尊としたらしい。

だから、日蓮大聖人様が、経王殿御返事に、「日蓮がたましひをすみにそめながして、かきて候ぞ信じさせ給へ……あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ」とおおらせられ、大曼荼羅をはっきり御本尊とお定めになったこと、また大聖人様御自筆の万年救護御本尊(曼荼羅)に、「未だ此の大本尊有さず……始めて之を弘宣す」等とおおせられていることには、すっかり、ほおっかむりしてい

る。

御本尊の相伝も知らず、キツネやへびや鬼子母神などをまつて師敵対の限りをつくしている邪宗日蓮宗などに、日蓮正宗の御本尊様をうんぬんする資格などは、絶対ないのである。

身延は無間地獄の山

身延には、日蓮大聖人様の仏法、無間地獄の山である。大聖人様が住まれたところだから尊いなどというのは、仏法を知らぬもの言である。大聖人様は「法妙なるが故に人貴し・人貴きが故に所尊し」とおおせられ「地頭不法ならん時は身延には住まざ」と御遺言もあそばされている。正法のなくなつた比叡山を、大聖人様は瓦礫の土とおおせである。同じく謗法の山、身延は無間地獄の山である。

謗法の身延に、どうして血脈付法日興上人様が、大聖人様の御真骨をおいてこられようか。厳然と大石寺に御所持である。身延にあるのは、正しく馬の骨である。彼らは、堀日亨上人が「延山の常住物は一つ持出してない」と書いているから真骨身延にありとバカなことをいっている。常住物とは、茶わんやハシや甕前経のような雑物をいったのである。

堀上人が、はっきり「御真骨は大石寺にあり」とあらゆる古文獻から立証しておられるではないか。

また、日興上人は墓掘りかなどと言いつつ狂人もいる。それでは、身延で真骨と称して馬の骨を見せ物にしたのは墓掘りかと反問したい。事実は土にふれず廟の中に御安置されてあつたものだろうと、堀上人はおおせである。

△△△△△ 言論界の声から

学会歌の今昔

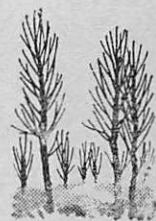
学会歌は、ずいぶんだと悪宣伝されてきた。ところが、こんど、朝日新聞社の「朝日ソノラマ」で、日本唱歌集の第三集として、「マーチソング」集を売り出した。「青葉茂れる桜井の」とか、「ウオーターロ」旅順開城」等のむかしの軍歌が十数篇。そして最後の解説にいわく、「軍国調」というなかれ、いい歌はいい歌なんだ、と。マスコミも、ずいぶん学会バリになってきたものだ。それにしても、依義判文を知らないだけ、学会歌より低級なのは、もちろんである。

※ ※ ※

高山樗牛

辻

武 寿



明治の文豪として、一世をなびかせた人、情熱の詩人として、多感な一生を、若くして終えた人。

さらに日蓮大聖人を崇敬してやまず、

偉大なる大聖人の人格を追慕しつつも、ついにその真髄を知ることができず、咯血の床に世を去って行った熱血児……

樗牛、高山林次郎は、三十二歳を一期として、その全生涯を青年時代で終った。

実に、彼の生涯こそ、桜花のそれにも似て、バツと咲いてバツと散った人生であった。そして、直情けい行、思ったことは、そのまま表現し実行せずにはおられなかつた熱血の弾丸児であった。惜しむらくは、せつかく日蓮大聖人様を信じ

法華経にかじりつきながら、創価学会とともに出現しなかつたことである。

幼少年時代

明治四年一月十日、山形県鶴岡町の一角にある庄内藩士の齋藤家に、男の子が生まれた。生まれた子は、林次郎と名づけられた。これが、後の高山樗牛である。父は齋藤親信、母は芳子、二人の間にはすでに男女二人の子供があり、上は親広といひ、次は元子といひた。

翌年、林次郎は、同じ鶴岡に住む同藩の伯父高山久平の養子とされて、姓を高山とあらためた。高山家は父の親信の実家でもあり、子供がなかつたために、齋

藤家に生まれた三人目の子供は、性別を問わず、もらいうける約束ができていたのである。それであるから、養父母とはいえ、両親の愛情は林次郎の一身にそそがれて育つたのである。

幼時は、たんぼで鯉を追い、苗津川の雑魚をかきまわすことが日課であった。近所の子供たちのガキ大将で、常にあちこちで喧嘩をした。そして、勝つまでは、絶対にやめなかつた。

養父の久平は、いろいろな半面、厳格な人であつたので、幼年でも一通りの礼儀作法はしつけられた。

樗牛が二才の時、実家では弟良太が生まれ、三才の時、実妹直子が生まれた。

このころ、樗牛は、すでに、学校に行く近所の子供たちを、うらやましがって、家から書物を持ち出したりして遊んでは、両親の目を見張らせたのであつた。

明治十四年七月、養父久平の酒田郡役所に転任とともに、樗牛も酒田の琢成学校に転校した。この年の九月、明治天皇が北海道および東北を御巡行なされた折、琢成学校にもお寄りになった。林次郎は、全校生徒を代表して、「奉祝巡幸」の文を奏上した。

明治十五年、彼は、福島小学校中等小学第二級にはいった。養父の久平が、福島県庁の土木課に転任したからである。樗牛は、学課のなかでは、とりわけ、

習字と図画が得意で、数学だけは不得手であった。読書は好きであった。

年とともに、林次郎のわん白は、いよいよ増長し、ガキ大将ではあったが、家庭では、父母に従順でやさしかった。養父母は芝居が大好きだったので、彼もしばしば見に行く機会があった。

また子供ころから、なかなかおもしろい流行に常に関心を持ったというから、樗牛の人となりや性格が、うかがわれるではないか。



明治十七年、福島に中学校が新設されたので、小学校の高等科から、そこに転入した。

明治十八年、十四才のときに、「光陰誌行」という日記をしるした。このころから、樗牛は文学に興味を持ち出したのである。読書欲が非常に旺盛で、美辞麗句や名交句を見つけると、必らず抜粋して座右にそなえておいた。かくて後の大文学者ができあがるのである。

このころ、小説「佳人の奇遇」に刺激

されて、「春日芳草之夢」を書き、芳雪仙史と署名した。学校新聞に筆をふるって、週一回発行したこともある。

明治十九年九月、養父久平が警視庁に勤めるため、上京することとなり、樗牛も福島中学を退学、そして、神田錦町の東京英語学校に入学した。翌年、第一高等中学校を受験したが、失敗したので、今度は第二高等中学校の入学試験に応募するため仙台に向かった。そして、不得手の数学で失敗したが、かろうじて仮入学となった。

高等中学時代の樗牛

明治二十一年、林次郎十七才のときから、仙台の第二高等中学時代が始まるのである。都落ちしたので、林次郎には不満のことが多かった。

第一に、仙台には、ほとんど知人がいなかった。感傷ぐせの林次郎は、ひとり、この淋しさを身にしみて感じた。何よりもいやなことは、いろいろな人からキリスト教をすすめられることであった。しかし、なれるにつれて、友人もだんだんできてきた。当時の交際グループには、三浦菊太郎、小浜松次郎、新城新蔵、井上準之助等がいた。井上準之助は、二高時代の樗牛について、すべてに天才的であり、とくに文章、書、絵は秀でていたといひ、「雄弁型」より「討論型」であり、とかく極端にはしる傾向をもつてい

たともいっている。

林次郎が、「樗牛」という号を用いるようになったのは、このころからである。「莊子」の巻頭の「逍遙遊」の一節からとったものらしく、「樗」はひねくれてコブのある大木、測量のとき墨繩にかからぬもの、「牛」はネズミをとる点ではネコに劣る巨獣、つまり「樗牛」とは、凡俗とは違うという意味である。

この時代、樗牛は率先して文学会を組織し、機関紙「文学会雑誌」を出した。そして、二十四年六月の創刊号には、「文学および人生」「文学会漫評」を発表した。また彼の近松研究は、全国の高等中学の間で問題となり、注目されたほどである。「厭世論」「戯曲における悲哀を論ず」も、このころの作である。

明治二十六年七月、樗牛二十二才の時、第二高等学校を卒業した。そして、九月には、東京帝国大学文学部哲学科に入学した。

帝大時代の樗牛の活躍は、めざましい限りであった。

明治二十七年の春、読売新聞の懸賞募集に応じ、歴史小説「滝口入道」の稿をおこし、二十日余で脱稿した。平家物語からヒントをえたもので、流麗な文章であった。

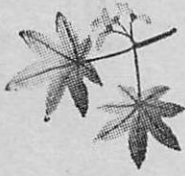
樗牛が軽い気持で投書した小説「滝口入道」は、がぜん、優等第二席で入選（第一席は該当者なし）した。樗牛の得意や思うべしである。

樗牛は、読売新聞社から賞品金時計をえたが、それを金五十円也の現金でもらった。この小説は高山樗牛の出世作であり、明治二十七年の四月から三十三回にわたって読売新聞紙上に連載された。

樗牛は、新進作家として、早稲田文学六月号に、「老子の哲学」をのせた。

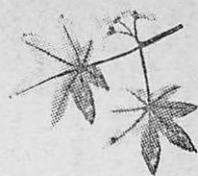
明治二十七年十月ごろ、文科の学生間に、機関紙として文芸雑誌発刊のくわだてが進められた。樗牛、姉崎正治、大町桂月、芳賀矢一等が参加し、「帝国文学」が発刊されることになった。

同年十二月、実弟の良太が死んだ。腸結かくであった。闘病中も、なにくれとなく、いたわり激励したのであったが、樗牛の弟に対するあふれるばかりの愛情は、そのまま当時の手紙にうかがわれるが、良太死亡の報に接し、樗牛は日夜を泣きくらした。そして、国元の実父へ、その臨終のようすなど、くわしく知らせ



東京帝国大学時代

てほしいと依頼した。また多忙のなかを、良太の手紙をすっかりうつつしとり、一冊にまとめ、「亡弟良太病中書簡」として、郷里へ送った。



明治二十八年一月、「帝国文学」は、華しく世に出た。発刊の辞は樗牛である。第二号からは、仙台らしいの研究「近松栄林子」も、同誌に連載された。

同年七月、大橋乙羽のあっせんで、雑誌「太陽」の文芸評論を担当することになったが、この前後から、樗牛は勉強に全力を集中した。

十一月に、樗牛は、かぜがもとで、気管支カタルをひきおこして入院した。その後、診察の結果、転地療養をすすめられて熱海に転地した。これが樗牛の闘病生活のはじまりである。

一月なかば、大病院で診療をうけるため上京したが、依然、快方に向かわず、樗牛はふたたび興津に転地療養する身となった。

明治二十九年七月、樗牛は帝国大学を卒業した。欠席が多いので危ぶまれたが、十七人中五番の好成績であった。

その年、大学院に入学したが、まもなく仙台第二高等中学校に、教授として赴任したのである。

文学者時代

仙台に赴任してからの樗牛は、かぜや気管支カタルに悩まされがちで、健康ではなかった。折から、三十年三月、仙台二高に同盟休校の事件がおこり、生徒の処分方法について、文部省側と意見を異にしたので、樗牛は辞表を出した。

そして、ただちに、上京し、ふたたび博文館の「太陽」文芸欄の主筆となつて、筆を縦横にふるつたのである。五月号には、さっそく、「日本主義」の一文をかかげ、当時の文壇に、一大センセーションをまきおこした。その後も、樗牛は、「日本主義と哲学」、「世界主義と国家主義」、「宗教と国家」、「我が国体の新版図」

「国粹保存主義と日本主義」等の諸論文を、次々に発表し、国家至上主義を力説した。これが日本主義運動をおこす契機となつて、ほとんど同時に、井上哲次郎、木村鷹太郎も、日本主義を唱えたのである。

このころの樗牛の思想を、のそいて見よう。

「日本主義とは、なんぞや。国民的特性にもとづける自主独立の精神によりて、建国当初の抱負および理想を表白せるものなり。日本主義は、日本国民の安心立命地を指定せるものなり。日本主義は、

宗教にあらず、哲学にあらず、国民的実行道德の原理なり」といつている。このころの樗牛は、もちろん日蓮大聖人の佛法を知らず、もっぱら宗教排撃を叫んでいる。さらに、「日本主義に対する世評を慨す」では、次のように論じている。

「われらが日本主義の積極的叙述は、今日なおいまだ発表するにいたらずといえども、その結論の要点は、すでに略尽したりと信ず。すなわち、

一、国民の円満なる発達は、その国民的性情の完全なる発達は、その国民的

二、一切宗教は、日本国民の性情に適切ならず、日本主義はこれをもって宗教を排斥す。

三、国家は人生寄托の必然形式にして、またその唯一形式なり。日本の国家は、日本国民の幸福の唯一、かつ必然の形式なり。

四、宗教と国家とは、その利害を異にす。これをもって、日本主義は、いつさいの宗教を排斥す。

五、日本主義は、日本国民の性情にもとづきて、皇祖建国の精神を發揮せんことを目的とするところの国家的道德の原理なり」

これが、数年を出ないで、日蓮大聖人に傾倒した高山樗牛の言葉であろうかと思われるような文章である。樗牛は、はじめは、いわゆる宗教否定論者であったのである。

会員杉享二の次女里子と結婚した。樗牛二十六歳、里子二十二歳であった。里子はお茶の水出身の才媛で、佐々木信綱氏の門下生であった。

明治三十三年三月、親友の姉崎潮風が洋行の途についた。樗牛は、横浜まで姉崎を見送つたが、これが二人の永別となつたのである。

六月に長女初子が誕生した。樗牛も、姉崎のあとをおつて、ヨーロッパに約三年間の留学を約束されて、六月の官報にまで発表されたのであったが、思いがけない魔が待っていた。八月における樗牛の咯血が、それである。

九月、平塚に転地した樗牛は、まもなく東京から妻子を呼びよせて興津に移つた。そして、彼はひたすら養生にとめたのである。

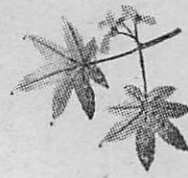
明治三十四年四月、樗牛は、別荘を大磯に借りうけ、妻子とともに住んだ。

六月、姉崎氏に当時の心境を報じて、「人はとにかく、死生の間に入ると、人生の趣味も、いくらかかわるようだ。このころは、宗教に関して思案することも往々ある。同時に、僕の個人主義でもいろいろききものが、一層明瞭になった。

どうも、日本主義時代の思想が、僕の本来の皮相なる部分の発表にすぎなかったことが、今から思われる」

かつては、日本主義をとえ、宗教を真向から否定した樗牛も、このころは、

すでに、宗教に深い関心を持ちはじめたのであろうか。いや、それよりも、刻々と近づきつつある死期を感じて、樗牛の心の奥の本然のものが、宗教を求めて、声なき叫びをあげていたのかも知れない。



樗牛の手紙もう一通(病床より)

「ああ、僕の昨今の境遇は、まことに、まことに、寂しいものだ。病気はまだなおらぬし、友人もなし、学問も進まぬ。人物の修養も思うように行かぬ。生活もあまり裕でない。年は経つ。思想はふける。感情のみが強くなって、とかくに善愁の人となる。悟りきれぬ身には、同輩の榮達も、なんとなくうらやましいような気もする。それは浅ましい凡夫と、われながらあきれることもある。大なる信仰の頼るべきものがあつたらばと思われなければならない。ああ、君、いかにしたらよいのであろうか」

「ぼくは他人の慰めも聞きあきた。とかく、われ自ら安心できる地歩を求めねば、なにもなるものではない。人物の修養は、

ここであらうと、とにかくに希望をつないでいる」(六月、ベルリン姉崎湖風宛)これは、高山樗牛完全なる凡夫のもたえである。あわれでもある。

悲惨なその最期

このころ、ドイツ哲学の流行にともなつて、ニーチェが紹介された。樗牛は、その超人主義にふれ、彼の思想が大きく転回した。樗牛はニーチェを礼賛し、その思想をのべて、

「人道の目的は、衆庶平等の利福に存せずして、かえつて少数なる模範的人物の産出にあり。かくのごとき模範的人物は、すなわち天才なり、超人なり。すなわちこれ無数の衆庶が育成したる王冠とも見るべきものなり。されば、もし衆庶にして、みずから自己のために生存すと思わば、これ大いなる誤りなり。彼等はただただかくのごとき天才、超人の発生を助成するかぎりにおいて、その生存の意義を有するのみと」

しかし、樗牛のニーチェ礼賛も、やがて日蓮大聖人の御遺文に接するや、たちまち三転して、樗牛の心は、日蓮大聖人の研究に、すべてを打ちこんで行くようになった。ただ悲しいことに、樗牛が縁を結んだ相手が、国柱会の田中智学であったことが、不運のきわみであった。高山樗牛が、田中智学と知りあつたのは、明治三十四年秋、九月ごろである。

樗牛は田中氏から「宗門の維新」その他御遺文を借用して、今さら日蓮大聖人の偉大さに驚嘆かつ感奮したようである。ただし、仏法の真髄は、とうてい知るよしもなかったことは、当然である。

明治三十五年一月、樗牛は奈良朝の美術を論じて、文部省から文学博士の学位をさすけられた。

三月には、「日蓮上人とは如何なる人ぞ」「日蓮とキリスト」を論じている。四月には、「日蓮研究の動機」「鍋冠日親」五月には、「日蓮上人と日本国」を發表している。

このころ、田中智学の弟子の山川智応が、急速に樗牛に近づいた。智応は、樗牛の病氣平癒のための祈禱などまでしたようである。しかし、ひにくにも九月なかばごろから、樗牛の健康状態は、急速に衰えていった。

樗牛は死ぬまで、日蓮大聖人を研究した。しかしながら、惜しむらくは、田中智学や山川智応の仏教観では、所詮、大聖人のご本意は知りうべくもなかった。樗牛は、「無題録」に、次のようにいつている。

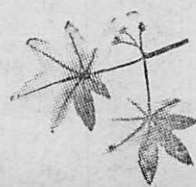
「日蓮は、日本がかつて産出したる人物の最大なるものなり。彼をもつて日本のルーテルと呼ぶは誤れり。彼の偉大は、独りキリストのそれにくらべ得べけんのみ。同国人として彼を追懐し、景仰しうるは、国人にとつて大いなる力なり」

彼、樗牛にして、日蓮大聖人とキリストを同様にならべて礼賛しているのである。「悪しくうやまわば国亡ぶべし」の金言と思いくらべて、樗牛のために、一掬の涙を禁じえないではないか。

明治三十五年十二月二十四日、午後一時三十分、三十二歳の若さをもって、樗牛高山林次郎は、その生涯の幕を閉じた。

二十六日、鎌倉の長谷寺で、浄土宗の儀式によつて葬儀が行なわれた。

翌三十六年一月十九日、遺骨は樗牛の希望の地である清水の竜華寺(日蓮宗)に改葬された由である。



かつて高山樗牛はいつた。

「この生の憂苦をまぬがるの道、ただ三つあり、永き恋か、早き死か、しからざれば狂、ああ、吾人はいづれを扱はざるべからざるか」

そして、結果的には、みずから早き死をえらんで、三十二歳で散った。

創価学会が発展した今日、樗牛の感懐や、はたしていかん。

(近代文学研究叢書参照)

高山樗牛の教学

文底仏法知らない悲劇

昭和の高山樗牛出でよ

「もし広大なるご仏智が本門戒壇の建立を、いまに許したもうならば、明治の高山樗牛のごとき人材が、現代に必ず出現するであろうことを、信ずるものである。実に、信なき言論は煙のごときものであるから、強信なる言論人を、多大に必要とするのである」

これは、恩師戸田城聖先生が、昭和三十一年五月一日、巻頭言「広宣流布と文化活動」でおおせられたお言葉である。高山樗牛は、明治三十四年十月ごろより日蓮大聖人様の御書を拝読しはじめた。偉大なる御精神にふれ、大聖人様に信をいれてから、明治三十五年十二月亡くなるまで、わずか一年余にすぎない。高山樗牛は、この一年で、大聖人様の仏法を論じて、明治の人々、とくに青年に大きな影響をおよぼしたのである。

しかし、高山樗牛は、日蓮大聖人様の眞の正法、日蓮正宗を知らずに一生を終った。まことに残念なことである。

雄壮華麗な筆で啓蒙した高山樗牛以上の人材が、学会から続々とあらわれて、眞の正法を世に弘め、戸田先生のお教えを実現する時は、まさに来ている。この時にあたって、高山樗牛が、どのような教学をもち、どのような活躍をしたか、考えてみたい。

上行菩薩の再誕説

高山樗牛は、明治三十四年十月から御書を拝読しはじめ、明治三十五年三月まで一応は全部読みおわったらしい。その間一月には「鎌倉時代の人物」という一文をあらわしている。源頼朝や北条義時、泰時、時頼、時宗等を論じ、そのなかで「日蓮上人こそ第一等の人物なり」といい、さらに「日本歴史上において、

その倫を見ない大英雄」ととなえてい

さらに、二月には、「吾が好む文章」を書いておられるが、これについては、後にのべたい。

三月には、御書研究の成果として、「日蓮上人とは如何なる人ぞ」という論文をあらわした。はじめに「日本は如何に墮落するとも、吾人は、その同胞に日蓮上人を有することを忘るるなかれ」また「諸君、もし学究先生の所説を聞くの余暇あらば、吾人とともに、この一大偉人を研究せざるべからず」等といっている。

内容は、「日蓮上人と上行菩薩」という副題がついて、「法華經における上行菩薩、上行菩薩出現の予言、法華經の行者としての日蓮、疑問、疑問の解決と一 大醒覚、上行菩薩としての日蓮」の六章にわかれておられる。さいごに「かくのごとき大いなる確信の下に活動せる彼れが、半生の事業の、如何に雄大崇厳をきわめたるかは、……実に人類永遠の史上における一大事実として伝えらるべきものなり云云」で結んでおられる。

これだけでもわかるように、高山樗牛は、情熱をこめて、「日蓮上人は法華經に予言された上行菩薩の再誕である」と口をきわめて強調している。文章は華麗であるが、教学的に見るならば、まったく低級であるというソシリをまぬがれない。しかし、日蓮正宗の甚深の文底仏法

を知らず、わずか三か月の研究としては邪宗日蓮宗の坊主どもなどが違およぶところではない。その当時、邪宗身延派の坊主などが、上行菩薩の再誕までもいならず、もったいなくも、大聖人様を鎌倉時代のただの人間にすぎないと言っていた時代としては、なおさらである。

所詮、日蓮大聖人様が、久遠元初自受用身の再誕、末法の御本仏であられることは、唯一の相伝家、日蓮正宗の信者でなければわからないのである。

ゆえに、高山樗牛は、上行再誕説がせいぜいであるから、「日蓮」とか「彼れ」と呼びすてにしてみたり、キリストと肩をならべるような世界の偉人ぐらいいにか感じなかったわけである。

すなわち、五月ごろには、「日蓮とキリスト」という論文をあらわし、「彼れの偉大は、独りキリストのそれにくらべ得べきのみ」等といって平然たるものがあつた。もちろん樗牛は、そのなかで、大聖人様とキリストの勝劣を大いに列挙はしている。しかし、日蓮聖人様を御本仏とおおきキリスト教は外道なりと破折するわれらから見れば、はなはだ、ものたりなく思われるのは当然である。

樗牛は、さらに六月ごろ、「日蓮上人と日本国」という論文をあらわして、「日蓮は眞正の愛国者なり、日蓮と日本国、身延隱退の理由、蒙古襲来に対する日蓮の態度」などの項目で、読者の疑惑に答えている。

その後は、病勢ますます進み、まとまった論文はない。

青年に訴えた樗牛

高山樗牛の文章は、まことに雄壯華麗で明快大胆である。若々しい文章で覇気があった。そのため、大いに青年にはうけた。樗牛の評論や文章が、時の「太陽」誌等に、一文出るたびに社会の注目をあびた。樗牛の文章を、大言壮語などと妄評するものもいるが、情熱と気迫の満ちた青年時代を知らないものものなためであらう。

樗牛は、とくに青少年に目をつけて、大聖人様の教えを啓蒙した。当時の「中学世界」や「少年世界」に大聖人様のことを、好んで執筆したのは、そのためであらう。「少年世界」には、「鎌倉時代の人物」とか、「豪傑の半面」として加藤清正と大聖人様のことをのべ、さらに「子の好める人物」として、大聖人様ののべている。

そして、文のおわりには、必ず「少年諸君も折あらば日蓮上人の伝記を読め」「年長じて中学卒業の後には、なお日蓮上人の遺文を一読すべし」あるいは「わが輩は、ただ日蓮上人について見る所の十の一を記し、少年諸君が後日の研究の助けにしようと思う」等と言っ

て、とくに青少年に対し、研究をすすめ、信心をすすめている。明治の青年は、ずいぶん、樗牛の文によって、大聖人様の教えを求めたといわれる。

「げに文は人なりけり」

高山樗牛は、日蓮大聖人様の御文章にすさまじく感激したのである。すでに、信心にはいる六、七年前にも、大聖人様の教行証御書「日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず……爾前迹門の釈尊なりとも物の数ならず」を拝して、その雄壯豪快に感じ、いつかは「日蓮上人の文章を研究したい」希望をもったという。

樗牛は、「吾が好む文章」という論文のなかで、まず鎌倉時代の文章をもっとも賞讃し、そのなかで、わずかに加茂真淵が「徒然草よりも優れり」と評した以外に、だれも気づかなかつたが、「空前絶後ともいふべき特色を有する一大文学あり、日蓮上人の文章これなり」と絶讃している。さらにいわく、

「上人の文章は、文字章句の排列といわんよりは、むしろ肝胆を活きながら白紙の上に塗りつけたる者といわんが妥当なるべし……上人の文は文にあらずして精神なり、人は文字を見ずして血涙の痕を見、章句を読まずして師子吼の響を聞く……げに文は人なりけり」と。

種種御振舞御書の「各各我が弟子とな

のらん人人は……」の御文を拝読して、樗牛は「日本文もて、これ以上の力ある文章を書かんとは、神業ならではあり得べしとも思われず」といつている。その他、如説修行抄、開目抄、撰時抄、佐渡御書、報恩抄、成仏用心抄、頼基陳状等を愛読したと称し、観心本尊抄はむずかしくてわからないといっている。

樗牛は大聖人様の御文章にひかれて入信したという感がないでもない。そしていかに感激しても、大聖人様の御本仏の大確信を拝せないので、画竜点睛をかくものであらう。

戸田先生から御本仏の御確信を拝せよと指導をうけ、巻頭言でも「民衆救済の大確信と燃ゆるがごとく大聖人様の情熱にふれよ」と御教示をうけたわれわれは実に幸福である。

「日興上人と大石寺」

樗牛は「子の好める人物」の後半で、日興上人と日持のことにふれている。「ぜひ二人の弟子について話したい」という前おきて、まず「富士の裾に大石寺という寺がある。よほどの大伽藍で、日興上人が開祖である」ことをのべ、日興上人の本門の戒壇建立の大理想を賞讃している。そして日持(日興上人の弟子)については、海外布教の雄大さをのべている。

しかし、彼は、日興上人をたたえ、大石寺についてのべながら、ついに、日蓮正宗を知らず正法につけなかつた。樗牛が「日蓮上人」などといっているのも、「御本仏日蓮大聖人」の真のお姿がわからないゆえである。

その他、入信前の樗牛については、戸田先生は、論文集の生命論で樗牛の生命論にふれて、まだ浅薄なりとおおせられたこともあられた。

さらに、入信後の樗牛の生命観について、戸田先生は、「彼れは正法を知らなかつたが、山でいえば八合目まで行つた天才だ」と申されたこともある。しかし邪宗の悲しさ、いかに天才でも、大聖人様の正義には遠くおぼなかつた。

学会員たる喜び

樗牛は本門戒壇の大御本尊様の大功徳をうけることなく、わずかに三十一歳で世を去つた。日蓮大聖人様が「日輪のごとくなる智者なれども天死あれば生大に劣る」とおおせのように、まことに惜しい死であつた。

それに反して、広布の時にのぞんで、正法につけたわれら学会員は非常にしあわせである。戸田先生の「強信なる言論人出でよ」の御命令にこたえ、明治の高山樗牛以上の人材を、どんどん学会から輩出したものである。



③ 生長の家を破す

魔の眷属

釈迦の説いた、經典のなかに
涅槃經というのがあります。こ
の經典に、「もし、仏の説く教え
に、したがわれないものがあれ
ば、それは魔の眷属である」と
いうことをいっています。

魔の眷属とは、わたくしたち
を、不幸にする邪宗教であり、
間違った教義を説く、邪宗教の
教祖、そして、それを世に広め
る者をいいます。

その一つに「生長の家」とい
う宗教団体があります。「生命の
実相」という本と、著者谷口雅
春の名でよく知られています。
この教団は、すでに百以上の書
籍を発行しており、いまでも数種
の月刊雑誌を発行して、そのイ

ンチキ教義を世の中にばらま
いています。

それでは、どのような教義を
説くのか、その誤まりを解明し
ていこう。

仏法を盗む

まずはじめに、根本的な考
え方として、「万教帰一」と
いうことをいう。すべての教
えは、一つでなければならな
い、というわけであります。

「生命の本質」を明かし切
った宗教的真理に、各宗ごと
の真理などが、沢山あるわけ
がない。共通の真理は一つ
で、後はまじりものだ。

生長の家は、その共通の真
理を、明らかにするものであ

るから、特に、一宗一派を
たてるものではない。生長の
家をやれば、各宗の真髓がよ
くわかる。かくて、生長の家
を各宗と併用すれば、世界の
宗教を融合和解せしめ、世界
平和をもたらすことができ
る」といっている。

第一に、生命の本質を明かし
きつた宗教が、一体、あるかど
うか考えてみる。

キリスト教では、神によっ
て、人間が作られたという、そ
れ以前の生命については、説く
ことができず、また神の生命は
いずこより来たって、いずこへ
行くものかも判然としない。ゆ
えにこのような宗教は、「生命
の本質を明かしきつた宗教的眞
理」などに、到達していないこ
とは明らかである。

つぎに、仏教を考えてみると
釈迦は、始めの四十余年では、
生命の眞実の姿を、少しものべ
ず、法華經の說法にいたって、
はじめて、五百塵点劫の生命を
明かして、永遠の生命を示し
た。しかし、これも一応の義で
ある。

第二に、世界の宗教（特にキ
リスト教と仏教）を、融合和解
せしめたなどというが、融合さ
れた仏教など、仏教ではない。
釈尊のことばに「法に依って人
に依らざれ」と、すなわち、後
の時代になると、でたらめをい
うインチキ師がいるから、經文

によって、その正邪を明らかに
せよ、とのことばである。そこ
で、經文をみると、法華經の第
一には、「唯一仏乘のみあって
二なく又三なし」、また法華經
の第二には「余經の一偈をもう
けざれ」といっている。すなわ
ち、民衆に幸福を与える宗教は
唯法華經一つあるだけであつ
て、それ以外を信じてはならな
いとのことばである。

それとおなじように、正邪の
区別もなく、各宗を融合させた
「生長の家」を信すれば、必ず
不幸の道を、たどらねばならな
くなる。

要するに、「生長の家」は、本



釈迦もキリストもいっしょくたに

来は、外道でありながら、高級な仏教の義を盗み、我見をもつて、いやしい外道の教に混入して、仏法を中から破る、獅子身中の虫である。「生長の家」こそ、天魔である。

狂人の靈感

「あらゆる宗教的經典は、それが、じかに生命のあるものであるかぎり、必ず靈感によって、書かれたものである。ただ教義のみ知って、靈感なき者は、真に、經典の生命を捉え得ない。生長の家は、靈

感によって、仏教といわず、キリスト教といわず、あらゆる良き經典の神髄に、透徹してこれを拝むのである」ともいっている。

あらゆる經典は、「靈感」でしか解釈できぬ、という変な話では、絶対にあるべきものではない。狂人のたわごとである。積尊のことばに「心の師となるのも心を師とせざれ」とあるが、自分勝手に自分の心のおもむくままに、道理も論理も現実も、無視して解釈すれば、それはデタラメというほかない。自分の心に浮かんだ考えが、靈感にせ



さあいらっしゃい、いろいろあります

よ何にせよ、それが経文道理にかなうかどうか、現実と合致するかどうか、冷静に考えてこそ經典の真意を明らかにすることができるのである。

天台大師も「文無く、義無きは信受すべからず」といっている。「靈感」の有無など、問題ではない。このような点を考えず、「靈感のない者は經典の生命を捉ええない」とか、「靈感で經典の神髄に透徹する」という生長の家の谷口雅春こそ、狂人以外の何ものでもない。

不良品を売る

「各宗教の一番よい所をとって作った宗教が生長の家です」「生長の家はデパートのようなものである。デパートにはそこらの小売店より優良な品がならんでいるように、生長の家は各宗の優良真理をえらんで陳列してある」と。

各宗の一番良い所をとったといっているが、各宗のどこを一番良いとみたかが問題だ。良く子どもの大切にしている箱の中を見てみると、ビールびんのフ

タとか、貝がらとか石ころとかが集めてあり、ほほえましくなることがある。これは集める規準が低級だから価値のないものを集めて喜んでいるのである。宗教でも同様で、いずれが正で、いずれが邪かと決める宗教批判の原理がないから、生長の家の教義は、彼らの単なる笑うべきひとりよがりすぎない。

つまり、生長の家なるデパートは仕入係に全く何も分からぬ赤ん坊を使っているため糞を味噌と思つて売つたり、不良な高価な品を陳列していたりするのと同じである。

「人間は神の子、三界は唯心の所現、喜ば喜ぶ世界がでてくるし、憎めば憎む世界がでてくる。

だから心に健康を思えば病気が直り、心に無限無給(神により財産がゆたかに考えられる)を思えば、貧乏は解決する。また神の子を病苦、貧苦でくるしめるわけがない」という。

もし、神が存在すると主張するならば、それは五感(視覚、聴覚、味覚、触覚、臭覚の五種

の感覺)で認めることができなければならない。そうでなければ、理論的、または直覺的に精神作用で、認められるものでなければならぬ。(これが六感である)

それを、五感六感を超越すると定義した、神を論ずることは、自ら絶対わからない、と宣言したものを論ずることになり論理的にまったく矛盾する。すなわち、それは、前後相反した、単なる独断であり、何らの客観的、普遍妥当性をもたない、たわごとすぎない。

それとも、「天使」とやらがまた、谷口雅春が、第七感でもそなえていて、それで判断したとでもいうのであろうか。第七感などというものをもつものは、まさに化物という以外にはない。化物と認められるほかにないような創造の神は、単なる妄想の産物という以外にはないか。

教祖・谷口雅春は、仏教を盗んで、インチキ經典「生命の真相」を作り、キリスト教と仏教は、理論上同じだとしている。魔の眷属とは、彼のことだ。このような、邪説にだまされてはならない。

聖徳太子

——日本文化発展のはじめ——

仏教文化の華が 開いた飛鳥時代

仏教に反対する保守勢力たる物部氏が滅ぼされ、朝廷において肩をならべる者がいなくなる、蘇我の馬子はしだいに心が高ぶり、ついに、みずからたてた崇峻天皇を殺害するという暴挙に出たのであった。この間の事情については、崇峻天皇御書にくわしくのべられています。

さて、崇峻天皇がなくなれば、たあと、天皇の位につかれたのが、敏達天皇の后で、第三十三代推古天皇です。推古天皇は女帝でしたので、その甥にあたる

聖徳太子が摂政となり、蘇我氏の勢力をおさえて、政治の実権をにぎったのであります。

時に、太子は若冠二十九才の青年でした。生来、聡明で、仏法に帰依する心の深い太子は、摂政となるや、ただちに仏教興隆の詔を發し、その流布に努力をほらわれると同時に、内政にも、外交にも、仏法の精神を根幹として、一大改革をほどこしたのです。

したがって、しだいに勢いをえてきた仏教は、ますます盛んとなり、当時、都のおかれていた飛鳥地方を中心に、飛鳥文化と呼ばれる仏教文化が開花したのです。

法華經中心にして鎮護國家の法を定める

すなわち、太子は、まず数多くの經典の中で、釈迦が出世の本懐として説いた法華經を中心とし、勝曼經、維摩經をその左右に配して、この三經をもつて、鎮護國家の法と定めたのです。

太子は多くの人々に対し、これらの經典の講義をしたり、また、法華經以下三經の義疏（注釈書）を著わされたりした。

とくに、この三經義疏は、現存最古の著述であり、中国の學者の著述を参考にしながらも、それにとらわれない、当時としては、すぐれた解釈を行なっております。しかし、天台大師の説いた一念三千の法門には、はるかに及ばず、日蓮大聖人様が聖徳太子の義疏を引用さえなきらないのは当然のことです。

實際面の改革の第一歩として断行したのは、因襲的氏姓制度を廃止して、新たに、冠位十二階を定めたことす。（摂政とな

って十一年目）

すなわち、当時、日本には、物部氏とか、蘇我氏とかいう多くの「氏」がありました。これは、家柄をあらわす言葉で、たとえば、服部氏は機織を職業とする家柄、鏡造氏は鏡を造る家柄、中臣氏、斎部氏は祭祀を司る家柄、大伴氏、物部氏は武士を統轄する家柄と、それぞれきまっています。

またこの他に、臣、連、首など、この階級をあらわす「姓」があり、このような制度のもとで人は生まれながらにして、職業が一定し、また階級も自然に定まっています。賤民として生まれたものは、いくら才能があっても、一生、奴隸として送らねばならず、また、高い階級の家に生まれたものは、たとえ愚人であっても、指導者の地位についたのです。

これは、今から考えれば、非常な不当な制度であると思えますが、当時においては、当然のこととして行なわれていたのです。

氏姓制度を廃止して 人材登用の道ひらく

釈迦が、仏教を説かれる最初にあたって四姓種なし、仏道に入るものは、悉く平等なりといつて、当時、インドに行なわれた氏族制度を、仏法の上から打破されたのですが、聖徳太子も、日本古来の因襲として、長い間行なわれてきた氏姓制度を廃止して、新たに、十二階級の冠位を定め、その人その人の功績、実力に応じて位階を配しました。また、それは姓のように世襲ではなく、一代限り授けることとしたのです。

こうして太子は、氏姓制度にともなう門閥を打破し、人材登用の道をひらき、万民は、ことごとく平等である、との仏教の精神を実現なされたのです。

冠位十二階を定められた翌年、聖徳太子は、かの有名な十七条の憲法を制定しました。これは、現存最古の法令です。

多くの歴史書には、十七条の憲法は、役人に対する単なる道徳的、宗教的訓誡にすぎない、と書いてありますが、まず第一

条に「和をもつと貴しとなす」

とのべ、団結の最も大事なこと
を示され、第二条に「篤く三宝
を敬せよ」といって、この団結
は、ひとりひとりが仏法に深く
帰依するところから生ずること
を示されております。政治に対
する太子の王仏冥合の理想が、
はつきりとうかがえます。

昨今のわが国の代議士は、聖
徳太子を何枚もふところにかか
えながら、あの国会での有様。
どうせ聖徳太子のおかげで代議
士になったのなら、少しは太子
の教えに耳を傾けてはいかがで
しょうか。

太子は、さらに、中国の文化
を積極的に取り入れて、内政の
革新に役立てるため、また一方
では、当時戦争状態にあった朝
鮮の諸国を牽制するため、隋（西
暦五八九年から六一八年まで、中国
を統一していた王朝で、つづく唐朝
とともに仏教興隆し、高度の文化が
発達した時代。天台大師の寂年が五
九七年、聖徳太子が摂政となったの
が五九三年ですから、天台大師と聖
徳太子は、日中両国でだいたい時を
同じくして活躍していたわけです）
との平和的国交を開き、小野妹

聖徳太子が建立した法隆寺の一部



子らの遣隋使を派遣すること数
度、また多くの留学生も、留学
させました。これらの遣隋使僧
を従わせて、大陸文化の摂取に
つとめたのです。

中国に留学生・留学僧を送り 積極的に文化を取り入れる

時に隋には、豪遊をもってな
れる煬帝が王位にあり、周囲の
諸国を、まるで属国のごとくへ
いげいしていましたが、太子が
煬帝に送った手紙には、少しも

煬帝の威勢にこびることなく、
「日出ずる処の天子、書を日没
する所の天子に致す、恙なしや」と
記したこと、余りにも有名で
す。この太子の、堂々とした意
気はやはり信心よりおこる確信
にもとづくものと思えます。

煬帝は、この太子の少しもこ
びるところのない国書に、少な
からず不満をいだいておりまし
たが、けっきょく、太子の心意
気と、使者の堂々たる態度に屈
服したものか、翌年、斐世清とい
う使者をつけて、小野妹子らの
使いをていちょうに送ってきた

ので、太子は、これを歓待し、
その帰国に際しては、再び妹子
らに送らせ、さらに高向玄理、
僧旻、南淵請安等八人の留学
生を、共に派遣したのです。

これらの留学生は、いずれも
太子のないないの命令をうけ
て、高向は、当時の支那の制度
を調査し、また僧旻は、仏典の
研究といったように、それぞれ
その使命にむかって研さんを重
ね、帰国後は、かの地でえた知
識を大いに活用して、わが国の
政治、文化の上に多大の貢献を
したのです。

他日、これらの人々によって
大成した大化の改新は、実にこ
の太子の構想が、大きく実を結
んだものと見ることができまし
ょう。

多くの寺院仏像等の建立 世界の文化の影響を受ける

聖徳太子が物部氏を滅ぼして
四天王寺を建立したのが、仏滅
後一五三七年にあたりますか
ら、像法の後半、すなわち、多
造塔寺堅固の時代に入って、開

もなくす。すなわち、仏滅後
一五〇〇年から二〇〇〇年まで
の五〇〇年間は、多くの寺院や
仏像等の建立が盛んに行なわ
れ、人々は、それによって功德
をうけることができる、と釈迦
が予言している時代です。

この予言どおり、太子の時代
には、仏教の興隆にともなっ
て、りっぱな寺院がいくつも建
てられ、中でも、摂津（今の滋
賀県）の四天王寺と、日本最古
の木造建築として有名な大和の
法隆寺が、その代表的なもので
す。その他仏像の彫刻、絵画、音
楽等、文化のあらゆる方面にお
いて一大革新をよげたのです。

そうして、法隆寺の柱はギリ
シアの建築に、同寺伝来の獅子
狩文様錦はベルシアの工芸に、
また、工芸品などにおりりみ
られる唐草文様はエジプトに、
それそれ起源があるといわれて
おりますが、中国を通じて伝来
したとはいえ、この飛鳥文化が、
すでに世界各地の文化の影響を
うけ、国際色豊かなものであっ
たことは驚くべきことです。
聖徳太子は、インドのアソカ
王や、カニシカ王などとともに
仏法の精神をもってつらぬいた
大政治家であった。（森田康夫）

最近の 仏教界

映画「続親鸞」に思う

木村紀子



ふと見あげると、初秋の空は目にしみるほどあざやかに青く、そして高い。ひんやりと膚にふれる秋風も、町の雑踏をくぐりぬけ、ポプラの木ずえをぬいながら駆けて行く。秋いよいよ深し、の感がする。

最近、京都を中心とする既成宗教は、みずからの無力をさらけ出すとも知らず、講演会、研究会、仏教講座を開催して宣伝に余念がない。

東映京都が、仏教ものの第二陣と企画して放った「親鸞・第二部」の都内封切りに便乗してか、きょうは浄土宗、東本願寺派主催の講演会が都内の某所で催された。題して「親鸞の現代的意義」

聴衆の入りは、まあまあである。集まった年輩は、平均年齢六十歳とみる。前後に女学生が四百人ほど、行儀良く並んでいる。聞いてみると、講演会のあとにやる奈良・京都の映画を、修学旅行の参考のために見たそう。

講演会の内容などは、聞かずと知れたことではあるが、人間は生きていくかぎり、煩惱のあるかぎり、苦しみつづけるものである。釈迦だって、生・老・

病・死は人生死ぬまでつきまとうものだ、といっている、と。おやおや、それは、阿含部十二年、爾前経の時だけの話ではなかったでしょうかね。釈迦は、法華経にきて、煩惱即菩提、生死即涅槃という仏法の最高哲理

を残されていますよ。聞くところによると、東本願寺ではあと半年にせまった「親鸞七百年祭」に、十六億一千万円の御遠忌募財を始め、現在まだ半額に達せず、そのため集金不振寺院へは内局が直接出向い



映画「親鸞」から

第三の広場

て、いわゆる直談判をやっていると
いうことだ。これこそ宗教
の美名に隠れて民衆のフトコロ
をゆする、たかり、詐欺漢だ。

たしかに映画は人間的すぎた
というと聞こえは良いが、要す
るに生まぐさ坊主の青春のセン
チメンタルであった。なにも親
鸞と題名を付けずとも、どこか
のだけれども、煩惱に悩む一青
年が登場しさえすれば話ができ
るわけである。

これに対し、西本願寺派では、
最近創価学会の折伏によってど
んどん信徒が減っていくので、
このままでは放っておかれず
と、「新興宗教対策委員会」を
設置、最低、月一回は委員会を
開いてその対策を講じていくと
か。方法を考えるのもけっこう
だが、一時、大聖の金言に耳を
傾けてみよ。

「小乗流布して得益あるべき時
もあり、権大乘の流布して得益
あるべき時もあり、実教の流布
して仏果を得べき時もあり、然
るに正像二千年は小乗、権大乘
の流布の時なり、末法の始めの
五百年には純円・一実の法華経
のみ広宣流布の時なり……権実
離乱の稠なり云々」と、
禅宗とても同じである。江戸

時代の代表的美術品である狩野
探幽・山業等を資本に、観光ニ
ユースの企画をたてたそうだが、
寺の猛烈な反対にあったとい
うことだ。しかし、いまや観
光地とみずから名乗って出るよ
うにまで墮落したのなら、つい
でに、美術店にでも転業したら
どうなのか。

はたまた、立正佼成会も、大
聖堂を建築中だが、完成はいつ
のことやらわからないという。

「半永久的に残るものだからよ
りりっぱなものを」とは、表面
き聞こえは良いが、資金難が原
因である。民衆の無知につけこ
んで、惰眠をむさぼる宗教屋
よ、その頭上に鉄ついの下る日
は目に見えているのだ。

秋風は、膚にしみとおるほど
冷たい。伊勢湾台風の惨過は、
まだすっかり片ずいていない。
三井三池争議も、まだ具体的な
解決をみてはいない。これから
冬に向かって、多くのひとびと
が寒空のもとに、どれほどの苦
しみを味わわなければならない
か。

「民衆の苦しみはわが苦しみ」
との大聖人様のお心のまま、師
匠のもとに戦ってゆこうではな
いか。
(女子第四十八部隊長)

社会の不正と戦った婦人記者

—アイリス・ノーブル著『婦人記者No.1』

吉村勤子

私の書評

【本書のあらすじ】

主題のとおり、世界初の婦人
記者ネリー・ブライ(一八六七—
一九二二)の伝記である。
アメリカのピッツバーグに生
まれ、判事である父をなくした

エリザベス・コクレーン(本名)
は、母親と二人の生活を支える
ためにも、地方新聞「デイスバ
ッチ紙」に、強引に自分の文才
を売りこんだ。
一八八五年といえ、まだ女
性が、知的職業につくことなど

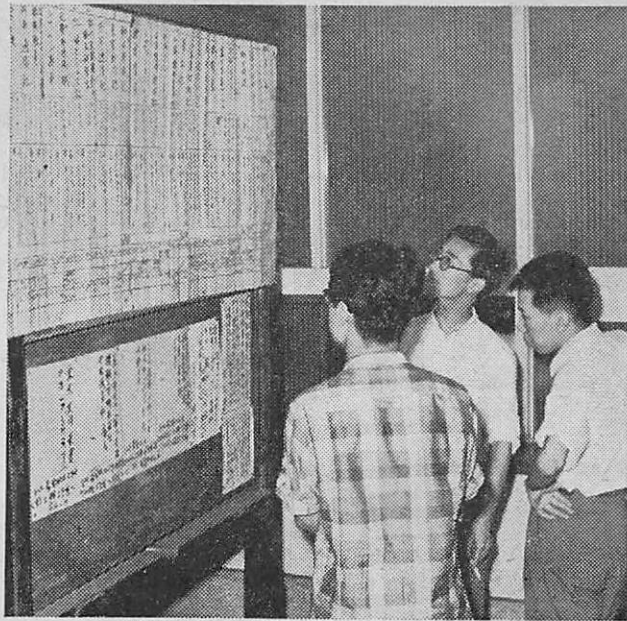
考えられなかった時代だ。
初任事の「離婚について」の
記事は大成功をほくし、編集長
は、ネリー・ブライの筆名をあ
たえ、婦人記者第一号が誕生し
たのだ。

次々と書きまくったびん詰工
場、貧民街、刑務所、地下工場
の探訪記には、今までの記事に
ない、働く女工たちの不満、不潔
で非衛生的な環境を暴露した。
そして、彼女は、一躍労働者
や、貧しい人々のチャンピオン
になったが、同時に、外部の実
業家や広告主たちは、「おせっ
かい女」として、編集長に圧力
を加え、また、市民も恥知らず
な女と非難した。その後も、彼
女の名はますます高まった。

しかし、なんといっても彼女

を国際的存在にしたのは、ジュール・ベルヌの世界一周早回り記録を破り、七十二日間の新記録を樹立したことだ。「最も偉大な新聞人」との最高

の名声と共に、社交界の寵児にまつりあげられた。しかし、その後結婚に失敗してからは、彼女の運命も坂を下る車のように傾いてしまった。



掲示板的求人欄に見る学生（東大構内）

秋ともなると、学生にとっては、学期末試験や就職試験に頭を悩ます時期である。とりわけ、就職となると、本人はもろろんのこと、両親までも心を砕いて心配するのである。

やはり、就職は重大事なのである。各会社とも、優秀な人材を、最少限度に採用するのであって、みれば、コネを探し求める学生の姿を見て、意気地なし、と言で言い切れるものではなからう。

先日、ある友人に就職について

「採用予定者は若干名」というと、あちこちから、「エへへ……」という笑い声がおこった。その笑い声は、不安、自ちよう、

前篇の華々しい物語に始まった人生も、哀れな女の一生のエピソードでしかなかったのだ。

そして、再び記者として「ジャーナル紙」に働き出したときには、過去の時代は過ぎ、はや二十世紀。偉大なネリー・ブライも、栄光に輝いたネリー・ブライの記事を求める読者もいなかった。

その情熱に学ぶ

本書、「婦人記者No.1」は、伝記作家として有名なアイリス・ノーブル女史の著。世界初の

婦人記者、ネリー・ブライの人生記録である。全篇に流れる彼女の正義感と、仕事への情熱、そして、世界に「ネリー・ブライあり」と、その名をとどろかせた、先駆者としての偉大な業績が、きびきびとしたタッチでつづられ、近來にない楽しい読みものだった。「まあ、ばかなことはいわんで下さい。いくらなんでも若すぎると、頭から女性の知的職業進出など考えられなかった一八八五年のこと。

彼女が、次々と書きあげる体

真の木鐸たらん

しかし、ひるがえって彼女の一生を深く観察したとき、「最優秀の新聞記者」という最大級の名誉も、彼女をしあわせにはしていなかったのだ。

誰にもまざる才能も、情熱も、社会的地位も宿命には無力なものなのだ。九年間の結婚生活も、夫の急死で終止符。

前篇の華々しい物語に始まった人生も、哀れな女の一生のエピソードでしかなかったのだ。

第三の広場

あきらめ、心細きなどが一しょになったものであった。現在、出身学校、性別、年令にハンディキヤップをつけずに、平等に入社試験をしているのは新聞社だけだそう。

それだけに、コネも、学閥関係もない者にとって、新聞社は頼みの綱なのであろう。

大学卒業生の就職難は、今に始まったことではない。大正の末期から、昭和のはじめにかけて、第一次大戦後にぼろ張した日本の資本主義の発展が行き止まり、世界の大恐慌の大きな波に洗われて、巷に失業者があふれた時代もあったし、ルンペンという言葉ができたのも、そのころであった。

今日の就職難のよってきたる原因は、日本経済の貧困化、その他の社会的事情にあるが、そればかりでなく、人口の増加も大きな原因である。このような状態では、おぼれるものはワラをもつかむ、のごとく、何とかして就職しなければとあせるので、とすれば、人を押しつけて、自分だけがうまい汁を吸おうと、利己的になり、排他的になり、功利的になり、陰險な青

就職の秋に思う

高 沢 正

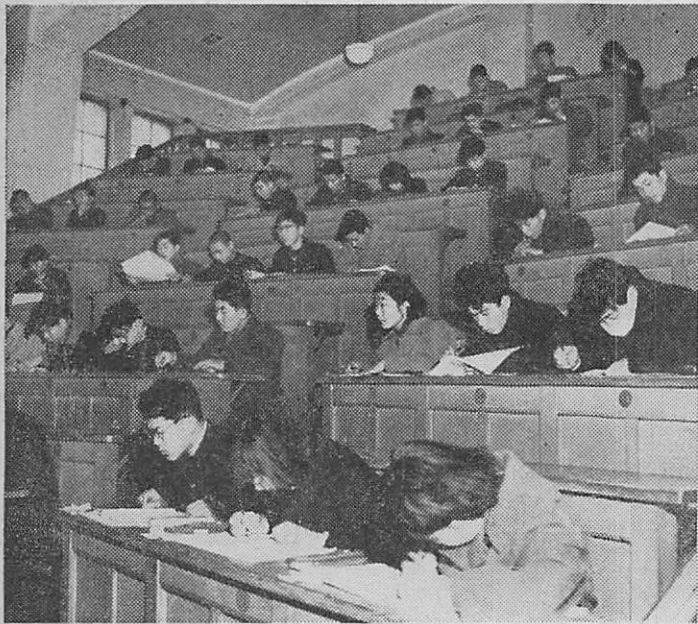
年をつくってしまおうおそれがあ

において、社会においても、持てる力を十二分に發揮しております。恩師戸田先生のおおせ

日本の潮であると思います。

(学生部グループ長)

就職試験を受ける学生(阪大で)



のごとく「青年は日本の柱であり、眼目であり、大船である」との確信を持って、日夜あらゆることに對して、全力を注ぎ、公私共に勝ち抜いている姿こそ

今や、マスコミも巨大なものにふくれあがった。公正な立場で真実を報道すべきこの機構も、だんだんと犯されつつある

自分の仕事をみても、家庭のしあわせをモットーにかかけ、指導的立場にありながらも、売らんがためには、読者や広告主へ迎合しているありさまだ。

こう考えたとき、まだ未熟ではあるが、大白法を護持する自分の使命の重大さと、福運をつくづくと感じていった。

戸田先生の「新聞記者、雑誌記者にいたっては、とくに天下の木鐸をもって任ずるものである。高潔にして具眼の士でなければならぬ。

一流新聞、一流雑誌記者のなかには、その人ありと思われるが、二、三流雑誌にいたっては、とうとき困窮たる紙を使いながら、虚偽と無定見と人気とで、紙面をうずめつつしている」とのお言葉を、一言、一言かみしめ、第三文明建設の一端になう一人として、使命をまっとうしたいと思う。

(女子部第八十二部隊)

小説

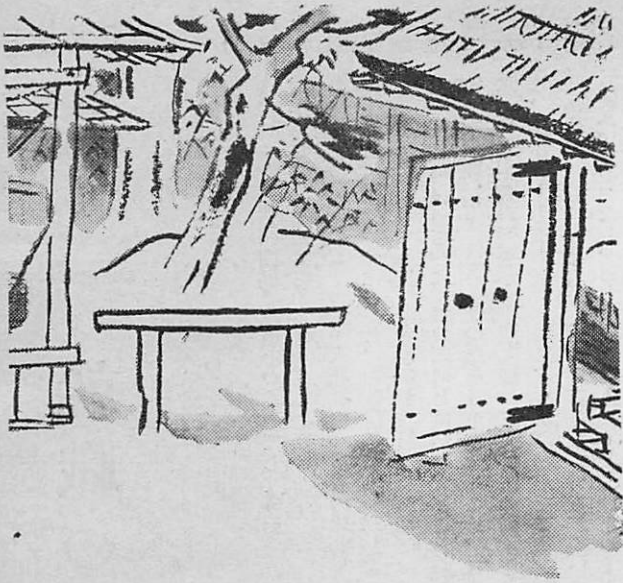
日蓮大聖人

湊 邦 三

佐渡流罪の巻——三十

山口将吉郎画

(題字は堀日亨上人)



(一)

郎党の次郎が胴丸姿で槍を片手で掴み、三昧堂の近くで捉へた男を縛上げていた繩を手にして、怒りのために真赤な顔をして厨の土間へ入ってくると烈しい勢で繩を叩付けた。

『糞ッ!』

年老いた郎党の権四郎は味噌汁の鍋へ蕎麦を入れて囲炉裡で煮ていたが、吃驚して振りかえつた。

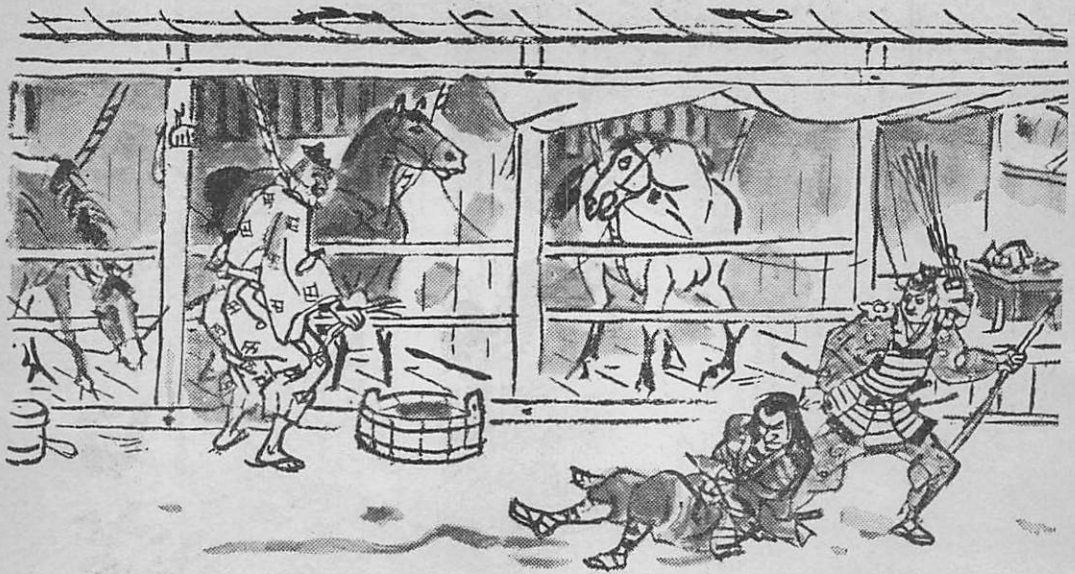
『次郎、まだ、怒っておるのか』

『……』

次郎は声をかけられても、権四郎を見ようとしないで、叩付けた繩を、草鞋の足で散々に踏んでから、槍を抱えて土間を飛びだして行った。

『あ、は、は……』

郎党の源内が笑いながら厩から帰ってきた。



「次郎の奴、怒りだすと手が付けられん！」

なう、権四郎よ。次郎が捉へた男を、十郎どのは糾明もせず放してやれといわれたげなの」

権四郎は鍋の蓋を取って、握っている箸で味噌汁を掻廻しながら首肯いた。

「うん、そういわれた。あの男、河原田の本間家におる郎党じゃ。わしは次郎を手伝うて縛上げる時、それに気が付いた。たしか、遠矢の名人で小平次というたかな。わしは顔に憶えがあった」

「そりゃ、わしも、次郎が厩の前を引摺って通る時に、そう思うた。どこかで見たことのある顔じゃ」

郎党の源内は草履を脱いで厩炉裡端へ上ってきた。

「十郎どの、それを一目で見抜かれたのじゃ。殿のお留守に、一族の河原田を相手に諍いごとを起したら大変だから。源内、そろそろ煮えてきたようだよ」

権四郎が煮えこぼれそうになった鍋の蓋を取ってそういうと、源内は腰の辺を拳で打ちながら立って厨の隅の棚から椀を二つ持って

今月から読まれる方に

うす桃色に咲きほこる彼岸桜、紫の花をつけたすみれ、淡い緑の色になった雑木、刀鍛治行光の小屋のある台地に春がやってきた。吹き上ってくる風も暖かくほほをなでる。

刀鍛治行光にとっては、この自然の春を心から暖く迎えることができた。それは文字どおり、長い年月にわたり心身ともに極寒のごとき試験にたえてきたからである、大聖人様にさしあげる太刀を作り上げるために。

師の日蓮大聖人様より早く赦免された弟子の日朗、死身弘法の信者四条金吾は、幕府の圧力を恐れて師の日蓮大聖人様を強過ぎるとする日昭、日行、大進房等にはげしいいきどおりを感じるようになったのである。

やがて行光によって鍛え上げられた太刀は、研師弘助の手でとぎ上った。行光さん！この太刀は尊い太刀じゃ！弘助の叫びに行光の両眼から熱い涙がほおを伝わってきた。刀剣好きな、目さきの鋭い北条弥源太入道も静かに太刀を抜いた瞬間に「うむッ！」と、のどから感動にたうめき声を上げたまま、夕明かりにはえて鋭くひらめいている太刀を凝然と見るばかりであった。

佐渡——野も山もまだ雪でおおわれている。印性房、唯阿弥陀仏、慈道房等の大聖人に対する策謀は続けられている。

そしてきょうもまた、遠矢の小平太は三昧堂の大聖人を狙ったが、本間の郎党にとらえられてしまった。邪宗の坊主どもの狼狽はげしかった。



投げたが、もう少して、背中を突刺すところじゃった！」

『やれ！ 危いことであつたの！ 怪我をさせたら、河原田の本間家が黙っておるまい！』

権四郎は眉をひそめながら、源内へ腕を渡した。

『あの年頃は、血気盛りじゃし、それに次郎は一本気だから』

源内は白髪まじりの眉毛を上げて、腕の湯気を吹いてい

る。

『なう、源内よ。食気だけが残つて、元気も色気もない年寄

になつては、もう、お終いだの、ふ、ふ、ふ……』

権四郎が腕と箸とを手にして気力のない声で笑つた時、郎

党の次郎が胴丸を脱ぎ、手足を洗つて戸口から入つてきた。

『やあ、次郎、まだ、奥へ行かぬのか！』

『愚図くしておると、十郎どのに叱られようぞ！』

権四郎と源内は顔を見合せて声をかけたが、依然、次郎は怒つていて真

赤な顔をしており、草履をぬいで板間へ上ると、囲炉裡端も見ないで奥へ

入つて行った。

『次郎の奴、よほど口惜しかったと見えるの。まだ怒つておるわ、は、は、

は……』

権四郎が腕と箸を手にして、次郎を見送り、齒を刺きだして笑うと、源

内は眼を光らせて、それを咎めた。

『権四郎、次郎を笑うのは可愛そうじゃ！ 殿が鎌倉へ向つて発足された

時、十郎どの、次郎にいはれた。聖人さまへ危害を加えようとする者がお

きた。

『次郎の奴、よほど口惜しかったと見えてな。男を裏門のところまで引摺

つて出て、聖人さまに小指でもかけたが最后、命はないものと思えいう

て、頬の辺へ平手打ちをくれたわ』

『ほ、ほう！』

権四郎は瘡めた腕を伸して、源内から腕を取り、蕎麦の入っている味噌

汁を掬っている。

『それから、男が縄を解かれて一散に逃げて行くのへ、次郎の奴、こ

らッ！ 槍を持って帰れ！ と叫んで、裏門を飛びだし、男へ向つて槍を

るゆえ、心してお護りするようにと殿がいい残されたで、油断なく、三味堂を見廻ってくれ、頼むとな」

「ああ、わしも聞いておる」

「槍を提げて三味堂へ近付く者を見れば、次郎でなうても、聖人さまへ危害を加える者と思ふじやろ。それを必死に捉えたに、糾命もせいで放せといわれては腹が立とうぞ」

源内が若い次郎の一閃な心の内を察してさういうと、権四郎は周章気味に首肯した。

「うん、そりゃ、たしかに、腹は立とう。じゃが、源内よ。」

河原田の本間家の郎党と判っては、十郎どのも当惑されたであらう。なにしろ、主人の山城兵衛どのは念仏に一所懸命だからの。迂闊なことは出来まい」

「うむ、そりゃ、そうじゃ。面倒なことが起るからの」

年老いた郎党の権四郎と源内は味噌汁で煮た蕎麦を食べながら、囲炉裡端で話している。

(二)

「なう、次郎よ。心の籠った品々ではないか」

家の子十郎は館の奥の居間で、相模国の鎌倉から運ばれてきた品々、日蓮聖人への信者たちの贈物を黒漆塗で蒔絵のある広蓋へ丁寧にならべながら、郎党の次郎へ話しかけている。

「そなた、早速に、三味堂へ届けてくれ。聖人さま、どのよ

うにお喜びになることか」

「……」

「ほ、これは白厚綿の小袖じゃ。佐渡国の寒さを気遣う人の賜物である。それから帷子が一領、ほう！これは筆が五本に墨が三挺ある！」

「……」

「聖人さまが佐渡国へ流されておいでになって、書物されるのに不自由しいられることを察しられた方の贈物だの！」

「……」



拜



『ふむ、この布袋は重いはずよ。鷲目が入れている。』

『……』

鷲目というのは、銭のことで、銭の中央に孔があるのが、鷲鳥の目に似ているので、鷲目といい、後世には、鳥目とも呼ばれている。

『信者の方たち、なんとしたら、聖人さまの御不自由が防げるかと心を砕いておられる！ やッ！ この筒には酒が入っておる！』

十郎は竹筒の形をした物を手にとって、耳の近くで振っていた。

『おお！ ごぼくと音がして、よい匂いもしておる。それに串柿が五把添えてある。佐渡は雪国と知って、聖人さまのお身体を温めようためであらう。』

『……』

『やあ、この紙包は、なんであろう。ほ、ほう、葉が入っている！ 信者の中に、医術の心得のある方がおいでと見ゆるの！』

『……』

家の子十郎は心の籠っている贈物を広蓋へならべながら、わがことのよう喜んでゐる。

昨日、越後国の寺泊から佐渡国の松ヶ崎の港へ入ってきた船に、相模国愛甲郡依智の館からの使いの者が乗っていて、主人本間六郎左衛門尉重連の手紙と一緒に、日蓮聖人への信者たちの贈物を携えてきたのであった。

主人の重連が流罪の者として塚原の三昧堂へ押籠めていた法華経の行者日蓮の予言に愕き、平念珠を断って念仏を棄てると同時に、家の子十郎に新穂の館の留守居を命じたので、十郎は直に郎党の次郎に旨を含めて、日蓮聖人に対する流人の扱いを止め、その身辺を厳重に警戒させてきたのだ。

った。

そして、時々、次郎を伴れて三昧堂へ行き、凄じいばかりの荒堂で、弟子の伯耆房と寝起きしながら、日蓮聖人が従容として日々を送っていらる姿から、佐渡の僧たちはもとより、主人の重連と一緒に鎌倉へ上って行って逢った諸宗の僧たちにも見る事ができなかった尊きを韓々と感じているのだった。

それだけに、依智から届けられた主人重連の手紙に、日蓮聖人の身上について、眉をひそめないではいられないような事柄が認めてあつたし、こどさらに、はる／＼と佐渡国へ托してきた信者たちの贈物は、彼が直垂で包んでいる遅しい胸の内に響えようもない喜びを涌き立たせている。

『次郎よ！ 流罪の聖人さまを、どのように信者の方たちが案じ氣遣うていられるか、この品々を前にしておると、その姿が見えてくるようだよ！』

十郎は葉の入っている紙包へ、四条中務三郎左衛門尉頼基と認めてある名札を添えながら、強い感動を声音に響かせて、不図、顔を上げ、先刻から、郎党の次郎が口を噤んで、いくら声をかけても相槌を打とうともせず胡床しているのを鋭く見た。

『次郎！ そなたは、この十郎が、捉えた者を放たせたを、いまだに不服に思っておるのか！』

『……』

十郎の深い思慮を湛えている両眼から、射るような視線をそそがれると郎党の次郎は丸い肩をびくッ！ と動かしていよ／＼真赤な顔になつてきた。

『聖人さまへ危害を加える者を見て、こッ！ この次郎が懸命に……』

『次郎！ そなたは知らぬのじゃ！ あの男、河原田の本間家の郎党ぞ！』

『河原田の者であるうが、どこの者であるうが、殿の御言付けを守って怪しい奴を捉えたのじゃ！ そッ！ それを……』

郎党の次郎は血氣盛んで一閃な若者、たとえ、家の子の言葉でも納得の行かないかぎり屈伏はしない。

(三)

『ふ、ふ、ふ……頼母しいが、困った奴だの！』

十郎は両眼から射るような視線を消し、苦笑いして匙を投げた形で呟くと、俄に声を低くして、四辺の氣配を窺った。

『次郎！ 誰にも漏してはならぬぞ！』

『えッ！』

家の子十郎の顔の表情に容易ならぬ色が浮んだので、一瞬、次郎は息を呑んだ。

『相模国依智郷の本館においてになる殿から、今日、お手紙が届いたのじゃ。それには鎌倉に起つた謀叛は討平げられて、一応、形勢は静かになつておるが、油断はならぬで、しばらくの間、佐渡国は留守にしなければならぬまい。ついには、日蓮聖人さまのお身体を河原田の本間家に預つてもらふようになるかも知れぬと認めてあつた！』

『……』

次郎の熟れたように赤かつた顔の色が颯と変つた。

『河原田の本間山城兵衛入道どの、それは／＼熱心な念仏者で、聖人さまを憎む氣持が激しい！ 今日、そなたが捉えてきた男は、槍を持って三』

味堂へ近付こうとしておったといえ、危害を加えるつもりであつたらう！ 厳しく糾明すれば、誰に頼まれて、聖人さまを突殺すつもりであつたか、主人の山城兵衛に言附けられてきたか、どうか……それは判つたであらうが、新穂の本間家には一族であるばかりか、もしも、聖人さまのお身体を預けるようなことにでもなれば、今、ここで、彼等の憎みを掻立てはならぬと、この十郎は判断したのじゃ！」

『うむッ！』

次郎が赫ッ！と睨んでいる両眼に、納得の色が見えてきた。

『折角、そなたが捉えた者を、なにゆえに、糾明もせいで放させたか、次郎！ 判ってくれたであらうな！』

『判りました！』

郎党の次郎は大きく首肯き力強い声でいつてから、またも顔を真赤にして、十郎に詫びた。

『十郎さま、深い思慮を廻らされて放してしまえといわれたとは知らず、不服げにして悪うございました』

『あッ！ はッ！ はッ！ 新穂の本間家の郎党は筋金入りで頼母しいが扱ひ憎いわ！』

十郎は粗い頬髭のある顔を綻せて快よげに笑つたが、次郎はなにか心に残っているものがあるらしく、生真面目な顔を崩そうとしなかつた。

『十郎さまにお伺ひいたします』

『なんだの』

『この後は、怪しい者が三昧堂へ近付いた時など、どのようにすればよいのでしようか』

『おお！ 次郎、そなたを迷はせて済まぬの』

十郎は優しく慰めてから声を潜めた。

『今日、次郎が捉えた男、なんの糾明もせずに放したで、もしも山城兵衛が言附けた者であれば、かえつて、新穂の本間家を憚り恐れて近付くまいかと思ふ』

『……』

『しかし、この佐渡には、他にも、多勢の念仏者がおることゆえ、そなた一層に厳しう見廻つて、いささかでも怪しいと見たら、遠慮なく捉えてくれ！』

『かしこまりました！』

『ただし、捉えた者の処置は、この十郎が指図するぞ。よいか』

『はい！ 決して不服はいませぬ』

次郎が明い顔になって首肯くと、十郎は大きく笑声を響かせた。

『あッ！ はッ！ はッ！ 漸くに、次郎が機嫌を直した！ 機嫌を！』

その嬉しげな顔で、聖人さまへの贈物を三昧堂へ届けてくれ！』

郎党の次郎は逞しい腕をひろげて、白厚綿の小袖、帷子、筆、墨、酒の入っている筒御器に串柿、菜、銭などの載せてある蒔絵のある黒漆塗の広蓋を持って、家の子十郎の居間を出て行った。

『やあ！ 次郎、なにを持つてるのじゃ』

次郎が広蓋を抱えて厨へ入つて行つた時、年老いた郎党の源内は既へ行つたのか姿はなく、権四郎だけが土間に立っていて、彼が散々に踏付けた縄を拾つて戸口を出て行こうとしているところであつた。

『大層、機嫌のよい顔をしておるが、十郎どのに叱られなかつたのか』

『ああ、叱られるかと思つたに、このように沢山に頂戴物をした』

次郎が機嫌のよい顔で冗談をいながら土間へおると、権四郎が泥だらけになった縄を持って寄ってきた。

『ほ、ほう！ いろいろの物があるの。とても、そのように次郎が貰うわけがないが、どこへ持って行くのじゃ』

『塚原の三昧堂へ持って行くのよ』

『えッ！ 三昧堂へ、それを……』

『聖人さまへというてな。信者の方たちが、相模国の鎌倉から届けてきたのよ！』

次郎は遅い腕で抱えている広蓋の品々を嬉しそうに見て、いそいそと土間を出て行った。

(四)

その頃、塚原の三昧堂では、日蓮は数珠を手にして縁先に立ち、春三月というのに、雪を被って寒々と聳えている大佐渡の山脈や、近頃は農夫らしい姿が彼方此方に見えはじめているが、まだ雪に蔽われている国中平野などを見渡していた。

『伯耆房よ。佐渡は雪国だの』

『はい、お師匠さま、雪が消えるのは、いつ頃でございませうか』

伯耆房も数珠を手にして、師匠の背後で膝をついている。

『相模国の鎌倉では、もう桜が散ってをりませうに……』

『そうよ。鎌倉は暖いからの。けれど、桜の花など、近頃は、沁々と肌めたことがないの』



非

「……」

伯耆房は冷りとなつて、師匠の背姿へ瞳をやり、強く唇を噛んでしまつた。

(なんという、心ないことを口にしたことか！)

日蓮は伯耆房が相模国の鎌倉では桜が散つている頃といった言葉から、蒙古国の武力で威嚇しているような国書がきてからの、全身を熱風が吹捲りでもしたような激しさに、花鳥風月と縁がなくなつたようだった幾年間かを、不図、想出して、なに気なくいつたのであつたが、伯耆房に見れば、佐渡国へ渡つて見えてからの師匠の姿を言語に絶する想いで眺めつづけてきているから、胸を刺られる。

「伯耆房よ。流罪地の佐渡で、こうして雪の野山を眺めておると、蘇武を想出してくるの」

一瞬、伯耆房は濃い眉毛を上げて、首を傾げた。

「お師匠さま、漢の武帝の時に、中郎将であつた、あの蘇武でございませうか」

漢の武帝とは、漢の高祖が長安で帝位に即いてから、二百年間、国威を揚げた帝王のことであり、中郎将というのは、側近を衛る将兵の長官である。

「そうじゃ。その蘇武が匈奴に囚われて、大地に掘つた穴蔵へ押籠められ、食を絶たれたが、雪を食ひ、旃毛を噛み、旃毛というのは毛織物の毛のことじゃが、飢餓に堪えて、節を屈しなかつた姿が想われてくるの」

この頃、日蓮は支那の歴史に現れている人物について、伯耆房によく話しかける。

その人物は、迫害に遭いながら節義を貫いて屈しなかつた人たちであり、世を救い人々を救いたい悲願を抱いているために、流罪、死罪に遭つてきているのが身上に似通つているからであつたろうが、しかし、伯耆房に儒学の素養があつて相槌の打てることがあり、教えて受取る力があるからであつた。

伯耆房は流罪地で、二度まで、師の日蓮と寝起きができるのは、師の教えは内典も外典もことごとく受入れる機会に恵まれたものと思つていて、一言半句も聞き漏すまいとして必死になるのだったが、この頃は、時々、身を傾けていて苛立ちを覚えてくる。

それは師匠に許されて「開目抄」上下の筆写を終つた時、幾枚も紙がなくなつており、阿仏房の息子の藤九郎盛綱に頼んでいるのだったが、この佐渡で紙の蓄えのあるのは、武家の邸か寺院だけであり、阿仏房が流人の日蓮に肩入れしていると噂が立つたために、その子の藤九郎盛綱は寺院から紙を手に入れることが出来なくなつていらしいのだ。

(お師匠さま、法門のことを次つぎに書残されたいのであらうに……)

筆もあり墨もあり硯もあるのに、書くことが出来ないために、支那の歴史に現れている人物の話をされるような気がしてくるのだった。

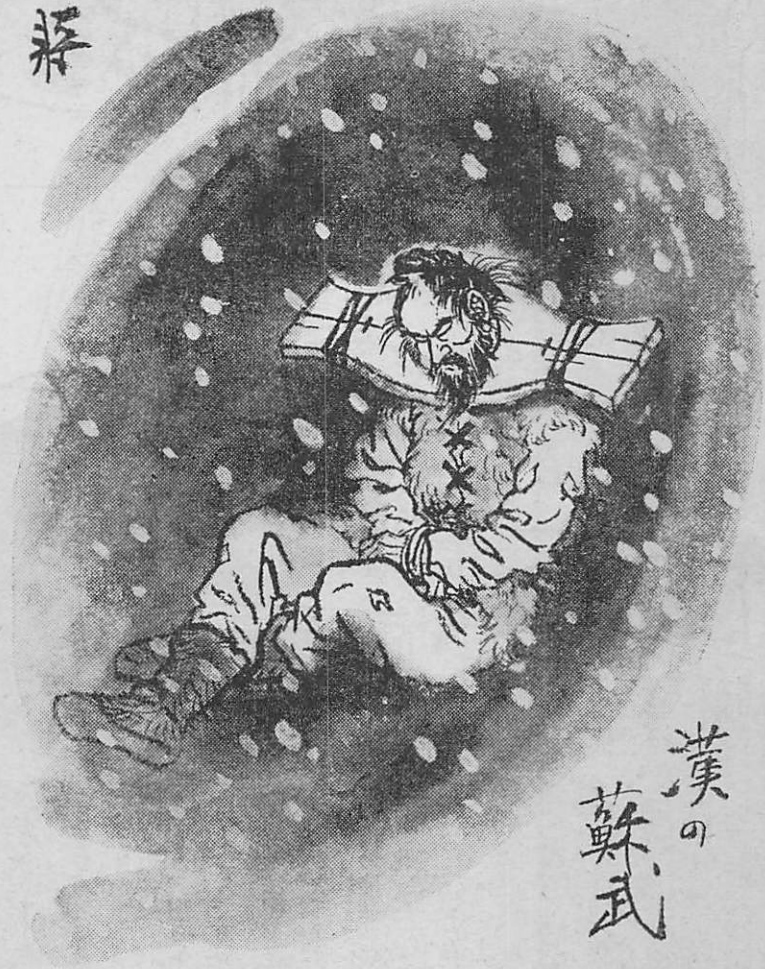
「雪を食ひ、身に纏うておる織物の毛を噛んで、烈しい飢餓に堪えた蘇武の親しい友に、李陵という將軍があつたが……」

日蓮が縁先に立つて、雪の山野を眺めながら話しつづけた時、伯耆房さまァ！ 伯耆房さまァ！

生々としていて甲高い声が塚原に起つた。

「おお！ 藤九郎どのか！」

蔭



漢の
蘇武

(五)

『次郎どのか!』

伯耆房は縁先に立って嬉しそうに微笑み、郎党の次郎へ向って手を挙げてゐる。本間六郎左衛門尉重連が家の子郎党を武装させて相模国の鎌倉へ上って行ってから、朝餉夕餉を運んでくるし、塚原に姿を見せては、絶えず三昧堂を護ってくれている郎党次郎の精悍で一閃な姿が、彼には好ましく嬉しく有難くもあるのだった。

『お師匠さま、本間家の郎党次郎どのは、どこか、伊豆国の伊東家の郎党鬼平次どのに似たところがあります』

『うむ、鬼平次どのといえは、どうしていられるか。和田の森の堂を鬼平次どのが見廻って下さったために、伊豆国の念仏者が懼り恐れて近付かなくなったの』

日蓮は伊豆国へ流された時のことをはるぼると

思出している。

弘長元年に松葉ヶ谷の草庵を役人が襲ってきたのだから、もう十一年も

昔のことになっている。

『次郎どのもなかなか精悍で力も強く、あれでは念仏者も容易には近寄れないと思います。今朝、三昧堂の裏手の方でけたたましい呼声がしてお

伯耆房が紙のことを思つて立ちどくとすると、日蓮の声でした。

『伯耆房よ、本間家の郎党次郎どのじゃ』

伯耆房が縁先へ出て見ると、佐渡国にも春がきて、新しい雪が積らないために薄汚れて見える雪道に、本間重連の郎党次郎が、なにか、両手で抱えてくるのが目に入ってきた。



蔀

りましたので、わたくし縁を下りて行って見ると、次郎どの、なに者かを引摺って、館の方へ行かれるところでありました」

郎党の次郎が眉にも眼にも、丸々と肉のついている顔にも譬えようもない喜びの色を漲らせて近付いてきた。

「伯耆房さま！ 昨日、松ヶ崎へ船が入り、依智の本館から使者の者がまゐりまして、聖人さまへの信者さんの贈物を届けました！」

「なに、信者の贈物……」

日蓮の眉尻の垂れている太い眉毛が動いて、伯耆房よりも先に訝りの声が出た。

「今日か、明日かと、鎌倉幕府が死罪に行えと命令してくるのを心待ちしているからであった。」

「南無妙法蓮華経！」

郎党の次郎は雪道を三昧堂の前へくると、日蓮を眩しげに仰いで頭を下げ、肉の隆起っている両腕で広蓋を抱えたまま大声で題目を唱えた。

誰に教えられたのか、誰に習ったのか、教える者もなしに、三昧堂を護つてくれている内に、自然にそうなったのか……世俗の塵に染んでいない純真な若者が、尊い題目を力強い声で唱えている嬉しさに、日蓮は胸の内を熱くして、伯耆房と共に、次郎へ向って合掌した。

「次郎どの、御苦労でした」

伯耆房は縁先へ膝をついて、贈物の載っている広蓋を受取った。

「南無妙法蓮華経！」

次郎は顔を真赤にして、ふたたび、大声で題目を唱え、日蓮へお辞儀をして踵をかえすと、一散に雪道を斬けて行った。

「ほう！ 富木どの、長筆五管と墨三挺、それに帷巾を供養して下さったか」

日蓮は堂の隅へ坐つて広蓋を前にすると、真先に、筆と墨へ眼を止め、それに附けてある「富木五郎左衛門尉胤継」と認められた名札を手にとつた。

「相模国の鎌倉には、自界叛逆の難が起つて合戦もあつたに、富木どの、御息災と見ゆるの！」

たとえ、身分は低くとも、幕府で役人をしていれば風当りは烈しいのに富木胤継は信心に微動も見せない……日蓮が名札に見入っている切長な両眼が潤んできた。

「この白厚綿の小袖は、池上右衛門太夫宗仲どの、伯耆房よ。今年の冬は暖かに凌げそうだ。弟の兵衛志宗長どのは、この布袋じゃが、なにが、入れているのか」

伯耆房は巾着のような形の布袋を取つて、括りの紐を解いた。

「お師匠さま、鷲目が入っております」

「なに、鷲目……この日蓮が佐渡国での不自由を助けようと、池上どの兄弟は額を寄せられてさま／＼に話合われたことであらうよ」

武蔵国の池上千束郷に邸を持つて池上左衛門太夫康光は、幕府の工匠として重きをなしているが、極楽寺良観の熱心な信者なので、その子宗仲、宗長兄弟は、俗の叔父に当る日昭に導かれて法華宗に帰依したものの、父子の間には風波が絶えないらしい。

「極楽寺良観の帰依をやめない、父康光に気をかねながらの供養、有難いと思ふ」

日蓮は贈物を前にして合掌している。

「お師匠さま、ここに筒御器と串柿が五把ございます。名札……には太田の五郎左衛門尉兼明と……認めてございます。はて、酒の匂いのような」

伯耆房は師匠に名札を渡して、筒御器を両手で持つて匂いを嗅いでいる。

「伯耆房よ。それは酒であろうよ。太田どのは下総の方で、荒削りに見える武士であるが、なかくに細やかな心遣いのある人、この日蓮が佐渡の雪に難渋しておるであろうと察して、酒を供養されたのであろうよ」

日蓮の切れの深い両眼に慈愛が光り、太い眉毛の眉尻が下っている。

流罪地佐渡の春というのに雪の消えない塚原の荒堂で、頼母しい信者たちにくまられたような想いがしているらしく、褪せた色の法衣の下で厚い胸板が大きく息吐いている。

「ヤッ！ これは、薬の袋！」

伯耆房が紙包を開けて叫んだ。

「お師匠さま！ 四条中務三郎左衛門尉頼基どのが、お薬を届けて見えました！」

「おお！ 頼基どのは薬か！」

一瞬、日蓮の声が高くなり、太い眉毛の眉尻が額へ躍るのを、伯耆房は見た。

「頼基どの！ どのように、この日蓮を案じ気遣つておられるか！」

日蓮は伯耆房から名札を受取つて懐しうに見入っている。

去年の秋、九月十二日の夜、馬の轡をとって竜の口の刑場へきた四条頼基が、日蓮と共に死ぬ覚悟、法衣を纏んで嗚咽している姿があり／＼と目

に見えてきたのであった。

(六)

上弦の月が、鋭く研いだ鎌のように、佐渡の夜空にかかっている。

雪の消えない塚原が、仄かな月明りに青白い。

その塚原にある三昧堂の周辺を、先刻から、黒い人影が廻っているが、時々、人影の近くで青白い光芒が閃めく。

本間重連の郎党次郎が薙刀を抱えて、河原田の本間山城兵衛入道の家の子郎党が、今朝の失敗をとりかえそうとして、夜の塚原へ現れるのを警戒しているらしい。

空に雲がなく、春らしい暖さの微風があったが、本間重連の新穂の館を包んでいる杉林はひっそりと鎮りかえている、静かな夜であった。

日蓮は三昧堂の縁先で、上弦の月を眺め、荒涼とした感じの雪の塚原を眺めながら、酒杯を唇へ持って行つては、酒を含んでいる。

『伯耆房よ』

『はい、お師匠さま……』

伯耆房は銚子を手にして、闇に馴れた眼で、微な月明りと雪明りに透しては、師の日蓮を見ている。

『竜の口で頸を刎ねられた魂魄が、酒を呑んでおる、は、は、ははは……』

目蓮は陶然となつてきたらしい笑顔を揚げておる。

伯耆房は銚子を手にして、危うく落ちそうになった涙を堪えて唇を噛んでいる。

(お師匠さま、どのような想いでおいでになることが……)

去年の秋の九月十二日の夜は、竜の口の刑場で首の座に坐られ、冬の十一月には、この塚原の三昧堂へ入れられて、凄じい寒気と烈しい飢饉に責められて見えた師匠の胸の内は、側にいる自分のもとよりのこと、何人であろうとも窺い知ることができないであろうと、彼は思っている。

『伯耆房よ』

『はい……』

『宛然、鎌倉や京都に自界叛逆の難が起つたを見るようだぞ』

『えッ！ お師匠さま、それは、どういふことでございますか』

『五臓六腑を駆けめぐるといふ言葉があるが、久方振りの酒、わしの腹中を駆けめぐるのが、合戦の場の人馬を見るようなのじゃ、は、は、ははは……』

『……』

伯耆房は言葉もなく、縁先の薄闇で、切長な眼を瞠っている。

師匠の口から笑ひばかりか、戯言まで出させる酒の不思議を思うのであった。

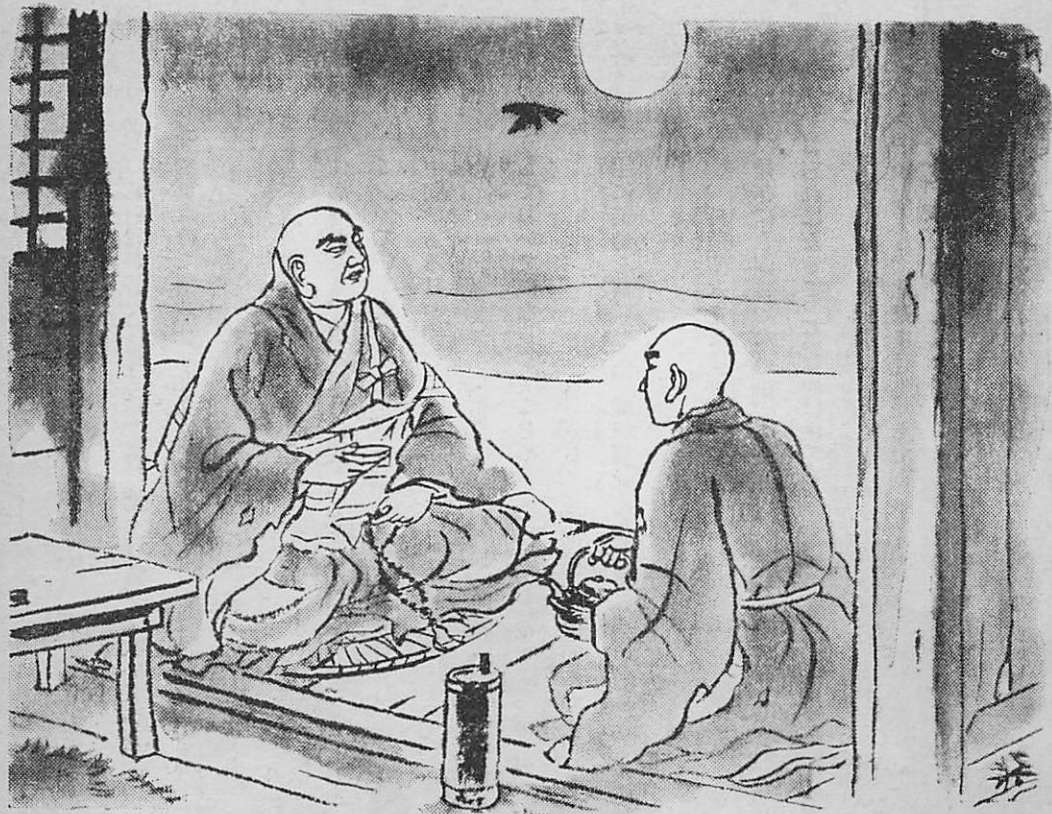
『伯耆房よ、酒……』

『はい、お師匠さま、酌いたします』

伯耆房は酌をするといつても、師匠の手から酒杯を受取り、仄かな月明りと雪明りに透して、銚子の酒を溢さないようにそそぐじかない。

『お師匠さま、酒杯を……』

伯耆房は薄闇を探つて、師匠の手へ酒杯を渡しながら、伊豆国の伊東の頃と同じように、親を慕う子供の気持のようになっておる。



『酒が泌みるよ。腸わたにの』

『伯耆房、酔いが噴上げてくるようじゃ』

『……』

伯耆房は鋭い光芒を放っている上弦の月を仰ぎ、仄かな青白さが沼を想わせる雪の塚原の前にして、荒唐の縁先の薄闇で、師の日蓮と向合い、銚子を手にして酌をしている光景が幻想でもあるかのような不思議な気持がしてくる。

(このような光景は、この世に在り得ないような気がする……)

しかし、日蓮の声は、忽に、伯耆房を現実へ還らせた。

『そなたは佐渡へ共に渡ってきて、苦労したの』

『いえ、わたくし、お師匠さまのお側におりますのが、この上もなく嬉しく、苦しいなど考えたことはございません！』

伯耆房の声には真実が溢れていて、力強い響があった。

『日昭をはじめ、日朗もおり、日行もおり、大進房、日向、伊予房などと、弟子も少くはないに、どうして、そなたばかり、流罪の土地で共に寝起きするのであろうか』

『……』

三昧堂の縁先の薄闇に、師の日蓮の切れの深い大きな眼に見られているのを感じて、伯耆房は息を弾ませる。

『これも、宿世の因縁であらうよ』

『……』

上弦の月のある夜空を飛んで行くらしく鳥の啼声がして遠くなって行った。

(七)

三月中旬の相模国の鎌倉は、一重も八重も散りつくして、葉桜になっており、つつじの紅い花が谷々に見えはじめ、樹々は新芽を吹いていた。

『夜叉、どうされたのであろう。北条さま、あれきりお見えにならないが……』

刀鍛治行光が装束を着けた姿で鍛治小屋を出て足早に住居へかえり、娘の美鳥の髪毛へ櫛を入れてやっている夜叉にそういったのは、三月中旬のある日の朝のことであつた。

『さあ、どうしておいでになりますことやら……』

夜叉は櫛を手に美鳥を前にして、細い眉をひそめた。

『北条の殿さま、日蓮聖人さまに御恩報じしたいゆえ、是非にと仰言ったのですから、真逆、お忘れになることはないはず……』

『お母さま、わたくし、北条さまを呼んできましうか』

美鳥は派手な模様のある小袖に、暖い春の陽しさを浴びて坐っていたが、両親の

話を耳にして、母を振りかえつた。

『そうね。北条さまのお邸は、そなたには判っておるのだから……』

夜叉は美鳥に首肯して見せながら、行光にいった。

『あなた、佐介ヶ谷へは、美鳥に行ってもらいましうか』

行光は首を傾げて、夜叉に同意しなかつた。

『美鳥では話せまい』



『え……なにを話すのですか』

『この行光が、あの太刀をお譲りする気になっておることを……』

『そのようなことをお話ししなければならぬのですか』

『うん、ことによると、北条さま、この行光が精根を絞って鍛えた太刀を譲れなどとはないことをいうた後悔しておいでかも知れぬ。そなたなら、わしの氣持をお伝えできよう』

『ああ、そうですね。それでは、わたくし、美鳥と一緒に佐介ヶ谷へまいります』

夜叉は膝を立てかけたが、奥の部屋へ視線をやって、案じ顔になった。

『お父さま、どうして、あのよう眠ってばかりおいでになりますのやら

……』

『夜叉、お身体の具合が悪いのではないのか』

行光の疲労を回復してきている顔にも強い氣遣いが浮んでいる。

『お父さま、わたくしがお尋ねしますと、もう年齢じゃ、心配するなど仰言います』

夜叉の眼ざしに濃い不安の翳りがある。

『弘助さんが太刀を研いで見えて、大層、お賞めになった時、お父さま、お祝いの酒に酔くお酔いになったでしょう。あの頃から、目に見えて、お元気がなくなってきたように思います』

『わしの眼にも、そのように映っておる。このまま放って置くわけには行かぬ。北条さまにお願いすれば、京都の医師が鎌倉へきておるかも知れぬゆえ……』

『あなた、北条の殿さまにお願いして下さいませんか！』

夜叉は俄に活氣付いてきた。

いかに、親が年齢を重ねていようと、いつまでもいつまでもくと希うのは、子の情である。

『よし！ お願ひして見よう』

『美鳥！ さあ、佐介ヶ谷へ行きませう』

夜叉は美鳥を促して立って、行光の横を土間へ下りた。

『あなた、では、急いで行ってまいります』

『おお、北条さまに、この行光の氣持をよくお伝えしてくれ』

夜叉が娘の美鳥を先に立てて小徑を下って行く台地の斜面の雑木は薄緑、濃緑、茶緑などの新芽を吹いていて、北条弥源太入道の裾の直垂の肩へ花びらを落していた彼岸桜は、蟬の羽根のような茶がかった葉を繁らせていた。

稲瀬川の上流へ小徑を下って行った時、美鳥は振りかえって、夜叉にいった。

『お母さま、北条さま、今日も、お雛さまを下さるでしようか』

『ほ、ほ……美鳥はお雛さまがほしゅうて、北条さまへ行くといったのですね。いえ、そうよ。この間、あなたはお雛遊びをしていて、御夫婦だけでは淋しそう、お友達があればよいのと独言をいっていました。けれど、京都に棲んでおいでのお公卿さまと違って、北条さまは、もうお雛さまをお持ちでないかも知れませぬね』

夜叉が美鳥を伴って訪ねて行くこうとしていた北条弥源太入道は、その時、長谷の大仏殿の横の道を稲瀬川に沿って溯のぼっていた。

(以下次号)

広布への叫び



登山者に望むこと

館岡倉市

輸送を担当している立場から登山される方々に少し申しあげてみたいと思う。

まず集合時間の問題である。輸送班が一番困まるのは、登山者がきめられた時間に集まらないことだ。

毎週登山のたびに注意もし、要望もしているが、いっこうに実行されていない現状である。

総本山に登山して、一箇浮提

総本山の大御本尊様にお目どおりにできることを考えたならば、遅刻なぞできるはずがない。

あいがたき大御本尊様にあい奉り、唱えがたき題目を唱えることのできる、わが身の福運をもっともっと強く感じ、喜びにみちた姿ではせ参ずるべきだと思ふ。

登山会に参加する人のうち、大半は始めて登山する新しい学会員であり、月をおってその数も増加の一途をたどっている現状である。支部の幹部の人たちは、もっともっと登山会の意義を徹底していただきたい。

また、輸送の途中でいつも感

ずることは、列車内の清掃のことである。

富士駅に着いて、みなさんが降りたあとは、表現できないほどのものスゴさだ。

団体列車だから、専用列車だからという気のゆるみもあってのことだろうが、考えなければならぬと思う。

ひとりがこのくらいだからいいだろうという気持でも、積もり積もって、驚くほどのゴミの山になってしまうのである。

「私たちの一挙手、一投足が、すべて折伏に通じている」と池田先生がおおせになったことがあるが、本当にこの点にもっと気をつけていきたい。

本部総会にしろ、青年部の体育大会にしろ、終了後は青年部の手によって、すがすがしく掃除されているのを見て、外部の人たちは驚きもし、敬服もしているのである。

なんといつても、学会行事のなかで一番対外的な目にふれるのは、毎週の月例登山会であると思う。

そういった点からも、おおいに注意しあつていきたい。

総本山における問題としては

申し込みなしに登山する人の多いことである。

旅行のついでに寄ったとか、商売の帰りに寄ったとか、そういう登山のしかたは、よしあしは別として、登山会に参加する精神に反するものと思う。また本山における行事にもさしつかえができてくるのである。

以上、感じたままをのべてみ



ましたが、登山会に参加できることは、私たちにとって一生の名誉であり、思い出の一日として、人生に残るものである。

一人一人が、登山会の意義を知り、始めて参加する人は先輩の指導を受けて参加するべきである。

幹部は、親切に指導していただきたい。そして、登山会に参

加した人が、一人残らず歓喜にもえて、池田先生のおことばを實踐できる、りっぱな学会員になっていこう。(男子54部隊長)

ヌーベルバーグに思う

蟹江光正

最近、フランス映画「勝手にしやがれ」などに端を発して、「ヌーベルバーグ」ということが流行している。

これは「新しい波」という意味だそうである。

現代に生きる多くの青年たちが、「スピード」「暴力」「セックス」等の、せつなな快樂に、もてあました若い力をはき出して

いる。それを、極度に赤裸々にえがきだしたのが、ヌーベルバーグだということだ。

「新しい波」と呼ぶには、あまりにも濁った、なまけないものではないか。

私は世の識者に訴えたい。ヌーベルバーグでさわぐ前

に、今日日本に流れている、大きな潮を、大きな目を見開いて見よ。

全国のあらゆるところで、りっぱに人間革命をしながら、日本の、いな世界の築土建設をめざして、若い力をそん分に發揮している三十数万の若き男女—日蓮正宗創価学会の青年部員を見よ！と。

かつて、恩師戸田城聖先生は「新しき世紀を作るものは、青年の熱と力である」と、また、「一國の消長は、その國の青年の姿を見ればわかる」ともおおせられた。

見よ、第三文明建設を台ことに、一人一人が功德を受けきつた姿をもって、怒とこのような大進軍をつづけている、創価学会こそ、日本の潮であり、世界の潮ではないか。(男子26部隊)

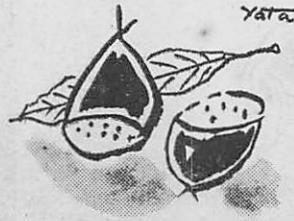
死にたくなる念仏宗

経田 清

先祖代々浄土真宗の信者だった私は、聖教新聞の「念仏はあ

きらめと無気力の宗教」という記事で、何を創価学会はうまいこと宣伝してるかと、気にもとめなかった。

しかし、念のためと、家へ帰って念仏の開祖善導のことを書いた本をひっぱりだしてみた。読んでみると、「弥陀経を誦して十万辺から三十万辺にいた



るもの、あるいは日課に念仏を一万五千辺から十万辺にいたるもの、あるいは高嶺から身を投げ、あるいは柳の樹にのぼって投身し、あるいは火の中にはいつて命を捨てて者などがたくさん出た。

その教化の尋常でなかったことがうかがわれる」とあるではないか。寝てもさめても、念仏せよと

いわれて、たくさん念仏をあげるほど死にたくなるというのにはゾッとしました。

考えてみると、私が学生時代たびたび生きていたのがいやになつたのも、先祖からの念仏のせいだったので。

それから間もなく、創価学会の一員になり、大御本尊様を信じてお題目をあげるようになり、今では毎日いきいきと楽しく生活しております。

それにしても、気の毒なのはなにも知らずに念仏を信じている人々です。

一人のこらず折伏してあげたいものだ、と、念願しています。(岡山支部)

コスモスの花

芦田 信子

ゴミクメのすみで、コスモスの花が咲きました。

(夫をうらんではいけません。わが身をなげいてはなりません。御本尊様にお願いききって行くのですよ)

藤井日達を破す

山川 巖

大法輪の十月号に、日本山妙法寺の藤井日達が、会長池田先生より「大聖人様の仏法を誤まって弘める邪教の姿にすぎない」と破折された腹いせに、またまた狂論をふりまわしているのを破折しよう。

まず、「あらゆるものに仏性があるから、なにを拝んでもよい」といって、大般涅槃經の文を引いているが、これはまるっきり仏法を知らないものの議論だ。

十界互具も、一念三千もあつたものではない。三歳の幼児でも、学会員の子どもなら知っているぞ。

仏性があるから、正しい本尊を拝めば成仏できるのではないか。

そのつもりで、法華初心成仏抄を拝すれば、「我が己心の妙法蓮華経を本尊とあがめ奉り」とは、大聖人様己心の妙法、すなわち大御本尊様で

あることが明白ではないか。それを、「自分たちの仏性」と曲解するから、馬の糞でもなんでも拝めということになるのだ。

その上、松野殿御返事を引用して、「不輕菩薩は衆生を拝んで成仏したではないか、大石寺の一圓浮提總寺の御本尊を拝んで成仏したのではないぞ」と、血迷って、氣違いのようにわめきちらしている。

末法の今は、不輕菩薩のような修行では成仏できない時である。

本尊問答抄の「法華經の題目を以って本尊とすべし」の御文を、頭を冷やして拝してみよ。

平和運動の美名にかくれて大聖人の仏法にそむくやからは、無間地獄疑いなしである。大聖人の御金言を用うるももつたないが、頭破作七分の藤井日達に迷わされた人々におくる。

「汝早く信仰の寸心を改めて速に美乗の一善に帰せよ」と。

(男子18部隊)

きょうもまた、酒乱の夫が割ったチャワンを捨ててきた妻のあきらめそうになる心に、そう呼びかけるような、暖い色をした深紅のコスモスでした。

「もうコスモスの花が咲くころになりましたよ」

と、白衣の人が、心ずくして花圃から切ってきてくれた花を、枕辺にさしながら、病む妻はまだ朝露の残っている真っ白なコスモスをみつめていました。

自分の入院中に、夫が若い女を家にひきいれているといううわさに、なにかしら割切れないシコリが、スートツとからだのなかをとおりぬけていくような、さわやかさを感じたのです。

(あなた、長い間ご不自由をかけてすみません)

妻は、その場にはいない夫に向かって、やさしく呼びかけるのでした。

「もう暖いものの方が、おいしいですね」

牛乳ビンにさしたピンクのコスモスがゆれている食卓で、妻はやさしくいって、夫のチャワンにイモがゆをつぎました。

会社の解散で係長の職を失な

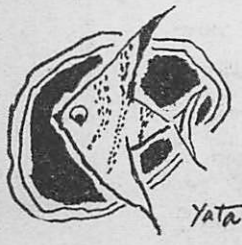
った夫は、身を落しきることができずに、もんもんの日を送っていました。が、御本尊様をいただいてから、勇気をだして労務者としての第一歩を踏み出したのです。

「やさしい花だね」と、夫がいました。

未来の幸福を信じ切っている明かるい妻の目でした。

そしてコスモスが散り、また咲きました。

ボッポツ道具のふえてきた部屋で、酒乱だった夫は、かあちゃん第一主義者になって、一二



合の晩酌を楽しむようになっていました。妻はうれしそうにみる人くる人を折伏してしま

病んでいた妻も、元気になって退院して、組長となった夫といっしょに、時々療養所へきては折伏しています。

「ずい分さがしたよ」といってたずねてきた社長に望まれて、再建した工場へ、再び係長として復職するまで、イモがゆをすすりながら、夫を励ましてきた妻は、今は班担当員として、したわれる婦人になっていました。

どこにでも咲いていて、やさしく人の心に呼びかけるコスモスの花のように、接した人の心についてつまでも忘れられない面影をとどめていく、謙虚な婦人でありたいと、信心をみがいていく日々でありたいと思ひます。(梅田支部)

写真に写った私の顔

秋山多恵子

この間、長年ほうっておいたアルバムの整理をしました。

思い出を楽しみながら、整理の手を進めているうち、ふと気がついたことがあります。それは、入信前と、後の私の



思い出を楽しみながら、整理の手を進めているうち、ふと気がついたことがあります。それは、入信前と、後の私の

人相があまりに違うことです。

幼いときに父と死別し、生活は苦しく、不幸があいついできました。

それでも「人間はマジメに世間をわたり、神仏をうやまい、美しい心で人につくせば必ず報いられて、しあわせになれる」を信条にして、神社に朝参りをかかさなかった。

就職して家を離れてからは、氏神の境内の小石と、失祖の戒名、家中の守り札を小さな箱に集めて、朝晩一心に拝みました。

友達にくらべてなにをやっ

もおもしろくなく、原因不明の微熱が出て病名もわからず、劣等感にさいなまれた日々。

そのころの私は、ゆるいので、写真をみてもゾーッとよすががただようような気がして、思わず破りすてたこともしばしばでした。

神経すい弱で、夜も眠れない日が続き、死場所をさがして、あるきまわりました。

そのころの写真は、私は一目見るなり破り捨てました。この世の人の顔ではなかったのです

三年前、小箱を焼いて、正宗に入信しからは、半年一年と、毎日が楽しくなり、同僚にはかわいがられ、社長には重要視され、月給も倍になりました。

なにごとく御本尊様にお願ひする最近の私の写真の顔は、はればれとして、かわいらしい顔にうつり、焼きましてもしたいような気持ちになってきます。入信後の写真は、ドンドンふえて、アルバムをかざっていき

ます。ちょうど御本尊様からいただいた、功德と同じように。

(女子部部長)

読者の声



自然な信心の姿を

物語「時代に生きた青年と宗教」と、「インド・中国・日本の歴史」とは、内容は違いますが、仏法と社会の変遷との関係を、中心人物を主体にして書いていただけたらと思います。

グラビア写真で、各総支部が終りましたら、社会の各層の同志の、自然な信心の姿もよいのではないのでしょうか
巻頭言葉集、大幹部の方の講義を連載していただきたい。(男子23部隊 加賀谷孝一)

教学をやる気になる

九月号のつた、恩師戸田先生の質問会を、大変なつかしく、思い出をあらたにして何度も読み返しました。

時代に生きた青年と宗教は歴史というものがわかって、ほんとうによいと思います。

また、私はこうして教学をやったという体験には、胸をうたれるものを感じました。今まで教学の試験には自信がありませんでしたが、この頁を読んで、教学をやるとうゆう気分が強くなりました。

(杉並支部 横井川欣子)

体験談で確信がわく

どこから手をつけ、どうやって学んでいこうかと、迷ったりあせっている私たちに、先輩の私はこうやったとゆう体験は、教学への情熱と確信をもえさせたしてくれました。

また、大幹部の体験談はいつも読んでいます。

にごった信心が、清められる思いで、力強い確信がわきあがってくるようです。小説は、今のページ数でよいと思います。

(男子16部隊 阪井鶴和)

レイアウトが固い

九月号は私たち初信者には

とっても勉強になりました。私たちの知りたいことをのせていただいて、本当によかったですと思います。

ただ、内容の充実している反面、紙面のレイアウトが全体に少し固いようですが、もう少し目で見える要素も加わってよいのではないのでしょうか。

どうぞ私たちを、明るく楽しく、生き生きとさせてくれる大白蓮華にしてください。

(向島支部 谷田孝三郎)

読みやすくなった

巻頭言のページはもう少し考えてほしいと思います。なにかパツとしない感がします。戸田先生の質問会、大幹部の体験談は、できるだけ続けてください。

教学特集は大変参考になりました。私はこうして教学をやった」とゆうような趣旨のページを、今後ものせてください。

以前とくらべて、写真やさし絵が多くはいつて、大変読みやすくなったと思います。

(福島支部 伊東広信)

境涯開いた体験も

教学についての特集は、大変よかったです。

初信者には教学部の現状を示し、教学の重要性を訴え、また信心の古い人には、教学の求道研鑽の道は、剣豪の修行のごとき厳格な鍛練だと強調されて、感銘が深かった。

困難な状況のなかで、真剣に、きびしく教学を求めている人の体験には、私の教学に対する怠慢な心を責められた。教学の研鑽をとおして、力強く境涯を開いた喜びと感激の体験も掲載していただけたらよかったです。

(男子96部隊 工藤浩一)

誹謗記事の破折を

広く社会に目を向けたものが多くなつて、内容が非常に充実した感がします。

第三文明の特集はすごく面白かった。

反面、初信者やとしよりにはずかしくて、読みにくいとゆう声もあります。

内容別にわけて、いろいろなページをもうけたらどうでしょうか。

また、学会の行事に対する世間の見方や、感想なども知りたいと思います。

他の雑誌等の学会誹謗記事はもろさずに破折して、のせてください。(二女子学生部)

文芸欄がほしい

大白蓮華に、文芸欄をもうけてほしいと思います。

どしどし投稿をつのつて、楽しい、親しみやすいページにしていったらいかがでしょうか。(尼崎支部 池 絹恵)

青年部の体験も

御書拝読の手引き、十大部の解説、講義など、教学に関するページを、もっとふやしていただけたらと思います。

また、青年部の大幹部、部長の体験も、ぜひ発表してください。(男子93部隊 小林 功)

☆編集部員になつたつもりで大白蓮華について皆さんの建設的なご意見、内容についての感想、希望などを、編集部あてにお寄せください。

大白蓮華 第百十四号(十二月号) 昭和三十年一月十八日 第三種郵便物認可
昭和三十一年十一月一日発行 毎月一日発行

編集兼 多田省吾 印刷所 東京都板橋区宮前町五番地
凸版印刷株式会社

発行所 東京都新宿区信濃町三ノ六 宗教法人 前橋学会 頒価五十円

